上河内村文化財調査報告書第3集

梨木平遺跡

第4次調査報告書

（縄文時代中期袋状土壙の研究）

昭和50年3月

上河内村教育委員会

序　　文

梨木平発掘については，昭和46年．47年度に第１次，第２次発掘を実施し，48年度は村単事業として第３次発掘，そして，49年度に最終的な第４次発掘を実施した。

第３次分は，住居跡の確認と，第４次の事前調査が主なねらいであった。

第４次は，50年７月29日から８月30日まで約１か月，面積約 750㎡ と，経費面積とも従来にない大規模な発掘となった。

その結果，土壙が23基，完形土器27個とおびただしい破片，さらには耳栓２個と第２次と同様の硬玉大珠１個が出土した。破片は，県資料館において着々復元中であり，完成が楽しまれる。

ピット中の孫ピットについては，今後の解明に期待される。

今回をもって全作業を終了するが，遺跡出土品は数においても価値においても驚異的なものがあり，考古学的な価値の外，村民の埋蔵文化財に対する関心の深化，児童生徒の郷土再発見の意義は高く評価されよう。

ただ，発掘面積は梨木平のほんの一部に過ぎない。もっと掘り続けたいが，心残りのまま終了する。掘らないことが最大の保存であるという常川先生のおことばに従って。

作業を担当された宇都宮中央女子高校の海老原先生。県教委の常川先生，さらに，宇大の考古学研究クラブ，矢板中央高校の社会科研究クラブの皆さんに，心からお礼を申上げる。また,第１次以来継続して作業を奉仕された高松部落の山びこ会の皆さんにも，厚く感謝申上げたい。

昭和50年３月31日

上河内村教育委員会教育長

猪　瀬　正　男

例　　言

1．本報告書は栃木県河内郡上河内村高松に所在する縄文時代中期の遺跡，梨木平遺跡を上河内村教育委員会が主体者となり昭和46年より4年間にわたり発掘調査を実施したのであるが，今回は第3次調査の一部と第4次調査をまとめて報告したものである。

2．第4次調査は予算総額 200万円で実施した。内訳は国庫補助 100万円，県及び上河内村が50万円ずつ負担したものである。

3．本報告書の執筆は海老原郁雄，常川秀夫が行ない，土器類の実測は常川秀夫と水品信男，図面のトレースと写真は常川秀夫が行なった。

4．第4次発掘調査の調査組織は次のとおりである。

調査主体者　上河内村教育委員会

調査担当者　海老原郁雄（栃木県立宇都宮中央女子高校教諭）
常川　秀夫（栃木県教育委員会，文化課指導主事）

調査補助員　三品信男，苗木陽子，大森孝子，相馬　靖，押田繁信，
中田真智子，豊田幸子，山口京子，杉山京子，水谷和子，
新井喜明，柿沼　誠（宇都宮大学考古学研究会）
鈴木　勝（矢板中央高校教諭）
磯　一美，喜佐美礼子（矢板中央高社会クラブ）

調査参加者　中山トシ子，小寺元子，中山チイ子，渡辺マサ子，中山トミ子，
中山イサ子，佐藤明子，中山経子，中山朝子，漆原次枝，
渡辺悦子（高松地区，やまびこ会）

調査協力者　市塙傳一，花塚庸雄，佐藤傳作，江連　基，古橋敏雄（上河内教育委員，文化財調査員）

事　務　局　教育長＝猪瀬正男，教育次長＝大岡義男，古橋喜太郎，小林力，
所　康夫，横塚悦子，中山由美子，高橋　誠，

目　　次

教育長序文
例　　言
第１章　発掘調査にいたる経過と調査概要……１頁
第２章　発掘日誌……３頁
第３章　地理的環境と付近の遺跡……５頁
第４章　発掘経過，所見……７頁
第１節　各区の調査概況……７頁
第２節　ピットの発掘状況記述における留意点……14頁
第５章　袋状土壙……17頁
Ｐ－１……17頁
Ｐ－２……20頁
Ｐ－３……24頁
Ｐ－４……25頁
Ｐ－５……25頁
Ｐ－６……28頁
Ｐ－７……30頁
Ｐ－８……32頁
Ｐ－９……35頁
Ｐ－10……38頁
Ｐ－11……40頁
Ｐ－12……43頁
Ｐ－13……45頁
Ｐ－14……46頁
Ｐ－15……49頁
Ｐ－16……49頁
Ｐ－17……50頁
Ｐ－18……53頁
Ｐ－19……59頁
Ｐ－20……61頁
Ｐ－21……62頁
Ｐ－22……63頁
第６章　ピットの機能についての考察……64頁
第１節　ピットの廃絶パターン……65頁
第２節　子ピットの機能……69頁
第３節　ピット内の遺物に関する二、三の問題……70頁
第４節　ピットの廃絶と群集……74頁
第７章　土器についての考察……78頁

本　文　挿　図　目　次

第１図　上河内村の縄文時代の遺跡……６頁
第２図　空濠断面図と土層模式図……14頁
第３図　Ｐ－６，Ｐ－７，Ｐ－８の切合の模式図……28頁
第４図　添野遺跡及び浅香内遺跡土器実測図……87頁
第５図　浅香内遺跡及び弁天池遺跡土器実測図……88頁
第６図　不動院裏遺跡土器実測図……89頁

図　版　目　次

図版1……遺跡全図
図版2……第4次調査区全図
図版3……P－1，土壙及び土器実測図（No.1）
図版4……P－1，土器実測図（No.2）
図版5……P－1，〃（No.3）
P－2，土壙実測図（No.1）
図版6……P－2，土器実測図（No.2）
図版7……P－2，〃（No.3）
図版8……P－2，〃（No.4）
P－3，P－4，土壙及び実測図
図版9……P－3，土器実測図
P－5，土壙及び土器実測図
図版10……P－6，土壙及び土器実測図
図版11……P－7，土壙及び土器実測図
図版12……P－8，土壙及び土器実測図
図版13……P－9，土壙及び土器実測図
図版14……P－9，土器実測図（No.2）
P－10，土壙及び土器実測図
図版15……P－10，土器実測図（No.2）
P－11，土壙及び土器実測図
図版16……P－11，土器実測図（No.2）
図版17……P－12，土壙及び土器実測図
図版18……P－13，土壙及び土器実測図
P－14，土壙及び土器実測図
図版19……P－14，土器実測図（No.2）
図版20……P－16，P－17土壙実測図
P－16，土器実測図（No.1）
図版21……P－16，〃（No.2）
P－17，土器実測図（No.1）
図版22……P－17，〃（No.2）
図版23……P－18，土壙及び土器実測図
図版24……P－18，土器実測図（No.2）
図版25……P－18，〃（No.3）
図版26……P－19，土壙及び土器実測図
図版27……P－19，土器実測図（No.2）
図版28……P－20，P－21土壙及び土器実測図
図版29……C区1号及び2号土器ブロック遺構実測図
C区1号土器ブロック土器ブロック実測図（No.1）
図版30……〃（No.2）
図版31……C区2号土器ブロック土器実測図
図版32……〃（No.2）
図版33……P－22，土壙及び土器実測図
図版34……P－22，土器実測図（No.2）
A区出土，片口土器，耳栓硬玉大珠実測図

写　真　目　次

写真1　1.遺跡全景　2.第4次調査区全景
写真2　3～7　P－1～P－2　発掘状況
写真3　8～11　P－2～P－5　〃
写真4　12～16　P－6～P－8　〃
写真5　17～21　P－8～P－9　〃
写真6　22～26　P－10～P－11　〃
写真7　27～31　P－10～P－14　〃
写真8　32～36　P－14～P－17　〃
写真9　37～41　P－16～P－18　〃
写真10　42～46　P－18～P－19，C－1号土器ブロック発掘状況。

写真11	47～51	P－22，C－2号土器ブロック，空濠の発掘状況
写真12	1～4	P－1，P－2出土土器
写真13	5～13	P－2，P－3，P－6，P－11出土土器
写真14	14～20	P－11，P－14，P－17，P－18出土土器
写真15	21～29	P－18，P－21，C区土器ブロック出土土器
写真16	30～34	C区土器ブロック，P－22出土土器
写真17	35～50	A区出土の片口土器，耳栓，硬玉大珠，およびP－1出土土器片，石器
写真18	51～71	P－2，P－3，P－4，P－6，P－7出土土器片
写真19	72～86	P－7，P－8，P－9，P－10出土土器片
写真20	87～102	P－10，P－11，P－14，P－16，P－17出土土器片
写真21	103～114	P－17，P－18，P－19出土土器片
写真22	115～123	P－19，C区土器ブロック出土土器片

第１章　発掘調査にいたる経過と調査概要

１．第３次調査までの経過

梨木平遺跡は，河内郡上河内村高松に所在する縄文時代中期の遺跡で，栃木県遺跡目録通番号1233号として登録されているものである。

舌状台地の面積は約４ｈａで畑地中からは阿玉台式，加曽利Ｅ式の土器片，石鏃などが採集されており，大集落址として知られていた遺跡である。

しかし，地元の人々は，同地域は昔，城があったと言っており，矢ノ根石が沢山落ちていることから昔の合戦場の跡であろうと考えていたようである。

ところが，昭和45年，農林省が西鬼怒パイロット事業として小倉地区に水田造成を実施し，その客土用の土を梨木平遺跡に求めてきたのである。そして，約 3.2ａの土取工事を開始したのである。

工事中ブルドーザーの運転手が縄文式土器の壺を発見したことから，　この台地が遺跡であることを知り上河内村教育委員会に通報したため，同委員会は土取工事の中止を要請し，直に県教育委員会と協議した結果，国庫補助を受けて２カ年事業として発掘調査を実施し，その後，土取工事を再開するという結論に達したのである。

第１次調査は国庫補助を受け，次のとおり実施された。

期　間　昭和46年７月26日～８月11日
予　算　700,000円
主体者　上河内村教育委員会
担当者　塙　静夫（作新学院高等部教諭）
　　常川秀夫（県教委文化課指導主事）
補助員　宇都宮大学考古学研究会

調査結果　第１図のとおり，20ｍ×20ｍの地域を調査したのであるが，予想を上回る袋状土壙群が発見され，総数は43基となった。

同地域には盆栽などに使用する鹿沼土に似た赤褐色を呈する今市軽石層と呼ばれる崩れやすい地層が表土下70～80cm堆積しており，袋状土壙の壁を確認するのに困難をきわめている。ししたがって，土壙の形状が原形をとどめているものはなく，土壙の口の部分が崩落して底面から垂直に立ち上っているものもある。

土壙の規模は，平均的なものは底径 150cm前後のもので，最大のものは底形 182cm，深さが 196cmの11号ピットであった。43基中11基の土壙には直径30cm～50cm，深さ20cm～57cmの小ピットがあり，この小ピットの用途については，柱穴，水抜き穴，特殊な食料の貯蔵穴などの意見は出たが結論はでなかった。

土壙の形態を分類するとすれば次のような分類が可能である。①，今市軽石層中に作られているもの。②底面を今市軽石層とローム層の境目にしているもの。③ローム中まで掘り込んでいるもの。

出土遺物，土器としては加曽利Ｅ式比定のものが主体を石め，その他阿玉台式の破片が出土しているが，曽利式比定の深鉢が１個体出土していることが注目される。

石器類としては最も多いものは敲石，磨石であり，石皿は破片だけである。磨製石斧は小形の完形品が２個，大形のものは全て破片である。その他打製石斧と石鏃であるが，出土状態は土器片などと共に廃棄された状態であった。

炭化物としてはクルミと不明炭化物が２種類である。

第２次調査は第１次調査の袋状土壙の密集度から考えて，第１次調査の数倍の規模で調査することが必要であることが感じられたのであるが諸事情により，第１次調査と同額の予算

700,000円で，第１次調査と同じ組織で昭和47年８月21日～９月４日までの15日間実施した。

調査概要は次のとおりである。

まず，第１次調査で確認された袋状土壙群の東の範囲を確認するため，３ｍ×17.5ｍのトレンチを南北に２本入れた結果全面に袋状土壙があることが判明したため，さらに東西に３ｍ×12ｍのトレンチを２本入れ，さらにＢ区に２ｍ×40ｍのトレンチを入れた結果38基の土壙が発見され，うち完全に袋状土壙を呈するものは13基であった。

今回の調査で特筆された点はP_3，P_5，P_{14}，P_{23}，の４基が同一個体の土器片の出土から同時開口していたことが認められた点であった。

Ｃ区のトレンチ中からは，石囲い炉と埋甕が発見され，住居址であることが判明したのであるが発掘期間の都合で完掘できず次回の調査をまつことになった。

出土遺物としては前回同様で，土器は加曽利Ｅ式が主体をなし，阿玉台式の破片が出土している。その他，耳栓と硬玉大珠が１個ずつ出土している。

第３次調査は，第２次調査の規模が小さかったこともあり，土取予定地の多くの部分が未調査のため，最終調査を行なうべく予算額1,500,000 円で国庫補助の申請を出したのであるが，当初２カ年で調査を行なう予定であったこともあり，国の補助金は交付されなかった。

しかし，地主の土取りしたいという強い希望もあり，また村の財政では未調査の部分を調査できる余裕もないため，48年度は村の全額負担で予備調査を実施し，再度，49年度の国庫補助を申請する資料を得ることになったのである。

第３次調査は，昭和49年３月16日～３月29日まで14日間実施した。

主な作業は第４次調査予定地をトレンチ及びグリット法により遺構を確認することと，第２次調査で完掘できなかった住居址の部分の調査することであった。

その結果，同地域の北側の部分には多くの袋状土壙があることが判明した。また，住居址は第２次調査で石囲炉，埋甕が発見されているが，これらのレベルが異ることから，重複していることが推定されていた。

調査の結果，崩れやすい今市軽石層中に構築されているため明確に規模を把握することはできないが，埋甕を伴う住居は平面プランは楕円形で壁の周囲に並ぶ支柱穴から推測すると，４ｍ× 4.5ｍ位の規模と思われる。この住居址をひとまわり拡張し床面も高くし，石囲炉を設けた拡張住居址があり，規模は4.9×5.1ｍであった。

２．第４次調査の経過

土取工事を中止してから４年間を経過し，この問題に対し結論を出す必要にせまられているため，不安もあったが国庫補助を申請したのである。その結果，昭和49年５月に文化庁より補助金交付の内示があったので早急に組織作りにとりかかった。

第１次，第２次調査において，主任調査員を担当された塙　静夫先生が昭和48年より芳賀郡芳賀町にある谷近台遺跡を調査されており，梨木平遺跡と同時期に同遺跡の調査があるため，縄文時代中期を中心に研究されている海老原郁雄先生（宇都宮中央女子高校教諭）に主任調査員を依頼し昭和49年７月29日～８月25日までの予定で調査を実施することになったのである。

調査は８月の炎天下で行なわれ，午後には雷に悩まされ，最終日には台風にみまわれるという状態であったが，多くの成果を得て，無事終了することができた。

梨木平の発掘調査については，４年間にわたり，上河内村教育委員会の少ない職員の全力を投入していただき，また昭和44年の東北縦貫道の発掘調査以来，文化財の保護に関して積極的に協力していただいた市塙傳一氏はじめ，文化財調査員の方々，地元のやまびこ会の皆さまに深く感謝する次第であります。

第2章　発　掘　日　誌

7月30日　晴

発掘調査初日。現場にテント小屋を設置，器材を準備する。上河内教委と担当者との作業についての最終打合せ。雷雨。

7月31日　晴

A′区を設定，表土を剝ぐ。前回の第3次調査と対置する東側の部分。表土が薄いのでグリット方式は止め一括剝取する。雷雨。

8月1日　曇

A′区の表土剝ぎ進行中。南北方向に溝状の落ちこみを視認。江面基村文化財委員の協力あり。午后小雨。3時で作業打切り。雷雨。

8月2日　晴

A′区の表土剝ぎほぼ終了。溝状遺構の規模がわかる。夕刻雷雨。

8月3日　晴

A′区の溝状遺構を3ヶ所試掘。内部から縄文土器片，カワラケ出土。南端部分で骨片。この区にピット2個の開口面を視認。午后A区を設定。表土剝ぎ開始。夕刻雷雨。竹沢謙・石川 均 文化課員来。

8月4日　快晴

昨夜の雷雨で発掘中のあちこちに泥土の溜りができている。炎暑。時に涼風。蝉騒し。A区をA－1からA－4の4区に分割。A－4を除き表土を剝ぐ。A－2の表土から滑車型耳飾り出土。A′区は，溝状遺構の断面を見るため切り下げる。2つのピットを掘る。1つは偽物。1つをA′区P－1（後の整理番号でP－1）とし，西半分を掘り取る。内部から土器個体出土。夕刻雷雨。平野隆夫県庁職員来。

8月5日　晴

A－1・2・3の表土剝ぎ終える。A－4は進行中。A′区の溝の断面図取り。P－1の断面出る。夕刻雷雨。矢板中央高 鈴木 勝教諭，生徒参加。

8月6日　晴

A－1・2・3・4の表土剝ぎ終え，各ピットの輪郭を視認。P－1の図取り。溝の断面写真撮る。夕刻雷雨。

8月7日　快晴

朝ヘリ飛来。村教委職員小林力が上空から写真撮る。ピットをA－1に5個，A－2に2個，A－3に3個，A－2に2個を視認。掘り始める。P－1の西半分を完掘。村の白山神社「関白獅子」。午后2時ごろから飯盛山・高館山上空に黒雲。遠雷轟き稲妻・涼風。4時で作業打切り。夕刻すさまじい雷雨。作新学院塙静夫教諭，大金宣亮文化課員，宇都宮大学生10名（「谷近台遺跡」発掘中）来。

8月8日　晴

A区の各ピットの掘り下げ進行。夕刻雷雨。

8月9日　晴

A区の各ピットを掘り下げる。A－2の黒土中から扁平の硬玉大珠を発見，またピット1個を視認。P－1の床面に子ピット4個。雷雨なし。甲子園開幕。橋本澄朗文化課員来。

8月10日　晴

A区の各ピット進行。P－2は攪乱ひどく開口部不明。「栃木」「東京」「毎日」記者取材。作業員の地元婦人会は河川清掃のため欠席多し。上河内西小教諭連来。岩槻小星丈二教諭来。

8月11日　晴

A－5，6を新設。表土剝ぐ。各区のピットはほぼ掘り上がる。川原由典文化課員来。「谷近台」現場を見学。

8月12日　晴

明日から16日まで盆休みなので，取り上げ

られる土器は全部収納。P－3・4は図取りと土器取り上げ。P－14は肩部の土器取り上げ。P－9は床面ウキの小型ツボを取り上げ。P－10も土器を，P－2で2個体分の土器を取り上げ図取り。A－5・6進行中。作業終了後，現場で乾杯。

8月17日　雨

台風の影響で雨。休業。

8月18日　曇

A－2・4・5・6の各ピットの掘り下げ図面取り進行。ピットがA－5に1個，A－6に2個。3時すぎ少し雨。誰も来ない。甲子園準決勝。定岡の鹿児島実業敗退。

8月19日　晴

むし暑い。A区の全測。B区を新設，石錐出土。各ピットの図取り。甲子園は銚子商優勝。

8月20日　晴

労力の殆んどをB区に投入，七本桜上面まで完掘。遺構なし。疲労甚し。3個のピットは進行中。宇都宮学園中村紀男教諭来。

8月21日　快晴

P－2の規模は依然不明，苦戦だ。西半分を切り取り断面を出す。水品信男健闘。一方朝，C区を新設。表土を剝ぐ。住居址らしい落ちこみ2つとピット5個を視認。1日で表土剝き終える。暑く疲れること甚し。住居址らしいので1号，2号と命名。ついにやったかと一同喜ぶ。市塙委員長来。

8月22日　晴

P－12は「二重底」。その断面を切り出す。C区の1・2号，全ピットを一斉に掘り下げ。1号は土器ブロックの下は平担でなく住居址でないらしい。2号東側で都合5個体の土器，片口の袖珍土器が出土。P－2の断面が出て崩壊過程をつかむ。五十嵐勝利下総考古学会員来。

8月23日　晴

C区の2号も住居址ではないことがわかる。D区を新設，表土剝ぐ。P－2・6・13の図取り。C区の3ピットを掘り下げ。鹿目文雄文化課長来。上河内東小小野美徳・太田勉教諭来。

8月24日　曇

P－2の子ピットに孫ピットがついていてその中にも小さい土器があった。C・D区の清掃。C区の各ピット進行中。人夫の地元婦人会連は日待ち行事「お地蔵さん」のため早退するから，と休息抜き。村教育長猪瀬正男来。川原由典文化課員，宇大生数名を同行し図取りの応援。

8月25日　曇・時折強雨

C区の3ピット掘り進む。台風接近のため時折強雨，全員びしょ濡れ。調査終了予定日で作業未了だが村教委主催の慰労会。

8月26日　雨

台風接近により終日雨。休業。宿酔。

8月27日　曇・にわか雨

C区の3ピットをほぼ掘り上げる。2号の土器取り上げ。C区の全景写真撮る。昨日で台風は去ったが引きずられて北上した前線が停滞しむし暑く俄雨しきり。労力は宇大生3人のみ。テントは吹っとびお茶うけもなし。

8月28日　曇・にわか雨

C区の3ピット掘り終る。P－2の孫ピットを掘り上げる。「猿山」発掘要員の宇大生3名が図取りの応援。A区を清掃，全景写真撮る。

8月29日　曇・時折雨

P－17と切り合う阿玉台のピットを掘る。各ピットの図取り。昼ごろ美しく晴れ上る。暗くなるまで図取り，写真撮りなど。やっと全作業が終了。疲労と満足感と不安感が共存。

第３章　地理的環境と付近の遺跡

梨木平遺跡のある上河内村は，宇都宮市の北約12kmの地点にあり，面積は約47.7K㎡である。

同村を地形的に見ると，大きく２つに分けることができる。東側は鬼怒川の氾濫原で，現状は一面水田地帯となっており，現時点まで確認された遺跡は皆無である。

西側は，宇都宮丘陵と呼ばれる丘陵の一部に含まれ，羽黒山（458m），高館山（476m）などの山々があり，これらの山の間を宮山田から流れる山田川が南下している。

山田川および，その支流の沿岸には多くの遺跡が分布していることが知られている。

さて，梨木平遺跡のある高松地区の地理環境は，写真１の航空写真を見ると，北にある高館山の尾根が南に向って放射状にのび，沖積地に落ち込むのがよく理解できる。これらの尾根を北東に向って分断しているのが東北縦貫自動車道である。このため，わかりにくいが，同遺跡の立地は尾根が東へのびきったところにある舌状台地であり，北と南には谷が入込んでいる。谷は現在水田となっており，水田からの比高は約10m，台地の標高は約180mである。

この舌状台地は南北約 250m，東西 150mで面積は約４ｈａ，図版１のとおり南側が高く，北へ行くに従い低くなる。地理的条件環境を見ると，４ｈａという広い平担地をもつ台地であり，北～西～南にかけては 300～ 400mの山々が続き，東側には沖積地が広がり，鬼怒川の氾濫原まで約 2.5kmという位置にあり，狩猟，採集生活をしていた縄文時代人の生活の場としては最適の地と言えるであろう。

なお，第４次調査までの結果，第２次調査で土師住居址１軒，第４次調査で山城の空濠と思われる遺構も発見されているので，梨木平遺跡は，これらを含めた複合遺跡ということになる。

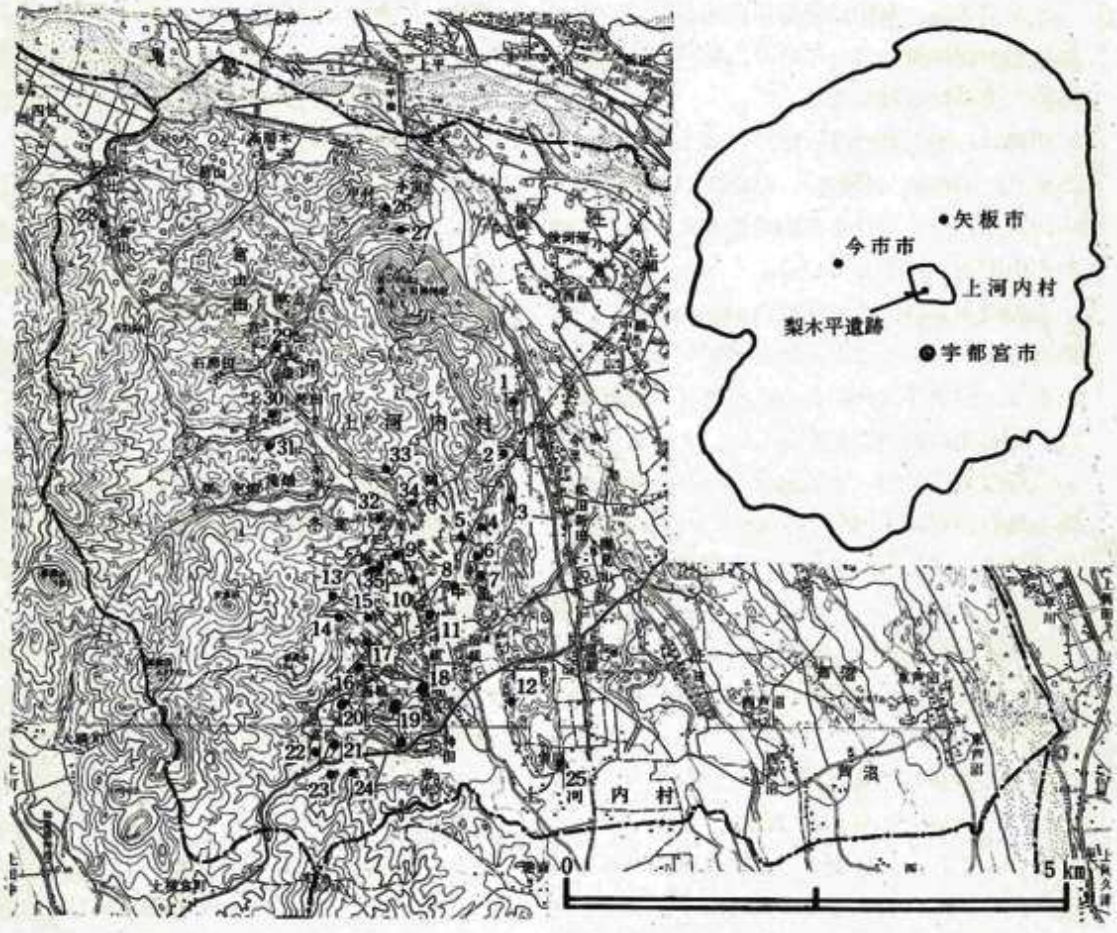
上河内村の埋蔵文化財と登録されているものは55遺跡である。うち縄文集落址が40遺跡，土師集落址が20遺（縄文との重複17遺跡）城跡３遺跡，供養塚２遺跡となる。従来古墳と考えられていたものは，規模，形態などから供養塚であることは確実であると思われるので上河内村には古墳は見当らないことになる。

次に縄文時代の遺跡について述べると，山田川とその支流の沿岸に集中しており，山田川自体が大きな河川でなく，広い段丘なども発達していないために，小規模な遺跡が多い。

上河内村の縄文時代遺跡については第１図に示したが，その中で主なものを述べることにする。

梨木平付近では，後久保遺跡（22）がある。この遺跡は村道で梨木平遺跡と分断されているが，以前は同一遺跡であり，加曽利Ｅ式と土師片が散布している。

また，梨木平遺跡と谷をへだてて北にある山口Ａ遺跡（20）からも阿玉台と加曽利Ｅ式の土器片が散布しており南方へ行くに従い土師器片が多くなる。その他の主要な遺跡としては西山遺跡（35）をあげることができる。同遺跡は山田川の右段丘上にあり沖積地からの比高は３ｍ～６ｍ，畑には早期から後期初頭までの土器片と多くの土師器片が散布している。



①高尾前（中，後期）　②山向（早，前，後期）　③荒高野（前期）　④鶴ヶ峰A（後期）　⑤南山（中，後期）　⑥鶴ヶ峰B（後期）　⑦鶴ヶ峰C（中，後期）　⑧遠耕地（中，後期）　⑨水無A（後期）　⑩水無B（後期）　⑪兎ノ内（中期）　⑫山の神（時期不明）　⑬滝ノ沢（早中，後期）　⑭右岡A（後期）　⑮沖，下（前，中，後期）　⑯堂向（後期）　⑰右岡B（後期）　⑱畑中（後期）　⑲向山（後期）　⑳山口A（中期）　㉑**梨木平**（中期）　㉒後久保（中期）　㉓吹上A（後期）　㉔吹上B（後期）　㉕金田（後期）　㉖中丸（時期不明）　㉗向畑（後期）　㉘諏辻（前期）　㉙山田（時期不明）　㉚橋場（中期）　㉛山口B（時期不明）　㉜冬室下（時期不明）　㉝関白（中期）　㉞大日前（後期）　㉟西山（早前中後）

第1図　上河内村の縄文時代の遺跡

第４章　発掘経過，所見

第１節　各区の調査概況

Ａ区　（写真11）

発掘予定地の北側の地境よりの地区にＡ区を設定。耕作土が20～30cmほどで深く，ローム面に掘りこまれた遺構以外にはプライマリーな状況は得られないであろうという判断で，当初からローム上面までを全面的に掘る方針で発掘する。掘った範囲は，およそ東辺12ｍ・西辺12ｍ南辺19.5ｍ・北辺19.5ｍの四辺形に及ぶ。この四辺形を中央で南北に分け，東側を南からＡ－１・Ａ－５・Ａ－４区，西側を南からＡ－２・Ａ－６・Ａ－３区の都合６区とした。各区のローム上面に視認した「落ち込み」は下表の通りで，都合20個であるが，完掘した結果後世の掘り込みとみなされるもの都合６個をさし引いて，結局「縄文中期にかかわりのあるピット」の総数は14個であった。

（表１）Ａ～Ｄ区発見のピット一覧表

区名	視認数	誤認数	ピット実数	ピット名　（旧名）
A′	2	1	1	A′－P－1
A－1	5	2	3	P－1・2・4
A－2	7	3	4	P－2・3・6（旧）・6（新）
A－3	3	0	3	P－1・2・3
A－4	2	1	1	P－2
A－5	1	0	1	P－1
A－6	2	0	2	P－1・2
C	6 (+1)	2	5	P－1・2・3・4 A－1のP－5（切り合い）
D	1	0	1	P－1
計	29(+1)	9	21	

耕作土中から散発的に土器や石器の破片が出土したが，分量はＡ－２区が多く，後述の滑車型耳飾り・扁平角型の硬玉大珠が出土した。加曽利ＥＩの出土器が多い区域なので同期に伴う公算もあるが遺物の水平移動が顕著なので推断はさける。

Ａ区の原地形は南高北低の緩斜面であったようで，北辺では〝地込み〟が深く黒土は 110cm ほどになり，黒土の下の今市層・褐色ローム層もゆるやかに屈曲している。本来は黒土の下に黄色の七本桜層・赤色の今市層と自然推積層がある訳なのだが，地形面の関係で黒土が薄かったせいか殆んど削られて黒土と混合してしまい消失したらしい。七本桜層が確かに実在したことは，いくつかのピットの内部に塊土が崩れこんでいることでわかるが，耕作で削り取られるほどだから厚くはなかったのだろう。Ａ－１区の３つのピットは見かけ上は〝皿状〟を呈するが，このような現在の耕作や，この遺跡が土師の集落址・中世の城砦などとの複合遺跡であることを考え合せると地形面の関係で〝並み〟ならぬ攪乱を受けていることが予想されるから，〝皿状〟はくり返された削平で〝最終的に残ったピットの底面〟と理解した方が自然である。

Ａ区の北縁ではローム面（今市層）が急に湾曲して落込んでいるが，この部分は「寄せ土」によって水平化されている。つまり南側部分から黒土が水平移動させられたのである。だから黒土の攪乱は甚しい。例えば，Ａ区を東西に中分する断面をみるための土手でＡ区北辺部分で観察すると，110cmほどの黒土層の上部で加曽利ＥＩ破片が見え，ローム面に近い下部では接合できる大木９式の破片が正反対の向きに突き刺っているという状態。別表のローム面の落ち

込みでピットの誤認数が多いのも，攪乱によりローム上面が甚しく損傷を受けているせいである。今市層はボロボロしていて固っていないので実に崩れやすく，「よくもまあ，こんなに崩れやすい土層を信用してピットなど掘りこんだものだ」と口に出して云いたくなるほどアテにならない。だから，ピットの開口部も攪乱で傷つけられた穴も同様に見え，その輪郭もきわめて〝曖昧模糊〟としている。いささか云い訳がましいが，黒色土からの精査……という手続きを省いてA区全体の黒土層をひん捲ったのは〈黒色土＝耕作土は攪乱が激しくて包含遺物の出土状態はアテにならない〉と判断しからであった。

A区の出土遺物のうち，時期は断定できないが中期に伴うであろうところの特徴的な遺物について記述する。表層は攪乱が甚しく量的にも出土品が少いので割愛する。

34図－2。耳栓。P－10の開口面の排土中に出土。開口面の充填土はアテにならないからこの耳栓はピット内の土器とは関係はない。堆骨状を呈し，赤褐色で焼成堅緻。表側の文様帯部分が一部欠損，裏側の無文部分も3分の1ほど欠損。文様は図のように2本セットの沈線で円弧を画し中央部に細い竹管で刺突文をつけている。施文からみて加曽利EⅠ式に伴うものと考える。

34図－3。耳栓。A－2区の北辺よりの部位で排土中に出土。薄手無文。滑車型で，かなり整形しているが器面に手づくねの跡が残っている。黄褐色を呈し，付着物はない。

34図－4。硬玉大珠。A－2区の西側部位で表土を排土中に出土。所産の時期は不明だが中期に伴う公算が大きい。扁平で不整長方形状。器面は念入りに研磨され，淡緑色に部分的な斑入りで，滑らかな光沢を放っている。上部に両面から孔を開けている。孔の面も平滑。上辺の一部に割取されたときの自然面が少く残っている。大きさはちょうど掌中に入って握りしめられる程度。本遺跡の出土例では第2次調査の時の出土に続いて2つ目。本例の方が立派である。

B区

遺跡の南縁における遺構の有無を確認するため，東西10m。南北5mほどの範囲にB区を設定。耕作土は20～30cmで，西端部で石錐らしい石器破片と土器片が雑多に出土した他に特記はない。東端は20cmほどで，西端は80cmほどで七本桜層の上面に達する。ほぼ水平な現在の耕作土と東高西低の自然堆積の七本桜層の間にはより真っ黒な黒土がある。B区の原地形は東高西低で，耕作中に「寄せ土」で水平されたのだ。遺物は殆んど西端部から出るが，それは「寄せ土」の結果土が水平移動したからであって全く攪乱している。遺構は全くなかった。

C区・D区

A区の南側区域にC区・D区を設定する。C区が東側・D区が西側で，C区の範囲はおよそ，東辺15m・西辺18m・南辺28m・北辺28mの四辺形で，耕作土は20～30cmと浅い。七本桜層は削平により殆んどなく今市層上面に達する。別表のように，C区では視認したピット数6で実数は5，他に不整形のプラン2を，D区ではC区に連続するプランとピット数1を確認し発掘した。この区域の地層堆積はほぼ水平だが耕作土である黒色土は浅く，ローム上面の削平は甚しく，最下層の七本桜層の欠如は耕作時の攪乱によるらしい。別項記述のC区のピット内に七本桜層の塊土が崩れこんでいるところを見ると，縄文中期当時はプライマリーな堆積状態にあったことが察せられる。C・D区に点在するピットについては別記するので，ここでは両区に存した不整形のプランについて全測図に基いて述べる。

C区の南辺に接して菱形に似た不整形のプランとC区西辺から不整四辺のプランの一部とが

見つかったので，住居址に違いないと速断して，前者を1号，後者を2号と命名し，2号のプラン全体を想定してC区の西側に応分の拡張区を設けたのがD区であった。結論を先にすれば，1号・2号とも「プラン」などの遺構ではなく，土器個体こそ出土したが〝住居址〟と判定する証拠はつかめなかった。今市層上面に現われたこの2つの落ちこみは，後述するような土器ブロックがあったのところを見ると何らかの遺構かそれにかかわりのある代物だったのかも知れないが，よくわからないので実態だけを述べて推断はさけておく。

1号（写真45～47）（第29図～第30図）

写真45が全掘図である。プランは壁は東側・西側ともはっきりせず，黒土の混土層を20cm内外掘り下げても凸凹があり，平担な床面を捕えることはできなかった。落ちこみの上面には，写真46のように土器片のブロックや写真47のように2個体分の加曽利ＥＩの土器などが礫などと共に〝散在〟していた。全測図に記入してある土器ブロックを東側から撮ったのが写真47である。これらは20～30cmの耕作土の下面にあり，辛じて〝削り残された〟部分である。全掘図の写真では，壁面と床面をきれいに掘り出したようになっているが，土器ブロックの散在状態を明示するため〝清掃〟した結果そうなったのであることを，誤算を招きそうな写真なので恐縮しながら附記する。〝遺構〟の裏づけがとれなかったので，これらの土器ブロックが時間的に共存するかどうかは推断をさける。〝プラン〟内にピットらしい穴があったので掘り下げたが，誤認であった。

2号（写真48～49）（第31図～第32図）

全測図のように不整形に今市層面が抉れている落ち込みで〝プラン〟ではなかった。

この「落ち込み」は3つの部分になる。1.加曽利ＥＩの個体群が出土したくぼみ，2.その南側の一見〝柱穴〟風の小穴が5個・小穴3個が集っているくぼみ，3.土器群の西側の不整円形の底面が平担なくぼみである。

1と3は形状から推察して，変り果ててはいるがピットではないかと思う。2はさっぱりわからない。このくぼみの東縁部分から後述のミニチュワ片口土器が出土した。2に関係あるかどうかわからない。

1は写真49に示すように都合5個体の加曽利ＥＩが出土した。実測図の土器個体のうち，南側をa，北側4個体を右からb，c，d，eと呼称する。bの下に破片，bとcの間に礫，dの下に破片がある。これらは今市層面から5～10cmウキで，今市軽石粒を含む黒土の混土層中にあった。これらの個体はいずれも「破損品」である。aは底部がない。bは口縁部が部分的に欠落している。cは胴下半がない。dは口縁部が欠落している。eは別個体の底部である。出土状態はa・b・dは横転してそれぞれが別の方向を向き，cは倒立している。これらを総合すると，この土器群は「安置」や「埋納」されたのではなく，「破損品を投棄」した可能性が濃い。この土器群は恐らくピットの下面に存在していたのだと思う。発掘しかたがまずくそれをこわしてしまったらしい。土器を包含する混土層だけをとり除けば，開口部はともかくピット床面くらいはつかめたかも知れないのに，土器群周縁の今市層を「くずれ込み」と勘ちがいして取り除いた結果，自然堆積の今市層をメチャメチャにぶち切ってしまったのである。大いに恥じる。そんな訳でピットであったろう筈の形状は不明のものにしてしまったが，同じくぼみの同じ充填土に含まれ，このように接近して出土した状態から推断して，これらの土器は同一時期に一括して投棄されたもので，明白に共存すると考える。

C区1号の土器ブロック（第29～第30図）

土器ブロックの各個体の共存関係は明らかにできなかったが，それらの相対的な出土位置は実測図のa，b，c，d，eである。これらの土器個体の特徴を土器の実測図の配列の順に従って記述する。

29図－1　口縁部がやや外反し胴部がふくらむ小形の深鉢形。加曽利ＥⅠ式。かなり焼焦げ器面は赤褐色を呈する。口唇に粘土を貼って隆帯をつけたが剝落している。剝落した後も使ったと見えてその器面に炭化物が付着している。かなり作りの粗い土器で，剝落しているので製作工程がよくわかる。

① 巻上法で器形をつくる。
② 口縁と器面に突起をつける。
③ 縄文をつける。
④ 口唇に隆帯を貼る。
⑤ 裏面の整形をする。
⑥ 器面に沈線文を引く。

ところが，工程をきちんと完了しないので剝落する。〝欠陥土器〟だ。縄文の施文方向も一定しない。

口縁の装飾突起は2対あったのかも知れない。胴上半部に突起を二段に互い違いに配列する。上段の突起の間に沈線を引いたり下段の突起を沈線で結んだりしているが，一部分だけの施文で他はやっていない。〝手ぬき〟なのである。しかし文様帯に突起をモチーフとした施文は本県では珍しい。

29図－2。実測図中のcの土器。口縁部が外反する小型の深鉢形，口縁部・胴部の一部と底部全部とが欠落している。器面は焼焦げ下半部は淡褐色，上半部は灰褐色を呈する。口唇は内側へツバのように張り出し，巾約2cmの平担面をつくり出している。〝ツバ〟状にしたことに煮沸用上の何か特別の意味でもあったのか。器面に縄文をつけただけで他の施文はない。

30図－1。実測図中のaの土器。口縁の半分ほどと胴下半部を欠損している。中型のキャリパー状深鉢で，典型的な加曽利ＥⅠ式。火熱で下半部は赤褐色，上半部は黒色。器面に炭化物の付着している。口頸部と胴部文様を2本セットの半截竹管文を廻らして分割する。口縁には把手があり口頸部の器面から突帯で連結していたが今は欠落している。把手は2つ対応していたらしい。〝二重口唇〟。把手の稜線から左右対称に隆線文を延び出させ渦状文をつける。把手と把手の中間位置に隆線で渦状文を施し対置させる。余白の器面を半截竹管で〝同心円〟様に彫刻的に平行沈線を引いて充填する。施文上の「対置」の原則を忠実に守っている。地文に縄文をつけ，胴部も同じ工具の半截竹管で施文する。約4cm間隔でタテに平行沈線を引き，その間の部位にU字状の沈線文を上下に対置させる。当地ではきわめてポピュラーな加曽利ＥⅠである。

30図－2　実測図中のdの土器。胴部でくびれ，口頸部と胴部とがそれぞれふくらんで〝ひさご〟のような器形である。加曽利ＥⅠ式。器面はかなり焼け赤褐色ないし黒褐色を呈し炭化物が付着している。　口頸部の大部分と胴下半部とを欠損している。地文に縄文をつけた後に文様を施工。器形のくびれ部に沈線を伴う2本セットの隆線を廻らす。口頸部文様帯はふくらんだ部位に，沈線を伴う2本セットの隆線を廻らす。口頸部に小突起があり，これが対称的につけられていたのかも知れない。胴部文様は〝くびれ部〟の直下に一部だけ鋸歯状の沈線を引き，他の部位に不規則に沈線を引いただけで，施文する意図がなかったらしい。

30図－3　実測図中のbの土器。大型深鉢形の口縁部破片。加曽利ＥⅠ式。胎土に粗砂と雲母を含む。器面は焼焦げている。栗色を呈する。口縁に厚手の帯状の粘土を貼り足して渦状文をモチーフとする主体的な口唇部装飾帯をつくり出している。図の右側にも隆帯があったが欠落

している。器面に地文の縄文を施し，2本セットの沈線で渦状文や懸華文をモチーフとする曲線文を施文する。口縁部と胴部の文様が区分されず一体化している。

30図－4　実測図中のeの土器。中型のキャリパー状器形の口縁部破片。加曽利ＥⅠ式。焼成堅緻，胎土精良で雲母を含む。器面は栗色。焼けて部分的に褐色を呈し炭化物が付着している。口縁部に方形板状の把手をつけ，器面からアーチ状につけた突帯と連結する。把手には2個の円孔が通じ沈線で円弧を描く。把手の稜線と連結した隆線で口頸部文様帯を区画している。隆線の背を太い沈線で抉って2本の隆線に見せる。区画帯内には懸華文をつける。余白部にはタテの刻み目を彫刻的に描きこんでいる。胴部には撚糸文を施す。撚糸文帯には 1.5cm巾の指のすりけし痕が見える。指先を口縁に向けて原体を回転させたときについたものである。

C区2号の土器ブロック（第31図～第32図）

既述したように，同じくぼみに同じ充填土に含まれて「一括投棄」を示す状態で出土したのが5個体の加曽利ＥⅠ式である。土器の実測図に従って4個の土器の特徴を記述する。相互に共存すると考えられる土器である。

31図－1　実測図のdの土器。小型のキャリパー状深鉢。加曽利ＥⅠ式。口縁部の一部と胴部の一部を欠損している。焼成良好で器面は淡褐色に焼けている。キャリパーのくびれ部に太い沈線を引いて文様帯を区画している。口縁部に渦状文をモチーフとした立体的な把手を1つつけ，これと対置してボタン様の突帯を1個つけている。この文様帯を下段の展開図に示す。把手とボタン様の突帯は両者ともその左わきにV字状の隆線を貼り，文様帯は渦状文をモチーフとする隆線を貼り，余白部位に併行する曲線文を彫刻的な沈線で施している。文様は対称化されず〝くりかえし〟を怠っている。胴部は縄文だけ。

31図－2　実測図のbの土器。小型のキャリパー状深鉢。加曽利ＥⅠ式。把手の一部と底部を少し欠損している。焼成良好，胎土に粗砂を含む。口頸部に隆線を廻らし，文様帯を上・下に区分する。火熱で胴下半は赤褐色，上半部は黒褐色に変色しているが，器面は傷んでいない。口縁部文様帯を下段の展開図に示す。口縁に2つの把手が対置し，その両側に逆S字文の変形した隆線が貼付され対置される。把手は錐状に隆線を貼ってつくり上げ，背に彫刻的なヘラ仕上げで曲線文を施す。余白部位にタテに深い沈線を刻みこんで立体的な効果を盛り上げている。胴部は半截竹管による〝カスガイ〟様の沈線文で充填している。この部位の文様帯は3つである。この土器は口頸部において，施文を2つずつ対応させており細い点まで対称態となるよう配慮している。

32図－3　実測図のcの土器。中型のキャリパー状深鉢。加曽利ＥⅠ式。把手の一方と胴下半部を欠損している。胴部の割れ目は粘土の継ぎ目が剝離したものだが，そのあたりの器面をみると欠損した下半部はゆるくふくらむ器形だったようである。器面に地文の縄文を施文後に把手や隆線を貼付している。器面は黒褐色で，一部に炭化物が付着，火熱の跡が著しい。口縁部文様帯を展開図で示す。把手は1対は四角柱状で5面から穴が通じて内部は空洞状。1対は山状で，背に孔が通じている。把手は渦状文をモチーフとする沈線で装飾されるが，背の一部にタテの刻線を施している。口唇は整形して尖っている。文様帯は懸華文を2本セットの隆線で施している。胴部は縄文だけで他の施文はない。

32図－4　実測図のaの土器。中型のキャリパー状深鉢。加曽利ＥⅠ式。底部を欠損している。火熱で胴下半は赤褐色，上半部は暗褐色を呈し，かなりの炭化物が付着。器壁は変質してボロボロになっている。とり上げの段階で砕け，

復原した時点では〝満身創痍〟になってしまった。地文に縄文をつけた後，口頸部に2本セットの隆線を廻らして口縁部文様帯を区画。口唇に沿って2本セットの隆線を廻らし，上側の隆線で〝二重口唇〟を作り出している。口縁に1つの把手があったらしいが欠損。これと3つの環状の突帯とが都合4個対応している。文様帯は2本セットの隆線で懸華文をモチーフとする曲線を貼付している。胴部は縄文のほかに施文はない。施文上の〝くりかえし〟のパターンが不正確でかなり粗雑なつくりの土器である。

34図－1　C区2号の落ちこみ東縁から出土した小型の片口土器，〝舟底〟形で長径が約9cm・短径が約4cm・高さが約4cm。胎土に粗砂と若干の雲母を含む。手ずくねで器面凸凹が甚しい。ちょうど掌中にすっぽり入る大きさで，丸底であるところから，片手に握って使う用途があったらしい。少量の物資を溶かして，それを流し出しやすいように片口につくったものであろう。器面の付着物は全くない。

A′区

発掘予定地の東側部分に設定。畑に1mほどの段差があり，それに沿って，東辺22m・西辺18.7m・南13.5m・北辺14mほどの四辺形である。耕作土は30cm内外でほとんど遺物はなし。全測図のように，東辺の北端部にピット（P－1）が，東辺よりに南北に走る溝が現われた。ピットは別記するので，溝について述べる。溝は幅3m・深さ2.5mで，断面はU字状を呈する。その様子を写真51に示す。

断面図に基いて述べる。

溝の壁面と底面はきれいに削られており，底面は今市層・褐色ローム層をぶち抜いて鹿沼軽石層に掘りこんでいる。阿久津純氏の研究では宇都宮市付近の関東ロームは，上から，田原ローム・宝木ローム・宝積寺ローム・戸祭ロームの順。高松地区の田原ロームは，上から黄色の七本桜軽石層・赤褐色の今市軽石層・褐色ロームの順。褐色ロームは上面から80cmほど下って小川スコリアの薄層がある。この田原ロームの上部の七本桜・今市層は男体山噴出で，梨木平遺跡では今市層は40～50cmと厚い。その下の褐色ロームは男体山と赤城山の噴出によるもので，下層の宝木ロームとは30cmほどのブラックバンド（岩宿Ⅰの文化層）の上面で区分するらしいのだが，素人のためその黒色帯は今回の溝の断面ではわからなかった。鹿沼軽石層（園芸用の鹿沼土，赤城山の噴出）はこの宝木ロームの中位にある排水のよい土層だ。梨木平のピットは浅ければ今市層中，深ければ褐色ロームの上位に掘りこんでいる。子ピットのいくつかはスコリア層をぶち抜いて掘りこんだものもあったが，それぞれのピットの必要深度の関係で各層に至ったものであり，ローム層自体に「排水」とか「壁面の保持」とかのピットの機能〝補助〟を期待したものではなさそうである。ポロポロした今市軽石粒を壁面にするより褐色ロームを壁面にした方が長持ちするであろうに，それに拘った様子がないのは，深度の制約で止むを得ずそうなったのか，〝長持ち〟には無関係の「使い捨て」だったのか，その辺の想像はつかないのだが。

溝の断面図に戻る。断面の充填土はA，B，C，D層に大別できる。

A層，溝の下部に両側から斜に流れこんでV字状に埋めた充填土（15・16・17層）。

B層　溝の東側（図の右側）から，人為的に投げ入れたと思われる充填土で，斜行する薄層はその投棄経過と回数を示す。図の左側壁ぎわには今市層の塊土がある。充填の傾斜面を転り落ちてそこに留ったのであろう。（4・9～14層）。B層の上面には土器破片が入っている。

C層　溝の西側（図の左側）から，人為的に投げ入れたと思われる充填土。B層の充填後に

自然的埋没が見られないから，C層の土壌投棄はBに連続して行なわれたと考えられる（4～8層）。

D層　V字状にくぼんだ溝が，漸進的・自然然的に埋没したと考えられる充填土（1～3層）。

なお，B層とC層とは壁面に「間層」がある。A層の主体となる17層と同じである。

この溝は「空掘」だろうと考える。この溝は部分的にしか掘らなかったが，別の箇所でカワラケが出ている。梨木平には「お城」があったという地元の伝えがあるだけで，城主名や時期・構造などについても不詳であるが，その伝えにかかわりのある遺構で中世に該当するのではないかと考える。

この空掘は〝機能〟中，自然的に埋った。これがA層で，最上部の15層まで漸進的に埋没。この時間的な経過の後，廃絶され一挙に人為的に埋められた。これがB・C層である。この埋没が「城の廃絶」に伴うもので，例えば城の機能停止をはかる手段として行われたのか，土地利用上の便儀のために行われたのか，それとも何か他の事情があってのことかは想像するしかないが，幅3m・深さ2m以上の空間を恐らく数10m以上にわたって一挙に埋めていったのだから，その労力に値する重要な意味があったのであろう。この溝は，調査目的の縄文時代の遺構ではなかったが，その埋没経過を分析することで，本来の目的であるピットの埋没の在り方への示唆をうけ，その意味で有難い遺構であった。この溝の断面観察のため，炎天下3日間にわたり，掘り且つ図面取りに敢闘した宇都宮大学生諸氏に敬意を表し，合わせてその17層に及ぶ観察メモをそのまま掲載する。

1層　褐色土。今市軽石粒わずかに混入。

2層　黒褐色土。1層よりも黒っぽい。

3層　黄褐色土。1層よりも黄色っぽい。今市軽石粒および七本桜軽石粒混入。

4層　黒色土。今市軽石粒およびローム粒混入。七本桜軽石粒もわずかに混入。

5層　黄褐色土。3層よりも黄色っぽい。

6層　黄褐色土。5層よりも黄色っぽい。七本桜軽石粒混入。

7層　黄褐色土。黒色土粒・今市軽石粒混入。七本桜軽石粒わずかに混入。

8層　黄褐色土。黒色土粒・今市軽石粒が7層よりも少ない。

9層　黄褐色土の今市軽石粒ほんのわずか混入。

10層　黄褐色土。9層とほぼ同じ。

11層　黄褐色土。今市軽石粒混入。砂粒状をなす。

12層　黄褐色土。黒色土粒と今市軽石粒が多量に混入。

13層　黒色土。今市軽石粒のブロックが多量に混入。

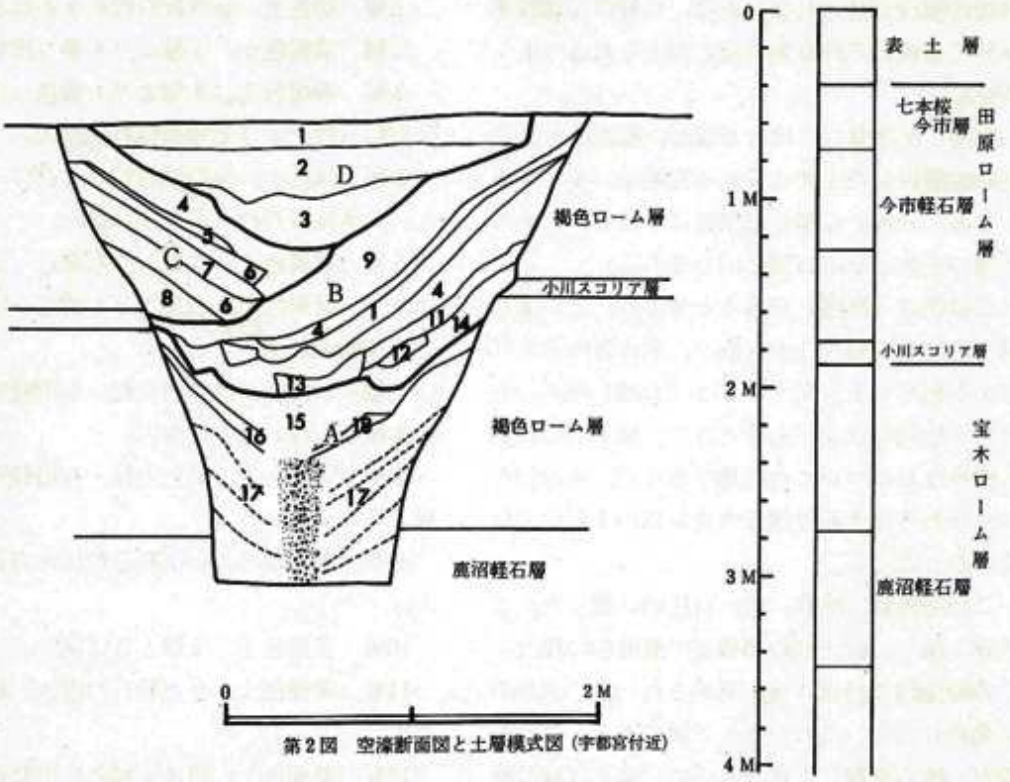
14層　黒色土。今市軽石粒がほんのわずか混入。

（15～17層。上の土よりサラサラしている。ロームが主体で少量スコリア粒が混っている。）

15層　黄褐色土。サラサラしていて，今市軽石粒わずかに混入。

16層　黄褐色土。今市軽石粒が多量に混入。

17層　黄褐色土。サラサラしていて砂粒状。



第2図　空濠断面図と土層模式図（宇都宮付近）

第2節　ピットの発掘状況記述における留意点

今回の発掘調査で完掘した合計21のピットについて注意したことは次の点であった。

1．ピットはどんな過程で埋没したのか。

a，充填土と出土遺物の状態からその進行状況を把握できないか。

b，完掘した形状と原形との相違点の有無はどうか。

c，ピット廃絶の原因は何か。使えなくなったからか，使える状態でも捨てたのか。

2．ピット内の遺物はどう解釈するか。

a，遺物は埋納か投棄か混入か。

b，遺物の時間的な先後関係はどうか。とくに共存するのはどの遺物か。

c，炭化物（木片，木の実類など）・灰・砂などの有無。

3．子ピットはどんな役割を果したのか。

a，親ピットとの共存を立証できるか。

b　存在している位置，形状，その充填土及び出土遺物はどうか。

ピットの開口部を視認できるのはローム上面においてであり，縄文中期当時のこれらピットは黒色土から掘りこむのであるから，この時点ですでに「原形」を見失っているわけである。形状記述においては，壁面の現状と充填土の土質・出土遺物との観察により壁面崩落→ピット空間の充填，の因果関係把握に重点をおいた。充填土の土質を観察し，その堆積は短時間かかったのか長時間かかったのか，堆積は自然的なものか（ピット放置による自然埋没）・人為的なものか（わざとこわしたのか），をできるだけ細く記述した。充填土を時間的に識別するために第1・第2・第3次埋没の表現を用いた。

ピット内の遺物のうち，厳密に共存し得るの

はどれか。出土状態と包含されている充填土からそれが割り出せる遺物を重点的にとり扱った。「袋状」土拡という外界と隔絶され閉鎖された特異な空間においてはそれが可能な筈だった。包含地遺跡では遺物を層順によって先後に識別することはかなり困難であり，住居址においても「吹上パターン」に類するケースでは〝時間差〟を見わけるには熟練を要する。廃絶されたピットは埋没後は2次的攪乱を受けにくい条件を備えている。ピットの形状と充填土の層順を証拠として記録に残すために，ピットを壁面もろとにタテにぶち切る掘り方をいくつかした。

この方針で把握した遺物は，ピット廃絶に最も時間的に近いもので「共存する」と断定し得るものに重点をおいて記述した。端的にいえば底面近くの壁ぎわの遺物を最優先に記述した。その他の遺物は特徴的なものをとり上げて編年上の参考にするに留めた。

もう1つの観点は，遺物は埋納されたのか，投棄・混入によるものか，という問題である。遺物自体の形状（完形か破損品か）と出土状態（置いたのか散乱しているのか）と充填土中の位置（床面に密着しているのか，ウキか）などに視点をおいた。

今回の記述では上記の諸点を看取できた限りなるべく明確に直線的に表現するよう意図した。その結果，別項の記述のようにこの遺跡におけるピット廃絶のパターンを把握したが，その理論づけのために事実を曲げたりはしていない。記述は，事実とその解釈を併記した。分離すべきだったかも知れないが，事実の〝説明補足〟と〝解釈〟とをどこで切り離すか不明確であり重複をさけて，担当者の見解を端的に述べてみたいとする意図が強かったのであえて〝筋〟にこだわらなかった。

パターンとは共通点の要約である。「梨木平におけるピット廃絶のパターン」は別記するように何も梨木平のみに限ったことではなさそうである。だがこの遺跡ではこうだという体系づけのための1つの積み石にするため，くどいほど同様の記述をくり返した。そのパターンとは次の手順である。

1. 空洞状態でピットを廃絶する
2. 第1次埋没が進行する
3. 遺物が投棄される
4. 第2・3次埋没が進行する。遺物の投棄・混入が併行する。

これらが各ピットにどう起ったかを観察することで，ピットのもつ機能を推察し，出土状態に基く遺物の共存関係を把握してみたいと考えたのである。

記述にあたっては次の用語を意識的に区別して使った。

現開口部と原開口部……〝現〟はいま，つまり崩落後の現況。〝原〟はもと，つまり廃絶直後の完全に近かった旧状。

親ピットと子ピット……〝親〟はいわゆる「袋状土拡」。〝子〟はその副土拡。両者が共存し，後者には前者への補助機能があると見たので，その相互関係を強調するために，〝親〟・〝子〟と呼び分けた。

床面と底面……親ピットの底を「床」，子ピットの底を「底」と呼び分けた。両者の底を字の上で感じ分ける目的だが，子ピットに〝柱をたてた〟だの〝水ぬき穴〟だのと解釈する人もいるので，親ピットは物を置くのだから「床」でよいとしても子ピットの機能は人によって解釈が違うので用心のために「底」と書いた。

崩落と剝落……崩落は断層陥没の感じ，剝落は少しずつ剝げ落ちる感じ，をあらわした積りである。前者は一時的に多量の土が，後者は長時間に若干ずつの土が，ピット空間内に落ちこむ様子を表現した積りである。

暫時と漸進的……暫時は「或る短い時間」の意味で目やすとしては2～3ヶ月くらい。漸進的は「だんだんに」の意味で数ヶ月から1年以上くらいの時間を表現した積り。

「袋状」とピット……袋状を「　」したのは，口が小さく底が広いといってもいろいろな形状があるからそれらを一括した意味。ピットは要するに「穴」という意味で土拡と同じ。今回はなるべくピットという語を使うよう心がけた。P－1，P－2……などは第1号ピット，第2号ピット……という意味である。

今市軽石粒と今市層土……〝軽石粒〟は黒土と混合した状態。〝層土〟はほぼ混り気のない状態。前者は自然的な混入で長時間の経過，後者は〝人為的〟な要因も加えて短時間の経過で，それぞれ堆積したとする表現。

投棄と混入……投棄は「意図的に投げこんだもの」「廃棄物」を表現したもの。混入は「紛れこみ」で〝自然的〟な水平移動によって「入りこむ」状態を表現した。遺物の記述は当然に前者の「投棄」に重点をおいている。

尚，本文中に引用した諸説の著者の敬称は全部省略させていただいた。

出土土器の特徴記述における留意点

出土状態からみて，第1次埋没に伴うつまりその土中や上面に出土した遺物を最優先に収録。この遺物をもってピットの時期判定をした。その他，第2次埋没以降の「共存を立証できない遺物」でも編年上特徴的なものは収録した。

写真や実測図中にある遺物はなるべく収録しその旨を銘記したが，全ては載せられず，記述文中に注記洩れがあるものもあるのでよく照合の上ご了承いただきたい。土器の特徴は拓影の補足説明を主とした。土器個体は実測図と写真図版とでは視角を変えて示すよう配慮した。

遺物の項で記述上で注意したの次の6項目。

1．遺物の出土位置と包含されていた充填土は何か。

2．どんな器形のどの部分か。

3．形式は何か。阿玉台式は2分して旧と新。加曽利ＥＩは大木8ａ式も含めて一括呼称した。

4．焼成状態と胎土の様子。

5．器面の所見。煮沸用だったため〝焼焦げ〟があり器面の変質のある場合は明記した。「火熱」とか「焼焦げ」はその土器の焼成段階のものではなく，いずれも使用段階での影響を書きとめたもの。

6．文様の所見。地文と文様施工の先後を明記した。口頸部と胴部の文様帯の区画，文様帯の規則性（〝くり返えし〟や器面のタテわりなど），特徴的な技法などに注意して記述した。

尚，拓影・実測図のスケールはすべて10cmである。

第5章　袋　状　土　壙

P－1（第3図～第5図　　写真3～8）

現開口部直径約 150cm・深さ80cm・床面直径約 220cm。子ピット4個。廃絶推定季節は冬。

今市層上面に開口部輪郭を視認し，まず西半分をぶち切る。

現開口部直下の充填土から阿玉台・加曽利EⅠ破片が混在出土。開口部西壁の直下に加曽利EⅠ個体（底部の一部を欠損）が写真4のように底部を斜め上に横転して出土。ピットの床面から40cmほどウキ。この部位でクルミ破片，木炭片（マサ目が通っているので幹の一部か）が出土。

充填土の断面を見るため，完掘した西半分を床面近くまで壁面もろとも全部きりとる。写真5はピットの側壁の切断面と充填土の様子を示す。

壁は肩が張った壷のようだ。この肩部は壁の剝落でできた後時的なもの。この壁の切断面は充填土の断面よりは40cmほど西寄りのもので，この部分を削り取って充填土の断面に連続させて作ったのが実測図である。

完掘後のピットの壁は緩傾斜し，ほぼ袋状を呈すが，かなり開口部が広い。現開口部は今市層中にあり，厚さ約40cmを経てその下は床面まで40cmほど褐色ロームを掘りこみ床面・壁面を形成する。

充填土は壁と床面を覆う黒褐色の軟い混土層と開口部からピットの中央部に錐状に入りこんだ黒色土とに大別できる。これは，開口部と壁上半部とが剝落してピットを〝スリバチ〟状に埋没させ，その後は漸進的に周縁部から黒色土が流れこんでピットの埋没が終了したことを示している。従って，このピットの開口部と壁面上部とは崩落によって変形した姿であり原形からは遠いものである。

充填土の断面図に基いて，ピット埋没の過程を推察する。

A　床面を10cm前後の⑦の黒褐色土が覆う。この充填土には炭化物と共に，今市軽石粒・褐色ローム粒が僅かに混入している。ピットの東半分を完掘した時，この層の上面に数片の加曽利EⅠ片・破片の石皿（ウラがえし）や大小の礫が出土した。これらの遺物は床面から5～10cmウキの状態にあり，床面被覆の混土層上面かその上の充填土に含まれていた。写真③はその状態を示し，写真にその土器のウキの状態を示す。この事実から，このピットは空洞状態で廃絶された後に，開口部を形成していた黒色土が落ちこんで床面を被覆し，その直後に土器・石器の破損品や不用となった礫・若干の植物性の物体（枝か）などが投棄されたことが推定できる。

B　中央部位の⑥の充填土。黒褐色土で，黒土に少量の今市軽石粒・褐色ローム粒・炭化物が混入している。その両脇に⑤の黄褐色土がある。今市軽石粒・炭化物を僅かに混入するが，褐色ロームの混入が多い。⑥と⑤は同質で同期に形成されたのだが，黒色土に対する褐色ローム・今市軽石粒の混入量の差違はピット空間での位置の違いによるものだ。つまり中央部の⑥は開口部位の黒色土・今市層が剝落して〝黒み〟がかり，⑤はピット上半部の褐色ロームの壁面が剝離して黒色土と混入したために〝褐色〟がかったのだ。⑤は軟かで壁面剝離のままの痕跡が明瞭である。⑥や⑤には，床面被覆の充填土中の遺物と同時期に投棄されたと見られる遺物を含んでいるので，これらの推積は連続的に進行したと考える。

C　ピットの壁面中位をとりまく④の黒褐色土。

この充填土の質は⑥と同様だが，これより褐色ロームの混入量が多い。その理由は壁面剝落の褐色ロームの分量がより増えたためだ。この充填土中にも若干の土器片がある。④は⑥に連続して推積。

D　現開口部下の充填土で②の黄褐色土。ピットの中央部寄りに無数の褐色ロームの塊土が見られる。④に連続して推積。

③のローム塊の混入は，ピット上半部壁面の最終的剝落の事実を示す。この時点では，ピットは開口部・壁上半部が原形をとどめぬほどの崩壊・剝落をくり返えして，かつての「袋状」は単なる〝スリバチ〟状のくぼみに変形している。

E　ピットの現開口面から中央部空間をスリバチ状に充填する①の黒色土。多量の今市層を混えている。この充填土の下面から加曽利ＥＩの個体，クルミの破片などと共に加曽利ＥＩ・阿玉台土器片が混然として出土している。①は長い時間かかって充填を終えたものと考える。土器片の混在は黒色土の流れこみによる移動によって起ったと見られるからである。

このピットは床面の全周が約 680cmで直径約 220cmほどの巨大な例で，床面はほぼ原形だ。その床面の周壁部位に４個の子ピットがあった。写真③はピットを北側から撮影したもので，手前の子ピットが最大で口径85cm・深さ75cmの「袋状」を呈する。向う側３個のうち，左端は口径36cm・深さ50cm，中央が口径50cm・深さ63cm，右端が口径20cm・深さ26cmであった。ピットの東半分の床面には，ウキで土器破片や礫・石皿の破片・小形の磨製石斧の破片などが散乱状態で出土した。写真③のように，最大の子ピットの肩口には石皿の半欠片が裏がえしで礫・土器破片と共にのっている。この子ピットの充填土は，底面部位に土器破片を含む褐色土・その上部は親ピットの床面被覆土があった。向う側中央の子ピットの底面近くにも礫があった。４個の子ピットは同じ充填土で埋っている。これらの状態から，親ピットが空洞状態で廃絶されたとき，子ピットたちもまた空洞で同時開口していたといえる。子ピットの肩や内部に遺物が存在するのであるから，

ピットの廃絶→第１次の埋没開始→廃棄物の投棄……の順で，若干の時間差をもつて埋没が進行したことを示している。このピット廃絶後の最初の投棄である遺物が，いずれも床面や子ピットの壁から浮いている事実は，廃棄物の投棄開始までに〝暫時〟の時間が経っていることを示す。その間の充填土が前述の「Ａ」の項の黒褐色の床面被覆土である。

以上の状態を総合して，このピットの埋没は次の順で進行したと考える。

１．親・子ピットは空洞状態で廃絶される。

２．原開口部が崩壊して薄く床面を被覆する。被覆の進行末期か終了直後ごろに廃棄物の投棄がはじまる。

３．それにつづいて壁上半部の剝落が進行する。併行して廃棄物の投棄も行なわれる。

４．ピットは原形を失ってスリバチ状のくぼみになる。その時期に加曽利ＥＩの個体が投棄される。底部を斜め上にして出土したのは口縁部分の大きいこの個体が斜面で安定を保ったためと見る。この段階までは割に短い時間で進行する。充填土が〝ほどよく混合〟しているところから，壁面剝落は〝自然的〟に進行した感が濃い。

５．スリバチ状のくぼみが表土の水平移動により充填される。〝平担化〟するまでにかなりの時間が経つと見られる。だから，この充填土に含まれる遺物はピットとは殆んどかかわりを持たないと考える。

（遺物）

時期＝加曽利ＥＩ。第１次埋没に伴う遺物……土器＝３図－１・２，４図－５・７・８・９。

石器＝5図－3・写真50（石皿）。

3図－1。床面東側にあった最大の子ピットの肩口にひっかかっていたのはこの土器の底部。床面各所や子ピット内から出土した破片を接合した。大型のキャリパー状深鉢形の下半部で加曽利ＥⅠ。焼成良好で胎土も精良。淡褐色で部分的に焼けて黒色に変色している。図は個体のほぼ3分の1ほど。器面は3本の平行沈線で4つにタテ割りされているが等間隔ではない。図はその巾広の部分で，他の部分の間隔はもっと狭い。その間に蛇行沈線が垂下する。地文の縄文を施文後に，太く浅い平行沈線で曲線文を描く。沈線文はソ連旗の〝カマ〟のように屈曲する。器面をタテ割りした3本の平行沈線はその〝柄〟の部分にあたる。

3図－2。写真3の2片の1つ。床面より8cmウキで出土。大型のキャリパー状深鉢形の下半部で加曽利ＥⅠ。焼成堅緻で胎土に細砂を含み，厚手のがっしりした土器。器面は黒褐色だが，部分的に焼焦げで赤褐色になり，ススが附着している。地文の太く粗い縄文を施文後，口頸部に隆線を貼って文様帯を区画。

4図－5。床面ウキで出土した断片。火熱で器面は傷みがひどくもろい。無文。隆線で頸部に方形の区画帯をつくり出す。区画帯の内側にハゲ残りの朱がある。

4図－7。西半分の床面ウキで出土。波状口縁のキャリパー状深鉢形の波頂部断片で加曽利ＥⅠ式。器面は栗色。器面整形の後，隆線を貼りつけて曲線文とし，その背をヘラ状工具で鋭く抉って沈線を引く。部分的には隆線つけ根にも引く。施文は大雑把で〝粗製濫造〟。図の沈線文には沈線の継ぎ目が見える。2本併走する隆起線の効果を出すため，隆線の背を抉って〝分割〟したのであり，省略的な技法といえる。縄文は区画後につけている。

4図－8。写真3の2片のもう1つ。床面から8cmウキ。3図－2と共出した。浅鉢の口縁部断片。胎土に粗砂を含み黒褐色。器面の焼焦げ激しく無数にヒビわれが入り胎土はもろくなっている。無文。器面を平滑に整形し，その擦痕が無数に横走している。口唇は肥厚し，〝わらび手〟状の太い沈線が短絡する。口縁部の外反は顕著。裏面は断面のように，巾7.5cmほどの〝段差テラス〟が廻る。この波頂部が4個対応する波状口縁の浅鉢と見る。

4図－9。最大の子ピットの肩口に4図－3の石器などと共に一諸にひっかかっていた土器片。キャリパー状深鉢形の口縁部で加曽利ＥⅠ式。焼成良好。屈曲する隆起線が文様のモチーフ。区画帯の接点部分に6個の点列がある。珍しい施文だ。図のように縄文の施文方向は逆で，文様区画後に施文したことがわかる。口唇に太い沈線を廻らし，〝二重口唇〟をつくり出している。口唇内側には隆帯があり，裏面を平滑に整形している。

5図－3。最大の子ピットの肩口に3図－1など共にひっかかっていた磨石。偏平な多孔質の河原石を整形して作る。図の表の〝指かけ〟ははっきりしているが裏側は浅く痕跡的。
図の左側の側面は稜ができるほど平担に磨り減っている。

5図－5。河原石の半欠片。最大の子ピットの肩口にひっかかって出土。表面が粗くザラザラしている。一部に〝くぼみ〟がある。何かを叩くための台にしたらしい。

以上の土器5点，石器2点は第1次埋没の終期に投棄されたもので，実測図や写真に示した位置から出土し，相互に共存すると考える。以下は，このピット内から出土したが，上述の遺物とは共存しないものである。

4図－1。実測図のＡ－Ａ′断面のうち，写真4のように斜めになって出土した個体。中型のキャリパー状深鉢の加曽利ＥⅠ式。焼成良好。土器の上半部は黒色。下半部は赤褐色だが，焼

焦げではない。ほぼ完形だが把手の一部や胴下半分の一部が欠落。頸部に隆線を廻らし口頸部文様帯を区画する。把手は渦状文をモチーフとした多孔の山形。口唇には隆線を廻らし〝段差〟のある二重口縁。文様帯は渦状文をモチーフとする彫刻的な施文。展開図に示したように，把手をはさんで左右対称に逆S字文を配し，文様帯の4割ほどの空間を充す。残りの6割ほどの空間は把手の反対側にあたり，この部位では逆S字文を2つ連続させている。文様帯を，把手を中心とする部分と二連続逆S字文とを対置させてバランスを保っている。この逆S字文は渦状文から展開したもので，その起点は渦状の小突起になっている。

4図－2。ピット上面の黒土の混土層中から出土。前期の繊維土器の断片。器面の風化が激しい。裏面に炭化物が付着。〝流れこみ〟の好資料。

4図－3。ピット上面で出土。口縁部破片。加曽利EⅠらしい。器面は赤褐色。文様は櫛引文。

4図－4。ピット上面の黒色土中の出土。深鉢形の口縁部破片で阿玉台新式。焼成良好，胎土に雲母を含む。器面に火熱の跡がある。隆線による区画帯内に鋸歯状沈線文が横走，地文の縄文は口縁・区画帯・胴部とも施文方向が違う。胴部の縄文にはタテの指のすりけし痕が約20cm巾で併走している。

4図－6。ピット上部から出土。キャリパー状深鉢形の破片で把手の部分。加曽利EⅠ式。沈線文で口縁部の施文をしている。縄文の施文方向は異る。

4図－10。東側部分の充填土から出土。薄手の小型のキャリパー状深鉢形の胴部破片。加曽利EⅠ式。胎土に砂粒を含む。器面裏側に炭化物が付着。縄文を施文後に細く浅い沈線文をひく。

5図－1。崩れこみの褐色土中から出土。キャリパー状深鉢形の口縁部破片。加曽利EⅠ式。焼成良好で器面は淡褐色。まず地文に縄文をつけ，その上に隆線を貼って文様帯を区画。口唇に沿って隆線を廻らし，〝段差〟のある二重口唇をつくり出す。その3cmほど下に隆線を廻らせて区画帯をつくる。図の中央部はアーチ状の粘土紐が半分欠落している。区画帯内にS字やL字様の短絡文を貼付している。

5図－2。ピット内だが位置不明。キャリパー状深鉢形の口縁部破片。渦状文をモチーフとする。粘土紐の断面は四角。

5図－4。ピットの下位で，混土層中の出土。打器。刃部を欠損した磨製石斧を整形し，2次利用したらしい。図の下部に調整剥離痕が見える。

P－2（第5図～第8図，写真6～8）

現開口部直径不明・深さ不明・床面直径約250cm。子ピット・孫ピット各1。

子ピットに加えて孫ピットまでしつらえた大ピット。西半分は徹底的に破壊されて床面周壁さえわからず，破壊を免れた，東半分の床面により全容を推定せざるを得ない。その東半分は褐色ロームに55cm掘りこみ，この部分でピットのおよその半周をつかんだ。計測の実数値は，ピットの床面半周が 410cm・褐色ロームの上面での半周が 350cm。これから，このピットの床面の直径は約 250cm・崩壊の少ない褐色ロームの上面における直径は約 210cmほどになる。床面から現地表までは 140cmだが，原形は 150cm前後の深さはある「袋状」を呈していたものと考える。写真6参照。

実測図に基いて概容を述べる。

この東半分の床面で北壁よりに子ピットがある。子ピットは全周 300cmで直径90cm・深さ110cm，底面の全周は 440cmで直径は約 133cmで「袋状」。大人1人が悠に入れるスペースで

ある。さらに子ピットの底面南側壁に接して孫ピットが掘りこまれていた。孫ピットの全周は140cmで直径は約42cm・深さ45cm。親ピットの床面から孫ピットの底面までの深さは45cm。親ピットの床面から孫ピットの底面までの深さは通算して155cmで，これに親ピットの推定深度150cmを加えると実に3mを越す深さになる。親ピット床面を被覆する充填土の断面観察により，親・子・孫は3つとも「同時開口」していた。さなきだに身動き不充分な「袋状」の穴の中で，〝子〟はまだしも〝孫〟まで掘りこむ必要がどこにあったのか。その労働量の莫大さに思いを致すとき驚嘆するより理解に苦しむ。ピット内の空間を拡大するのなら，動きにくい子ピットの中に小穴を掘らなくても，別の地点に応分の穴を掘れば済むではないか。

写真8はピットの西半分の攪乱した覆土をぶち切って現われた親ピットの床面と覆土の断面である。左側の穴が子ピットの床面と覆土の断面である。左側の穴が子ピットである。その様子を実測した断面図で示す。充填土はA，B，C，D，Eに大別され，その順序で廃絶後のピット内の空間を充填したものと推断する。

A　子ピットの底面を20cmほどの厚さで被覆する⑩の褐色土。七本桜・今市軽石粒を含み微量の炭化物を含む。子ピットの壁面が漸進的に崩落して形成された漸移層である。この土は孫ピットをも充填していた。第1次埋没土で霜の作用によるものと考えられる。この充填土中のe（b図－2）やf（7図の2）は共存するが，この充填土は親ピットの床面には見られない。つまり親ピットより若干早い時期に推積した充填土なのである。親と子・孫には廃絶から埋没開始までに若干の時間差があることを示している。

B　黒みの濃い⑥と⑨の混土層。今市軽石粒を含んだ黒色土で，床面を厚く被覆する充填土である。この混土層は親ピットの原開口部の大規模な崩落によるもので，空洞状のピット空間に雪崩れこんだ土が床面を覆い，断面図の矢印の方向に子ピットの内側肩口から斜めに流れこんでいる。この充填土の流れこみの様子を見ると，この土は親ピットの床面中央部に崩落したもので，その勢いで床面周縁部へ放射状に広がったことを示している。第2次埋没である。崩落はかなり大規模に起り，子ピットの大半の空間を斜かいに埋めている。多少の時間差はあっても，親と共に子もまた開口状態にあったことを示している。親が埋没しては子・孫は使えないから三者は共存していたわけである。

床面には朱彩の加曽利ＥＩの浅鉢破片（a，b）やもう1個体の浅鉢（d）の破片が存在，偏平な河原石製の凹石・磨製石斧の半欠片などがウキの状態で見つかった。朱彩の同個体はＥにも含まれていた。子ピットの充填土中にも，北寄りの壁ぎわに位置して2片の同個体（e）が含まれていた。これらの遺物はこの混土層の流れこみの終期の投棄である。写真7は子ピットの底面と孫ピットを撮ったもの。孫ピットの開口部とその肩口に引っかかっている小形土器（f）と球体の礫が見える。この小形土器は無文で朱彩だった。

実測図の図面に，親ピット西半分の床面上にウキで出土した加曽利ＥＩ（c）の個体（底部欠損）や同じレベルでの破片も，朱彩の浅鉢と同時期の投棄である可能性もあるのだが，離れているし，西半分の攪乱はすさまじいので共存説は諦める。

C　褐色ロームの攪乱層。③と④の層。親ピット壁面に接する（断面図では両側に見える）。加曽利ＥＩ破片を含んでいる。この充填土は子ピットの北側肩口から内部に流れこんでいる。

D　Cの内側に接して落ちこんだ今市層の塊土で⑤⑦⑧の層。褐色ロームの攪乱層と今市層塊

土は併立してBの混土層の上にのっている。このCとDとは第3次埋没である。親ピットの中位の壁面が崩落して形成した充填土である。第2次埋没が第1次埋没の直後に起ったことは子ピット開口部の充填土の状況から明らかである。つまり，子ピットを斜かいに充填した混土層に〝漸移層〟ぬきでCとDとがのっているからである。親ピット中位の壁面を形成していた自然推積層がそのまま陥没してピット内の空間を充填したのである。

A，B，C，Dの充填土の在り方はピットの崩壊が急速に進み，きわめて〝人為的〟で徹底的なものであったことを示している。この巨大なピットは，空洞状態で廃絶された後，まず開口部を踏み壊された。壊しながら，朱彩の浅鉢（半欠でそれも既に割れていた）や小形土器（孫ピットの）や石器の破片や礫なども投棄された。

続いて，壊れて拡大したピットの開口壁面が踏み壊されてピットは不整形の凸凹したくぼみに変った。巨大なピットであるだけに，空洞状態のままで放置すると人が落ちたりして危いので，機能終了により廃絶すると速やかに埋め立てる必要があったのだろう。それにしても徹底的に壊したもので，完掘して埋没経過を掌握するまでに延13日の悪戦苦闘を強いられたのだった。特に西半分の部位は後世の攪乱があったらしく掘り方が難しかった。

E　最上部の覆土。黒みの淡い混土層で①②の層。今市軽石粒をかなり含んだ黒色土で厚い。前述の「不整形なくぼみ」と化したピットを漸進的に充填した土層であろう。第4次埋没である。この層は後世に更に攪乱している疑いがある。平面的な拡がりがよくわからないことと共に，この層の最下部からBに含まれている朱彩の浅鉢の片われが出ているからである。従ってこの混土層は水平攪乱と共に垂直攪乱している疑いが濃い。従って第3次埋没の充填土であることは認められるが，その推積状態については全く信用できない。前述したピット西半分の床面近くに出土した土器個体の時間的位置について推断を避けたのも，このEの混土層の攪乱があまりにも甚しいからである。

（遺物）

時期＝加曽利ＥⅠ。第1次埋没に伴う遺物……土器＝6図－1・2・3，7図－2・5・8，8図－1・5・6・10・11

6図－1。ピットの東西方向の断面の下位や南北方向の断面6層に含まれていた破片，床面ウキの破片（＝a，b）など接合して得た個体。かなりバラバラに出土したが第1次埋没土中の遺物である。中型の浅鉢形で，出土した個体は全部接合できて半分。他の部分はそっくりない。個体の半分だけの破片を投棄したもの。加曽利ＥⅠ式。焼成堅緻で，器面は平滑に整形し，胴下半から底部にかけて傷みはあるが火熱の作用はない。肩部で〝段差〟をつけて口頸部文様帯を区画している。口唇はやや内傾ぎみ。口縁部は「く」の字に屈曲して立ち上り，上・下段に分かれる。上段は無文，下段は文様帯。つまり，対応する4つの把手でタテわりし渦巻文と懸華文を彫刻的に刻みこみ，余白部分を併列するタテの刻線文で充填している。区画帯の全面と器面の内面に朱を塗布している。

6図－2。子ピット内の充填土の破片（e）を接合して得た個体。片側がそっくりない。中型の浅鉢で加曽利ＥⅠ式。器面は黒と褐色のまだらで胎土に粗砂が見える。火熱で焼けて器面はもろくなっている。口縁は楕円形で，図は短軸側を示す。長軸の両端に対応して2つの波頂部がありその巾は38cm，短軸は30cm。地文はなく，器面整形の擦痕がみえる。口唇は外傾し粗雑な沈線を1本廻らせる。波頂部は，外側は丸

いコブ状の突起を2本の平行沈線で囲み，内側は平行沈線で渦巻文を施工。器面内側に〝段差テラス〟を廻らす。

6図－3。子ピット床面の混土層中の特に北側壁ぎわから出土した土器片（d）を接合して得た個体。大型の浅鉢形でおよそ半分が全部ない。加曽利ＥⅠ式。前記した2個体と同様，最初から欠損の破片を一括投棄したものだ。かなり焼焦げており器面は傷んでいる。口頸部に段差をつけて区画帯をつくり出す。区画帯は地文に縄文をつけ口唇に太い隆線を廻らす。この部分をおそらく4つにタテわりし，2本の平行沈線で懸華文を施す。無文部は平滑に整形している。

7図－2。写真7に示す孫ピットの肩口にひっかかっていた土器（f）。小型のツボ形。加曽利ＥⅠ式併行。手ずくねで器面に凸凹があり小いさなヒビ割れが無数にある。底はツバつき。表裏に朱が塗ってある。口縁にドーナツを半截したような小把手が対応する。口縁の一部と共に一方の把手は欠損している。

7図－5。子ピット内から出土。キャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥⅠ式。焼成良好で胎土に微量の雲母を含む。器面は赤褐色を呈する。地文の縄文を施文後に隆線を貼付。口唇が内側へ屈曲。文様は渦状文をモチーフとする曲型的な加曽利ＥⅠ式。

7図－7。子ピット内の下位の黒色土から出土。中型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥⅠ式。火熱で器面が傷んでいる。〝二重口唇〟。文様帯は隆線の渦状文を主体に空白部分をタテの刻目で充す。胴部の地文は撚糸文。

8図－1。親ピット床面にウキで断面に出土。深鉢の口縁部破片。加曽利ＥⅠ式。胎土に粗砂。かなり焼焦げ器面は傷んでいる。器面は凸凹あり整形の擦痕が見られる。口唇は平担で一本の太い沈線を廻らす。口唇は内側に張り出している。口縁に半截竹管によるらしい粗雑な平行沈線がある。

8図－5。子ピットの床面から出土。キャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥⅠ式。火熱で器面に網目のように小さなヒビが入り，もろくなっている。

8図－6。子ピット内から出土。胴部破片。加曽利ＥⅠ式。

8図－10。子ピット内から出土。胴部破片。胎土よい。加曽利ＥⅠ式。節引き文。

8図－11。親ピットの床面から出土。胴部破片。加曽利ＥⅠ式。焼成良好，器面は凸凹があり不整，黒色を呈する。粗雑な平行沈線の間に〝縫い目〟のような点列を施す。

以下の土器はこのピット内の出土であるが共存しない。

7図－1。実測図中のcとした土器。ピットの南よりの壁ぎわから出土したが，この部位は既述のように攪乱しているので抜げこみではあろうが図中のaとの共存が論証しにくい。口縁部を2ヶ所，全体の3分の1ほどを欠損。胴部の一部や底部も欠損している。中型のキャリパー状深鉢形。加曽利ＥⅠ式。火熱で器面が傷んでいる。大きな把手もボロボロになっている。底部は褐色に焼けただれている。口頸部に隆線を廻らして文様帯を区画，口唇に太い沈線を廻らし〝二重口唇〟とする。文様は2本の併行隆線で懸華文。懸華文の連結部は小突起となり，大きい把手と3個の小突起が都合4個対応する。

7図－3。ピット南西部の上位で出土。口縁部破片。阿玉台の古式，口唇に一本の結節沈線。隆線の背が尖り断面三角。器面は平滑。

7図－4。ピット上方の崩れこみの攪乱層から出土。キャリパー状深鉢の口縁部破片，加曽利ＥⅠ式。焼成良好，胎土に雲母を含む。縄文の施文方向が一定しない。把手は欠損。隆線で曲線文をつける。つけ根を平滑にこすっている。

7図－6。ピットの東側上位で出土。キャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥⅠ式。焼成

良好。器面に焼焦げがある。器面は凸凹があり，縄文は無節で施文方向は一定せず，口縁部に沈線による区画帯をつくり，〝縫い目〟のような連続刺突文を施す。

7図－8。ピット上位の出土。口縁部破片。加曽利EⅡ式か，器面は栗色。少し雲母を含む。太く巾広の沈線で文様帯を区画。区画帯は浅い沈線文を併列している。

8図－2。ピット上位の出土。胴部破片。加曽利EⅠ式。焼成良好，器面は栗色を呈す。地文の縄文を施文後，平行沈線を引く。割れ目をみると，表面・裏面に粘土をはり足して器壁を厚くしたことがわかる。

8図－3。ピット内の出土。小型のキャリパー状器形の口縁部破片。加曽利EⅠ式。焼成良好，器面は灰黒色。地文はなく，器面に整形の擦痕がある。口唇内傾。口縁にボタン様の突起がある。胴部は2本セットの平行沈線で器面を4つにタテ割りする。沈線は半截竹管ではなく，同じ工具で2度引いたもの。

8図－4。ピット内の出土。深鉢の口縁部破片。加曽利EⅠ式。地文なし。口唇肥厚。隆線の背を深く扶った沈線で平行隆線のようにつくり出す。

8図－7。東半分の上部から出土。深鉢の口縁部破片。加曽利EⅡかも知れない。器面黒色で炭化物が付着。小波状口縁。口唇肥厚，太い沈線を廻らす。口頸部以下に地文の縄文。太く浅い平行沈線を引いている。

8図－8。ピット内から出土。浅鉢の口縁部が屈曲する部分の破片。加曽利EⅠ式。焼成堅緻。器面は黒色で平滑。裏面も平滑。雲母を多量に含む。太く彫刻的な沈線を用いている。

8図－9。ピット内の出土。胴部破片。加曽利EⅠ式。火勢の影響が顕著，割れ目に炭化物が付着。地文に縄文をつけ，タテに2本セットの蛇行沈線を竹管文でつけている。

8図－12。孫ピットの開口部に既述の小ツボと一諸に出土した磨石である。

P－3（8図～9図，写真9）

現開口部直径約 135cm・深さ約20cm・床面直径約50cm。子ピット2個。廃絶の推定季節＝春以降

外見上は〝皿状〟を呈する浅いピットで，現開口部のある今市層上面から床面まで深さ約20cm。床面は今市層中にあり，壁はほぼ垂直だ。この部位の今市層は厚さ40cmほどで，その下は褐色ローム。

実測図に基いて述べる。

ピットの床面は平担でほぼ水平。床面の北側と南側の壁面に，やや切りこんだ状態で子ピットが2個ある。北側の子ピットに接してもう1つ小穴があるが，親ピットのプランの外側にあり，不整形で浅く，位置・形状・遺物などから考えて「共存」の立証が難しいので，別の所産とみて除外する。

ピット内の充填土は今市軽石粒を混えた黒土の混土層で，2つの子ピットも含めて均質であった。

2つの子ピットはそれぞれ壁面に抉りこんだ状態にあり，底面は平担で褐色ローム中にある。形は円筒形。北側の子ピットは床面から深さ22cm，南側の子ピットは床面から深さ40cm。

ピット内の遺物は稀少だが，写真9のように床面中央部にウキで加曽利EⅠの無文土器片が1個あった。南側の子ピットの中にも破片が入っていた。これら2片は同個体で接合できた。これから，この親・子ピットは廃絶の時点では空洞状態で開口しており埋没開始直後に破損した土器片が投棄されたことがわかる。充填土が均質であったことから，このピットは北と南の壁に都合2つの子ピットを持ち，完掘した状態からみて後時の攪乱はないと見られるので，原形の最下部と考えてよかろう。ピットの上部は

耕作などで削りとられたのだろう。長い間の攪乱で最後に残った部分だったと見る。削りとられたであろう上部の形態は勿論わからないが，床面直径 150cmで子ピット2つをもつこの子ピットが貯蔵機能を持つなら〝皿状〟や〝円筒状〟であったとは考えられない。このピットの原形は「袋状」であり，現形の〝皿状〟は崩落と攪乱削取をくり返えした結果の終末相であると推定する。

（遺物）

時期＝加曽利ＥⅠ。第1次埋没に伴う遺物……土器＝9図－1。石器＝なし。

9図－1。口縁部は床面中央部にウキで，底部が子ピット内から出土した個体で既述のように時期決定のデータと考えられる。中型の浅鉢。加曽利ＥⅠ式。全体の約半分しかなく，既に割れていたカタワレを投棄したもの。焼成堅緻で器面は平滑に整形している。口唇が肥厚し約3cm巾の〝段差テラス〟を廻らしている。口縁に〝双　〟の波頂部があり，これが4つ対置される。

以下は共存しない，流れこみらしい遺物。

8図－1。ピットの南半部から出土。口縁部の破片。加曽利ＥⅠ式。器面は赤褐色で胎土に雲母を含む。

8図－2。ピット内の出土。口縁部の破片。阿玉台の古式。胎土に若干の雲母を含む。火熱により器面に小さなヒビが入っている。無文。

8図－3。ピット内の出土。キャリパー状深鉢形の口縁部。当地における典型的な加曽利ＥⅠ式。焼成良好で胎土に粗砂を含み，器面は栗色。地文に縄文を施文後に隆線を貼付し懸華文をつけた。

P－4　（第8図，写真9）

現開口部直径約 110cm・深さ35cm・床面直径120cm。廃絶の推定季節＝春以降

実測図のように見かけ上は〝皿状〟。今市層をぶち抜いて掘りこみ床面は褐色ロームの上面である。つまり壁面は今市層，床面は褐色ロームで床面は層位の境目に作られているのだが，隣在するピットP－3，P－5も〝皿状〟で今市層上面からの深さがほぼ同様であるところからピットを必要な深さまで掘り下げた結果そうなったのであって意識的に「境目」をねらったのではないらしい。従って〝皿状〟も隣在ピット所見と考え合わせて，終末相にすぎず原形は「袋状」であった筈である。

充填土は今市軽石粒を含む黒土の混土層。床面に接する部分には褐色ローム塊が混っていた。これは床面の破傷によるものと考えられるから，ピットの廃絶後の第1次埋没の進行は漸進的だったのかも知れない。

写真9のように，床面から20cmほどウキの状態で土器片が投棄されていた。この土器片は前述の黒色の混土層に含まれるもので，早くとも第2次埋没の段階での投棄である。他に遺物はない。

このピットの壁面は湾曲し，床面は平担で「袋状」の痕跡を留めるものと解される。現開口部は凸凹があるので後時の攪乱による削り取りはかなり激しかったのであろう。

（遺物）

時期＝不明。第1次埋没に伴う遺物……なし。

8図－4。ピット内の上位で出土。大型深鉢形の口縁部。阿玉台の新式。焼成良好で胎土に雲母を含む。器面は暗褐色。口頸部に長方形の区画帯をつくり出す。隆線に沿って連続刺突文を施し，胴部に刻目文がみえる。

P－5　（第9図，写真10）

円形プラン直径約3m・深さ30cm。プラン内のピット直径約 1.3m・深さ60cm・ 155× 210cm，子ピット1個。廃絶の推定季節＝冬？

今市層の上面に輪郭不明瞭の直径3mほどの不整円形プランを視認し完掘する。実測図と写真10に基いて述べる。

プランの南西壁はかなり崩壊しているが，他の部分の壁はさほどでなくややオーバーハングして深さ30cmで底面に至る。底面は今市層中にありほぼ水平で平担。プラン内の北よりの壁に接して直径 1.3mほどのピットがある。このピットの壁面は，東側はほぼ垂直だが西側から北側へかけてオーバーハングし「袋状」気味である。地層が北下りに傾斜しているためピットの床面は，南側部分が今市層中に，北側部分は褐色ローム中にある。ピットの南側肩部には段差のある張出し状の部分があったり，開口部周壁も凹凸が甚しく，現開口部が〝原形〟とは到底考えられず，このピットが現壁面の痕跡が名残りを留める「袋状」であったとしても後時の攪乱で壁面の大部分を削除されているものと見る。このピットの床面北壁に接近して子ピットがある。子ピットは直径約35cm・深さ20cmで，底面が平担な〝親〟と相似の形状である。

円形プランの底面に2つの小穴がある。2つとも底面から深さ70cm・口径40cmほどで柱穴に似た形状だ。

円形プランとその中のピットの充填土は今市軽石粒を混えた黒土の混土層で，両者の間に特に差違がない。プラン内で極く僅かの土器細片・石片などが出土したが，特記するほどの遺物はなかった。ピットの床面壁ぎわの充填土は褐色の混土層で，部分的に壁面剝落の形跡があった。

円形プランは外見上は住居址に似ているが，柱穴の数が足りないし，出土遺物もプラン底面南側よりに礫が1個ウキで出土した他に顕著なものがなく，縄文中期を跡づけるはっきりした「人為」的傍証に乏しいので，時期も用途も不明の所産と考えておきたい。

プラン底面のピットは子ピットがある。しかし親・子が共伴した傍証は得られなかった。

円形プランは「小竪穴」のようである。その内部のピットとの共存が立証できれば，〝屋根を架した土拡〟説も可能だが，充填土の様子から「両者の共存」は断定できなかった。遺物による時期判定にもキメ手がなかった。共存についての結論はさけるが，両者の形状・充填土・若干散見された遺物などを相乗すると，縄文中期の遺構と考えてもいいのかも知れない。共存しない場合は別個の遺構の重複だ。円形プランは今市層上面から掘りこみ，ピットはプランの底面に開口面をもつ。ピットはその壁面上半部を削り取られていることになる。とすれば両者の時間差は，ピットが先，円形プランが後になる。ピットの貯蔵機能から考えるとこんな浅いピットは不適当な感じがするので，両者の「重複」説をとりたい気がする。

（遺物）

時期ー「円形プラン」「ピット」ともに不明。第1次埋没に伴う遺物ーなし。

円形プランもピットも目ぼしい遺物なく，前者の充填土から出土した土器片を記載するにとどめる。時期決定のキメ手はない。

9図－1。プラン内の出土。浅鉢の口縁部。阿玉台の旧式。焼成良好で器面は赤褐色。無文で器面は平滑に整形している。口唇が肥厚，その上に2本の刻目を施し，それから太い沈線を短絡させている。

9図－2。プラン内の出土。キャリパー状深鉢形の口縁部。加曽利ＥＩ式。隆線の背を沈線で鋭く抉り隆線が2本に見えるよう工夫している。2本の併走隆線を貼付する代りにそうしたもので，施文の〝手ぬき〟であろう。
他にも類例が多い。

9図－3。プラン内の出土。深鉢形の口縁部。加曽利ＥＩ式。器面は栗色。地文に縄文・口縁に隆線を貼付し，指圧痕を加えている。

隣接する3つのピット（P－6，P－7，P－8，写真12）

これから記述する3つのピットは，P－8の下位の側壁にその南側のP－7の子ピットが接触し，東側のP－6の下位壁面が接触している。両側から接触されているP－8は〝二重底〟のピットで，後述するように2つのピットが同じ平面で重り合っているので，接触の仕方が複雑である。別図に模式的にその様子を示す。図の中央部の二重底のピットP－8は後述するように充填土の関係から下の底が古く上の底が新しい。

ピットが貯蔵機能を持つ以上，それは「閉鎖」された空間でなければならない。従って2つ以上の空間が接触して連続していたなどは論外で，この3つのピット正確には4つのピット空間はそれぞれ独立していた筈でありその4つのピットには掘り込みに明確な時間差があると考える。この見地に立ってピットの先後を考えてみる。

P－8の下底を旧ピット，上底を新ピットとする。

P－7は子ピットが隣りの旧ピットと接触している。新ピットは壁面で隣りのP－6と接触している。新ピットは旧ピットを修復して〝更新〟したのだと思う。新ピットは浅いが横には大きくなった。旧ピットは廃絶から長時間経てば自然的に崩壊する。修復して〝更新〟するならそうならぬ間にやるだろうから両者の時間差は比較的短いことになろう。新ピットとP－7の接触部は双方とも廃絶後の壁面崩落が殆んど起らない箇所である。従って，この接触部はどちらが先にしても既設ピット埋没終了に，もう1つのピットが掘りこまれたためにできたのである。どっちが先にできたのかわからないが，旧ピットと〝更新〟の新ピットの設置との時間差が割合いに短いとすれば，既設ピットの隣接部位であることを知らずにその作業を行った公算がある。既設のピットと〝切り合った〟場合は当然壁面は自然堆積層よりはもろい筈だから，そういう箇所は避けるのではないか。〝切り合い〟そうな場所で〝更新〟の作業を行ったのは既設ピットが隣接部位ですでに埋没して時間的な経過が長かったからか。それなら，P－7が先，P－8が後だ。逆に，隣接部位が処女地だったこともあり得る。とすると両者の先後は逆になる。どっちにしても，一方が完全に埋没してからの〝接触〟だと思われる。

新ピットとP－6は掘り込みによって〝接触〟したのではなく，隣接していたピットがそれぞれの壁面崩落をくり返している間に結果的に〝接触〟したのである。旧ピットなり新ピットなりが原形でいた時にP－6を隣接部位に掘り込むのは考えにくい。相互の壁面を傷めると「閉鎖」的空間を保てなくなるからだ。P－6が原形で既存しているのに，新ピットを隣接部位に掘り込むのは〝壁面破損〟の理由からもっと考えにくい。単純化していえば，新ピットを〝更新〟するならP－6はない方がよりよい。だから，新ピットが先，P－6が後と考えたい。

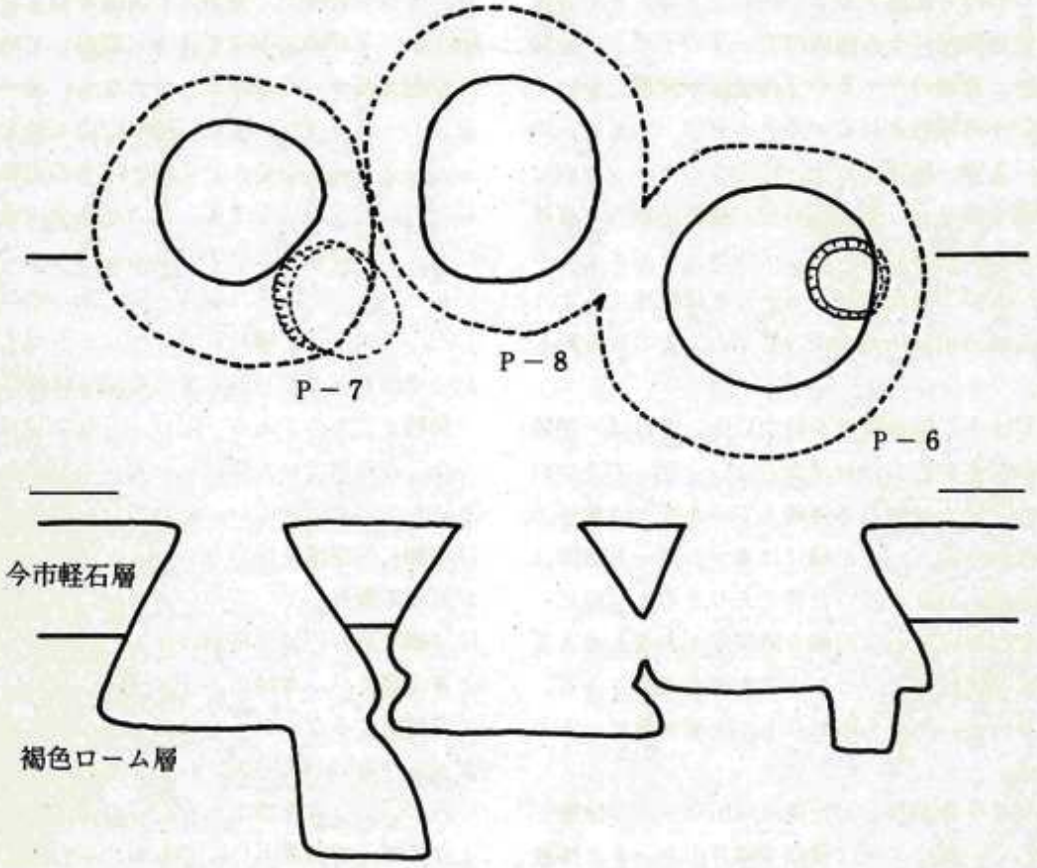
各ピットとも充填土から出る土器は加曽利EⅠなので，時間差といっても「数年」程度であろう。

以上の見方から各ピットの先後関係を次の試案で考える。

① P－7→P－8（旧）→P－8（新）→P－6

② P－8（旧）→P－8（新）→P－7≧P－6

（≧はより古いか同じ時期かの一方）



第3図　切り合うピット（P－6～P－8）の模式図

P－6　（第10図，写真12～15）

現開口部直径約 120cm・深さ70cm・床面直径約 180cm。子ピット2個。廃絶の推定季節＝冬

南高北低の今市層の緩斜面に輪郭を視認，まず東半分を掘り下げる。現開口部から深さ20cmほどの壁よりの部位に炭化物のブロックがあった。木の枝らしい断片で，焼けてはいない。第3次埋没の充填土中に含まれ，自然に炭化したようだ。東半分を掘り終えてピットの南北方向の断面図を得たが，北側部分では層順がよくわからなかった。

充填土は三大別できる。

③　床面を被覆する褐色ロームを主体とする混土層で，5～25cmで上面は凸凹が激しいが総体には壁側が厚く床面中央部が薄い。第1次埋没で，床面・周縁部を形成する褐色ロームの剝落が徐々に進行した結果堆積した充填土であろう。

②　ピット空間の中位部分を充填する土層。第2次埋没である。いく分やわらかい褐色土に今市軽石粒・七本桜層土を含む混土層である。原開口部・上部壁面の崩落によるものだが，厚さ20cm前後でさほどに厚くない。

① 黒みがかった褐色土で今市軽石粒・七本桜層土を含む混土層。ピット空間の上半部を充填する厚い土層で，部分的に今市層の塊土がある。厚さは30～50cm。この充填土も第2次埋没であるらしい。②と①との土質と固さが漸移的で，画然とした変化はないのである。両者の差違は埋没部位に基づく〝混合度合〟の差違であって，埋没の仕方が変化したのではないと考える。つまり両層の埋没は連続的に進行したもので，その上面の堆積と下面の堆積とには相当の時間差があるだろうということである。要約すれば，③は比較的短時間の充填であり，②と①は連続的・漸進的な充填で比較的長時間の充填であろうと考えるのである。従って〝スリバチ〟状にくぼんでいたであろう部位の第3次埋没の充填土は見られなかった。恐らく耕作で削られたのであろう。

ピットの西半分を掘り下げると，写真13のように土器片のブロックが出土した。破損品であり，第2次埋没の進行中に投棄されたものと解する。この現開口面は後時の攪乱も受けやすい部位なので〝混入〟もあり得る。この点から，これら土器片はピットの時間的位置決定の証拠にはしにくい。

写真14はピットの完掘図で，床面ぎりぎりにウキで2個の礫が見える。実測図と合せて述べる。図の床面の東壁ぎわにも礫が1個ある。これもウキだ。これらの礫は第1次埋没に伴って「投棄」か「混入」したものである。土器片はない。

ピットの床面は平担で，北側壁ぎわと西側壁ぎわに子ピットがある。北側の子ピットは口径約50cm・深さ69cmで，底面は楕円で長径55cm。床面中央部よりに傾斜している。西側の子ピットは口径約40cm・深さ59cm・底径35cmでほぼ円筒状。廃絶の時点では，親ピットと同じ開口していたことが充填土の関係でいえる。実測図の断面図にみるように，このピットは殆んど「袋状」を呈さない。壁面の崩落が甚しいのと，前述のようにピット上部の削り取りとが重なってのことと思われる。写真15は完掘後に，このピットの西側壁面が隣接するP－8の壁面と〝接触〟し穴があいている状態を示す。大量の壁面崩落をくり返えした結末である。

（遺物）

時期－加曽利ＥＩ？。第1次埋没に伴う遺物－なし。

ピット内から出土したのは第2次埋没以降に伴う投棄の土器片で，これら加曽利ＥＩ式だから時期は加曽利ＥＩに比定してもよさそうだが，第1次埋没に関するのは床面ウキの礫2個で決定的な物証がない。ピット内の遺物の特徴的なものを略述する。

10図－1。写真13に示したピット上面の土器片ブロックの1つ。キャリパー状深鉢の胴下半部。加曽利ＥＩ式。火熱の影響甚しく底部あたりは焼けただれ器面が傷んでいる。器面に現状で見えるのは縄文だけ。巾約巾約 1.5cmほどで痕跡的な指のすりけし痕が併走している。

10図－2。写真13の土器ブロック中の1片。大形深鉢の胴部。焼成良好，火熱の跡あり器面に炭化物が付着。裏面も焼けこげがひどい。地文を施文後，隆起線を貼付。2本の併行する隆線が渦状文を描く。そのつけ根をヘラ仕上げしているが密着化が不完全。縄文施文中に指で強く押された部分が拓影ではタテのシマにみえる。

10図－3。ピット内の出土。浅鉢の破片。加曽利ＥＩ式。焼成良好，器面は黄褐色。無文で口縁が屈曲し朱が塗ってある。裏面にもある。

10図－4。ピットの出土。口縁部の破片。加曽利ＥＩ式。焼成良好。口唇が肥厚し刻線による施文がある。

10図－5。写真13のピット上面の土器ブロックの1片。加曽利ＥＩ式。焼成良好で黄褐色を

呈し多量の雲母を含む。地文の縄文をつけた後太く浅い沈線で施文。

10図－6。西半分の上部の黒褐色土から出土。キャリパー状深鉢の口頸部破片。地文は撚糸文。器面は灰褐色を呈する。加曽利ＥⅠ式。

10図－7。西半分の上部の黒褐色土から出土。深鉢の底部。加曽利ＥⅠ式。焼成堅緻。垂下する2本の隆線がある。これで器面を4つにタテわりしたものらしい。

10図－8。西半分の上部の黒色土から出土した破片を接合して得た個体。口縁や胴下半部の一部と底部とが欠落している。もともと割れていた個体破片を投棄したものだ。小型のキャリパー状深鉢。加曽利ＥⅠ式。火熱で上半部は黒色，胴下半分は赤褐色に焼けており，口縁裏側には多量の炭化物が付着している。口縁は小さな波頂部が2個対応している。この波頂部には渦状文をモチーフとした装飾があったらしいが欠落してわからない。口唇に沿って隆線を廻らし，そのつけ根に沈線を引く。口唇は〝段差〟のある二重口唇になっている。口頸部を隆線で区画し文様帯をつくり出す。沈頂部の下に渦状文が沈線で描かれている他は，文様帯はタテの刻線を併列しただけの施文になっている。胴部には縄文をつけている。

Ｐ－7（第11図，写真16～18）

現開口部直径約 100cm・深さ 110cm・床面直径約 140× 150cm。子ピット1個。廃絶の推定季節＝冬

今市層上面に開口部を視認，掘り始めるとその上面に写真16のように土器片の雑片が重なり合って出土する。現開口面にのっている状態である。このピットの最終埋没の時点でここに投棄されたものであろう。写真の土器ブロックの向う側と右手に七本桜層の塊土が見える。土器片がのっている黒土中に見える白っぽい点々は今市層・七本桜層の軽石粒である。この充填土はピット下半部までほぼ同じ，現開口部の下と西側壁よりの部位で土器個体が入っており，床面と後述の子ピットは黒褐色土で被覆されている。床面の充填土は無遺物。

ピットの現開口部は今市層上面にあるが，東側部分は大きく崩壊しここからだと床面までの深さは80cm，比較的崩壊していない北側からだと床面までの深さは 110cmだ。ピット下部と床面は褐色ローム中に掘りこまれている。床面は黒褐色土で被覆されている。原開口部が直接崩落したのではないようだ。ピットの床面・周縁部壁面が漸進的に傷められた結果形成された床面被覆土であろう。第1次埋没土である。つまり，この上部の混土層の充填までに若干の時間差があった訳である。床面壁ぎわに炭化物片があった。植物性の破片であろうか。

床面はほぼ平担。その北東側壁面に接して子ピットがある。Ｐ－8の〝下底〟壁面と接触している子ピットである。子ピットの口径は約45cm・深さ55cm。床面中央部よりのつまり内側の壁面はほぼ垂直だが，反対側のつまり外側の壁面は大きく張り出し床面直径は約80cmほどである。その最下の壁ぎわから土器片が出る。

以上を総合して，このピットは廃絶後に暫時空洞状態が存続しその間に第1次埋没が進行した。埋没の進行は漸進的で，層がわりに浅いことは第2次埋没までの時間差がそう長くなかったことを示している。子ピット上部にあった土器片は第2次埋没の開始と同時かその進行中の投棄と見る。現開口部面に出土した土器ブロックは後時の混入もあり得るので，このピットの時間的位置とは直接に関係ない。ピット内の第2次埋没土中の土器個体は子ピット内の土器片と同時期かそれより若干遅れるかで，投棄された時期にさほどの時間差はないと推断する。

（遺物）

時期＝加曽利ＥⅠ。第１次埋没に伴う遺物……土器＝11図－６。

既述のように床面の被覆土は無遺物で時期判定のキメ手がないが，子ピット内の１片の土器は辛じて第１次埋没に伴うものと判断できるのでこれを取り上げた。

11図－６。子ピットの底面北側から出土。第１次埋没に伴う遺物と判断する。中型のキャリパー状深鉢の胴部破片。加曽利ＥⅠ式。火熱で焼けて器面の傷みがひどい。器面は栗色。地文に細い縄文をつけ隆線を貼付する。

写真16と実測図に示した，このピットの現開口面における土器ブロックの中から，11図の１・７・８・11・12の５片を収録した。ピット埋没の最終段階での投棄と考えられるが，後時の紛れこみもあるかも知れないからこれらが共存するかどうか怪しいものである。

11図－１。大型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。火熱で焼けており器面の一部に炭化物が付着している。地文の縄文施文後に隆線を貼付。口唇に沿って隆線を廻らし〝二重口唇〟にする。その下６cm巾に隆線で区画された口頸部文様帯がある。２本の隆線を横に併走させ，中央をくぼませたボタン様突起を接点にする。この突起から１つおきに隆線を垂下させ，全体としては区画帯を４つにタテわりしていたものと思われる。

11図－７。大きなキャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥⅠ式。焼成堅緻，淡褐色を呈し胎土に微量の雲母を含む。がっしりした感じの土器である。台形状に盛上る把手が欠損している。渦状文をモチーフとする平行沈線が器面に彫刻的に描きこまれている。

11図－８。キャリパー状深鉢の口縁部破片。焼成堅緻，器面は焼けて赤褐色を呈する。図の右端の口縁部には把手がついていたのだが欠落している。口唇に沿って隆線を廻らせ，つけ根に沈線を引くことで〝二重口唇〟の効果を出している。文様帯は２本セットの隆線で８つにタテわりされ，その隆線から曲線文をつけている。隆線の断面は四角，つけ根に太い沈線を引いている。

11図－11。大型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥⅠ式。胎土に粗砂を含み，焼成良好。器面は焼焦げており炭化物が付着している。裏面も傷みがひどい。口唇部が外反。地文の縄文を施文後に，口縁部に隆線を貼付して文様帯を区画。文様帯には隆線を波状に廻らしている。隆線の断面は四角。

11図－12。深鉢形の胴部破片。地文の縄文の上に２本セットの綾絡文が垂下する。

以下はピット内の各所から出土したもの。

11図－２。ピット内の上部から出土。キャリパー状深鉢の口縁部破片。器面は黒褐色。口唇に沈線を引いて〝二重口唇〟とする。隆線で口頸部を区画し文様帯をつくり出す。

11図－３。ピット内の出土。口頸部破片。加曽利ＥⅠ式。焼成堅緻。

11図－４。ピットの西半分の下位から出土。キャリパー状深鉢の口縁部。加曽利ＥⅠ式。淡褐色。渦状文の隆線が特徴。

11図－５。ピット内の出土。加曽利ＥⅠ式。焼成よく赤褐色を呈する。少し雲母を含む。無文。口唇は外傾肥厚する。太い沈線が短絡していたらしい。

11図－９。ピットの上部から出土。胴部破片。加曽利ＥⅠ式。割れ目は輪積みの継ぎ目が剝げたもの。焼成堅緻。器面は黒色，焼けている。器面をタテに併走する沈線は３本セットで，これに渦状文が接していたらしい。

11図－10。ピット上部から出土。キャリパー状深鉢の胴下半部破片。加曽利ＥⅠ式。器面が焼けている。器面に粗雑な縄文をつけ，２本セットの綾絡文が垂下して，いくつかの部分にタテわりする。本遺跡の加曽利ＥⅠ式によく見受

けられる施文技法の一つである。

P－8　(第12図，写真17～18)

現開口部直径約 170cm。（〝二重底〟）

上底の直径約 170cm・深さ約 100cm。下底の直径約 190cm・深さ 125cm。廃絶の推定季節＝春以降

〝二重底〟のピットだった。写真17はその状態を示す。写真の下側は〝上底〟でその床面から20cmほどウキで土器片が出土，写真の上側は〝下底〟でその高さは30～35cmほどで壁がきれいにオーバーハングし「袋状」時代の名残りを止める。〝下底〟はほぼ平担に削られ無遺物だ。このピットの現開口部は崩落しきっていて，ピットの存在を示す以外に何の意味も持たない。特に東側壁面の崩落は甚しい。〝下底〟は褐色ローム中に約40～50cmほど掘りこまれている。この褐色ロームの上にある今市層はピットの上部空間を形成するから〝空洞状態〟で放置されれば崩壊するのも無理からぬが，かくも無惨にくずれるとは……。つまり，ピットは他のピットも含めて「壁面崩落」が起りやすいことを承知で掘りこんでいるフシがある。いいかえればピットの〝短命〟をあまり気にしていないのである。われわれが鉄製の移植ゴテとスコップを使ってフル操業しても完掘までに数時間はかかるし，「袋状」のせまい空間で子ピットまで掘子のだからその労苦は相当なものである筈。自然の堆積層だからイヤな今市層も避けられなかったのかも知れないが，別の項目で述べるようにピットが機能を果している期間はきわめて短いようである。「使い捨て」が結果的にはピットを累加させ群集させたように感じる。

このピットは〝二重底〟だった。それは1度は廃絶してしまったピットを，補修して〝再利用〟したということだった。新・旧のピットが「補修」という手続きによって重複したのであり，同じピット空間を再度利用したのである。

断面図により〝二重底〟が〝再利用〟であることを述べる。

ピットの下部が底面から30cmほどのところでくびれている。その壁面はきれいにオーバーハングして「袋状」の下面であることを示している。この〝下底〟はきれいに削りこまれていて，純粋の今市層で充填されていた。断面図の⑤層である。床面との間に⑦の薄層がある。今市軽石粒を含む褐色ロームの混土層で一種の漸移層になっている。壁ぎわにも褐色ロームの漸移層がある。この薄層は床面が機能を果していた時期の所産かも知れない。この〝下底〟を今市層を敷きつめて充填しほぼ平担な〝上底〟を形成した。この今市層は踏み固められているように感じた。ところでこの今市層土は，ピットの〝補修〟作業で得られた筈だから〝上底〟という新床面を作るために〝下底〟ピットの壁面を抉ることになる。（写真18のように〝下底〟の充填土である今市層が開口部位の崩落でないことは踏み固めと，充填土中に地表面の黒色土が全く含まれていないことからもわかる）。ところが，新床面である〝上底〟の周壁は20cmほどの高さの褐色ロームがある。従ってこの部分は削られず，その上側の今市層土を切り広げたといえる。〝上底〟の現形は「胴張り」である。〝下底〟ピットの壁面で今市層土を削ったとすれば，その〝補修〟の結果つくられたこの〝上底〟ピットは「袋状」は呈してもフラスコ型ではなく，もっと変形した空間をもつピットであったことが予想される。「袋状」のうちではフラスコ型は強度はより良好である筈だが，「更新」の結果やむを得ない形状とはいえ，より保壁力の弱い形状のピットでガマンしたのは一時期もてばよいという「使い捨て」の習慣を示唆してはいまいか。〝下底〟の充填土から推察できることはもう1つある。それは⑦の漸移層は他のピットの床面被覆土のように，ピットを空

洞状態で廃絶し一定時間外気にさらした結果形成された充填土ではないということである。つまり，〝下底〟ピットは「廃絶」されると同時に埋めたてられて〝更新〟されてしまったとも考えられる。〝下底〟を〝上底〟の時間差は，比較的短いであろうと前述したが，このような事実を考慮に入れると，何らかの事情で〝下底〟ピットの構築が失敗し，その代替策としてこれを補修した結果つくったのが〝上底〟ピットである可能性も濃い。

〝上底〟の上にのっているのは，④の黒色土と②の少量の今市軽石粒・七本桜層土を含む黒色土で，両層とも質的には違わない。この黒色土の層は10～20cmほどの厚さで，総じて中央部が厚かった。この層中に厚さ10cm前後で壁ぎわまで細い炭化物が混っている層があった。細片に砕けてしまう木片や，黒色土を更に黒っぽく着色している粉末の炭化物で，掘っている時の感じでは「木や草が重って堆積したのではないか？」であった。この炭化物を含む④，②の黒色土が〝上底〟の第1次埋没による充填土である。

③と②は黒褐色土。今市軽石粒を含む混土層で，③は褐色ロームが混っている。つまり壁面のロームが剝落して混っているのだ。これは，第2次・3次埋没土にあたる。下の〝上底〟被覆土である黒色土とは識別できるが，この黒褐色の混土層は漸進的にピット空間を充填したらしく，現開口部位は第3次的な充填であろうと思うのだがはっきり識別できなかった。第1次埋没の黒色土層と第2次以降埋没の黒褐色の混土層の両方から合計89個の小さい礫（径2～8cm）が出土した。特に後者の黒褐色の混土層中からは，投棄された土器片・磨製石斧の破片が出土するなど遺物が多かった。実測図は現開口部から50cmほど下の部位で出土した土器片の状態を示した。

実測図中のa，c，d，eは同一個体で，下底から約50cmウキ。この土器片ブロックと同じ部位でbとcの重なり合いで浅鉢破片が出土した。この土器片がP－19の床面の浅鉢と接合できた。この破片は左側1個と右側の2個の補修孔がある。第2次埋没に伴う遺物である。bは第12図－1。a，c，d，eは第12図－3。この土器片の上面には黒い砂の薄層が局部的に認められた。これは，ピットの中央部がくぼんでいて，雨のたびに水たまりができたことを想起させる。砂の薄層は部分的なもので，自然の作用で堆積したと理解した方が，人為的な所産と考えるよりは無理がない。おそらく，壁面崩落をくり返えしてピットは〝スリバチ〟か〝浅鉢〟状かに変形していたために降雨時に水たまりになったのであろう。第2次以降の埋没が漸進的だったとする理由である。従って，実測図に書きこんだ土器片もピット埋没開始後にいくばくかの時間差をもつ投棄と考える。写真17は完掘図である。〝上底〟の上部壁面に崩落をくり返えした今市層と境目とがよく見えている。

追記　〝二重底〟の類例は「鹿島神社裏」（註1）の第2次調査での発見があり，調査担当の川原由典は次のように報告している。それは「土拡－10」で，推定口径98cm・底径 287×296cm・深さ（現開口面から） 148cmの〝袋状〟を呈する。報文を引用すると，「充填土は，第一層に黒褐色土（ロームブロック，鹿沼軽石層，炭化物混入）で約1mの層をなし，第2層はローム層と鹿沼軽石層の混入層で帯状に土拡全体に廻っており，かつ堅くつきかためられた状態を呈し，調査途中では当土拡の底部面ではないかと考えた程である。厚さ18cmを計る。第3層は底部面まで約30cmの厚さに黒褐色土（ロームブロック，炭化物粒，焼土の混入著しい）が主体をなしており，特に炭化物の混入が著しく，意図的な投げ込みさえも感じられる」。

文中の第2層が〝上底〟だが，傍点をつけた「帯状に」は人夫の掘りすぎをそのまま記述したためのミスで，第2層は〝敷きつめ〟〝固め〟ていたという。第3層はピット廃絶後の投棄を伴う埋没だが，この後，わざわざ鹿沼土を動き固めて底面づくりをして「ピットの再利用」をはかったもの，と川原は考えている。
鹿沼土はピットが構築されている「田原ローム」より下の「宝木ローム」を形成するもので，第2層が移入した〝鹿沼土〟を敷いてつくった〝上底〟であることはほぼまちがいないという。
註1．「鹿島神宮裏」昭和49年4月，鹿沼市教育委員会・下野カントリークラブ刊。

（遺物）

時期ー加曽利ＥＩ。第1次埋没に伴う遺物……土器ー第12図－2・4。石器ー12図－6・7。

〝下底〟は無遺物で直接的な時期決定のキメ手はない。〝上底〟の第1次埋没土と考えられる④層の中から出土の遺物をもって時期を加曽利ＥＩと判定した。既述のように〝下底〟は〝上底〟より古くかつ時間差は少ないと見られるので，〝下底〟も同様に加曽利ＥＩと時期判定してよいであろう。

時期判定のキメ手としたのは炭化物が多量に混していた④層から出土した次の2片である。

第12図－2。中形の深鉢形の口縁部破片。加曽利ＥＩ式。焼成良好で胎土に細砂を含む。器面は黒色で焼けこげがひどく炭化物が付着。図のように波頂部には抉りがある。器面整形は不完全で表裏とも凸凹が見られ，かなり〝粗製濫造〟の土器だ。器面に痕跡的な縄文がある。破片なので断定できないが，器面には約 3.5cm の間隔で都合5本のすりけし痕がみられる。

第12図－4。大形の深鉢形の胴部破片。加曽利ＥＩ式。焼成良好，器面に細砂と微量の雲母を含む。器面は黒褐色。火熱で赤褐色の部分があり炭化物が付着している。櫛引文を縦走させて地文としている。

以下の2片は実測図中に描きこんだもので，〝上底〟からウキで第2次埋没以降の投棄によるものである。

第12図－1。〝上底〟から45cmウキで，実測図中の東側から出土。中型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥＩ式。焼成良好，胎土に粗砂を含み微量の雲母が見られる。図は口縁の把手の部分で，形状は三角柱。三面から円孔が通じている。円孔は二重丸で囲まれている。三角柱の頂部には三角状の刻みがある。把手や口縁以下の器面に縄文をつけているが，縄文の施文方向は一定していない。円孔をもった三角柱状の把手が4つ対応し波状口縁を呈する土器であろう。

12図－3。〝上底〟から35cmウキで，実測図中の西側のウキになって出土した土器。大型の深鉢形の胴部破片。加曽利ＥＩ式。焼成良好，胎土に細砂を含む。器面はかなり焼けこげており，器面の上半部は黒色，下半部は赤褐色で炭化物が付着。割れ目の部分にも付着している。余程の使い古しだ。図の上辺に波線文と2本の平行沈線が見える。地文の縄文に特徴がある。約2cmの間隔で指のすりけし痕が器面を縦走している。縄文原体を，器面の上方から転がす時，それを押える指先きを口縁に向けて施文するとこうなる。当地の加曽利ＥＩ式における特徴的な施文技法である。

12図－5。ピットの下半部から出土。キャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥＩ式。焼成堅緻，胎土精良。器面は淡褐色。口唇部外傾。縄文帯の下に2本の条溝を廻らし，上側の条溝内に鋸歯状の粘土紐を貼り，〝山〟部に刺突の列点文を加える。

ピット内から出土した石器について付記する。

12図－7。開口部上面の土器ブロック中から出した緑色の磨製石斧。定角式蛤刃でたんねんに研磨している。基部を欠損。刃部も刃こぼれ

が甚しい。基部の割れ目は打痕で扁平化し，この石斧は割れた後も，クサビのような2次的利用があったのではないかと想像される。

12図－6。ピット内の出土。中央部から割れて欠損している。定角式の蛤刃。刃部に若干の刃こぼれがある。硬質の火山岩製。

P－9（第13図～14図，写真19～21）

現開口部直径約 100cm・深さ 130cm・床面直径約 220cm。子ピット3個。廃絶の推定季節＝冬

今市層の南高北低の緩傾面に掘りこまれたピットの輪郭を視認。現開口部は南側肩が大きく崩れている。上部の充填土は今市軽石粒を含む黒土の混土層で，現開口部の15～40cmの部位に写真19に示す土器ブロックが出土した。これらの土器のうち，最上部の個体（a）は口縁を下側に向けて傾斜し，他の土器片もピットの内側へかけて傾斜した状態にある。これを，この土器ブロックが投棄された時点ではこのピットが〝スリバチ〟状のくぼみを呈していたのでその傾斜面に止った結果であろうと解する。（実測図中のa，b，c，d）。

ピット上部を充填する混土層は中央部がとがり気味の円錐台で壁よりの部位には今市層の塊土がある。その下のピット中位は多量の今市層の剝落塊土で充填されている。

この充填土は，壁面近くでは厚く中央部では薄く遺物は含まれていない。

ピットの下部と床面及び後述する3つの子ピットを充填していたのは褐色がかった粘質の黒土層でかなりの今市軽石粒を含んでいる。床面の南側壁よりの部位にも今市層塊土が多量に剝落している。

実測図に基いてピットの概形と遺物の出土状態を述べる。

現開口部から床面までの深さは，南側で約130cm・北側で約 110cm。「袋状」を呈するが開口部から中位の壁面にかけての崩落が甚しい。ピットは緩斜面に掘りこまれているので，壁面にみる今市層と褐色ロームの境は北側がより低いが，床面はこの境から約70cm褐色ロームに掘りこんでいる。

床面中央部に写真20のように礫群がほぼ同じ平面に散在している。礫は2，3個を除いて殆んどウキであり，重ったりとび離れたりでほぼ同じ平面にあるが，「組石」や「敷いたもの」ではなく明らかに「投棄」である。礫は床面を被覆する粘質の黒褐色の混土層に含まれている。礫は大小各種の河原石と山礫だが数は偏平な礫が多い。その偏平な礫が床面に敷かれたように見えるのは，礫が投棄された時点で床面を被覆する混土層が薄く平担な状態にあったこと示している。礫は床面の壁ぎわや後述する子ピットの底面にも入っている。これは空洞状態のピットの床面中央部に一群の礫が勢よく落下したことを示している。写真20に，土器片が礫の間には挟まって出土した状態を示した。礫と共に落下したためにこの状態になった。礫が「敷いた」ものなどでないことは明らかである。礫はピット廃絶後に若干の時間差をもって「投棄」ないし「混入」したものである。床面被覆の充填土中に，礫の下から長さ15cmほどの棒状の炭化物（枝の一部か）が3，4片出土した。床面に散在していた礫は合計して大小62個。分ければ次の通り。

〈山石の礫〉

乳児の頭ほどの大きさの礫……10個
平らで片手でもてるほどの礫…18個
拳より少し大きい礫……9個
拳ほどの大きさの礫……7個
拳より小さい礫……13個

〈河原石の礫〉……5個

これら礫の間に挟まって前述した土器片が出

土し，礫群の東よりの部分直上から実測図にある小形土器個体（eの土器）が出土した。これらの土器は礫群と同じ充填土中にあり共存するといえる。

床面壁ぎわに子ピットが3個ある。実測図の西側の子ピットは開口部が約45cm・深さが約70cm，北側の子ピットは開口部が約45cm・深さ65cm，東側の子ピットは開口部が約35cm・深さが40cmで，それぞれ若干「袋状」を呈しピットの中央部へかけてかなり傾斜している。充填土は床面被覆の混土層が流れこんでおり親ピットが廃絶された時に3つの子ピットも同様に空洞状態であったことを示している。

西側の子ピット内には写真21のように中型のキャリパー状土器（底部の一部を欠損）が逆位で入っていた（実測図中のfの土器）。土器の下と横に河原石の礫があり，これらは子ピットの外側の壁に接して重りあっていた。礫は扁平な4個を含めて計6個ですべてウキ。その充填土は「新しい感じ」の今市層土で〝ザクザク〟しており，部分的に炭化物が見られた。遺物が「外壁寄り」に上下に重なり合っているのは，子ピット内に中央部から斜めに流れこんだ充填土の面に沿ったためだが，子ピット自体が傾斜しているので，いっそう重なり合いの状態を顕著にした。前述のキャリパー状土器が逆位であるのは投棄されたこの土器が子ピット内に転りこんだ時に，最も安定した体位をとったからである。この土器は投棄されたときにすでに破損品で，未攪乱の下部充填土中にも同じ個体の破片はなかった。

北側の子ピットには土器片と炭化物が出土した。礫はなかった。また東側の子ピットには何も入っていなかった。

3つの子ピットのうち，西側と北側との2つはほぼ同じ大きさ，東側は小さく浅い。共通するのは，親ピットが空洞状態で廃絶された時この3つも同様に空洞であったこと・形状が底面と壁面を平担に整形し〝親〟に相似であること・設置された位置が床面壁ぎわであることなど。

相似の形状の親・子のピットは廃絶まで同時開口していた訳で，それは機能上の相関関係のため共存していたことを示唆する。つまり子ピットは親ピットへの補助的機能を果し，親子のコンビで貯蔵機能をより充分に満足したのではないか。子ピットの軸が中央部へ傾斜しているのは，掘りこみの時にその方が掘りやすかったのと，貯蔵物を取り出しやすいなど，主に当事者の便利さの問題に帰結したい。水抜き用の穴とか，蓋支えの柱穴とかなどの解釈は〝壁と底面を整形〟し〝空洞状態で廃絶〟という形態のみならず機能上も親と相似な子ピットの存り方から見ていささか疑念がある。

以上の観察を総合してピットの埋没状況を考察する。

1．親・子ピットは「空洞状態」で，ほぼ原形のまま廃絶される。

2．開口部が少し剝落し，たぶん原開口部にあった（用いられていた？）礫が落ちこむ。第1次埋没の開始である。

3．西側の子ピット内の中型土器や礫群の上部の小型土器が投棄される。たぶん木の枝なども投棄される。第1次埋没は進行する。この充填土が褐色がかった粘質の黒土層である。子ピット内に多量に入っている今市層土はこれに継続する充填と見られる。

4．上部の壁面を形成していた今市層土が大量に崩落してピット空間を環状にとりまく。第2次埋没である。第1次に連続して起るが，埋没速度が早く時間的にも短いと考える。

5．〝スリバチ〟状のくぼみに〝変身〟したピットに周縁から土砂が流れこみ，漸進的に平担化が進む。第3次埋没である。写真19の土器ブロックはこうした過程での投棄で，ピット下面の土器とは共存しないし，ピット自体と直接の

かかわりがない。

従ってピットの現状は，ピットの上半部，特に今市層の壁面と現開口部の形状は崩落はくり返えした結末の姿であって，原形にはほど遠いものである。

（遺物）

時期＝加曽利ＥⅠ。第１次埋没に伴う遺物……土器＝13図－１・２・３，14図－５。

床面中央部に散在していた礫の間に挟まれて出土したり，その直上にあったり，子ピットの下底に出土したりした土器を第１次埋没に伴うものとし，これらを時期判定のキメ手とした。まずこれらの土器個体について述べる。

13図－１。写真20に示した土器で礫に挟まって出土。礫上面にもあった個体と接合して得た個体。このピットの時期決定のキメ手である。中型のキャリパー状深鉢。典型的な加曽利ＥⅠ式。すでに破片となっていたものを投棄したのであって，個体の３分の１ほどしかない。胎土に細砂と若干の雲母を含む。焼成堅緻。器面に焼焦げがあり，一部に炭化物が付着している。文様区画後に縄文を施文しており施文方向が一定しない。口唇はやや内傾。口唇と頸部に隆線を廻らして文様帯を区画し，その部位に２本セットの隆線で曲線文を施す。胴部は併行する３本セットの沈線を垂下させて器面を４つにタテ割りし，その部分に蛇行沈線を垂下させる。この土器は胴下半部でやや「胴張り」になることも含め，器形・文様とも当地にはきわめてポピュラーな加曽利ＥⅠ式である。

13図－２。写真21と実測図中のｆに示す子ピット内に倒立して出土した土器。小型のキャリパー状深鉢。加曽利ＥⅠ式。口縁の半分ほどと底部の大部分を欠損している。それらの破片は出土しないから，始めから破損品を投棄したのである。焼成不良。胎土に粗砂を含みきわめてもろい。器面は焼けこげて黒褐色を呈し底部付近は赤褐色を呈する。この土器がもろくなり傷んでいるのは永い間の火熱の影響によるものである。口縁には対応する４つの把手があり，頸部に隆線を廻らせて口頸部文様帯を区画する。把手は三角錐状で三方から円孔が通じる。把手の右側に，口縁から懸華文が出て次の右隣りの把手の下に至る。この懸華文が４つつけられる。口縁に沿う隆線はその背を割って沈線を施し〝２本の隆線〟の効果を出す。「施文の省略」である。胴部は２本セットの沈線が垂下して器面を６つにタテ割りするが，その間隔は不均等である。この土器は施文の上からみても見かけよりはかなり粗製である。

13図－３。床面に散乱した礫の上面（ｅの土器）から出土。実測図中の無文の浅鉢形の土器である。出土状態からみて礫の間から出た13図－１の加曽利ＥⅠと確実に共存する。小型のツボ形。加曽利ＥⅠ式に併行。胎土に細砂を含み，焼成不良。火熱の影響がひどく器面は無数にヒビわれボロボロになっている。器質のもろさはそれが原因かも知れない。器面は赤褐色を呈する。無文。製作当初は器面は平滑に整形されていたことがわかる。

14図－５。床面に散在した礫の付近で出土。小型の深鉢形の底部破片。加曽利ＥⅠ式。焼成堅緻。火熱の作用はあるが器面の傷みはない。無文。

次に述べるのは開口部上面からの流れこみの土器で写真19や実測図に示したものから収録した。共存しないと考えられる土器だ。

13図－４。開口部上面で出土。実測図のａの土器口縁部が大きく外反するツボ形で口縁部を全部欠損している。加曽利ＥⅠ式併行。焼成良好，胎土に細砂を含む。火熱で器面はかなり焼焦げている。器面の上半部は黒褐色で多量の炭化物が付着し，下半部は赤褐色に焼けている。底部にも炭化物が付着。器面の全面に，くびれ部の

あたりから縄文をつけている。裏面には器面調整の整形痕がみられる。

14図－1。現開口面から37cmの深さで出土。中型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥＩ式。焼成堅緻。器面は焼焦げ甚しく多量の炭化物が付着している。地文の縄文を施文後に，頸部に隆線を廻らし口頸部文様帯を区画。口唇にも隆線を廻らせて〝二重口唇〟とし，さらに渦状文をモチーフとする小突起をつけている。この突起が4個対応していたものであろう。小突起のある口縁文様帯には渦状文をつけ，となりの小突起の渦状文とを2本セットの隆線で連結する。この間にも口唇に接した渦状文があり，渦状文は文様帯の中ではジグザグに配置される。隆線のつけ根に沈線を引く。全体的には施文は粗雑である。

14図－4。現開口部上面の流れこみの土器。キャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥＩ式。胎土に細砂を含む。口唇に沿って貼った隆線が剝落している。地文に痕跡的な縄文をつけている。口縁部に沈線で渦状文をモチーフとする文様帯を描いたものらしい。

以下はその他の位置から出土した土器。

14図－2。ピット北半部の充填土から出土。小型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥＩ式。焼成堅緻。器面に焼焦げがあり栗色を呈する。口縁部が内湾し，その部分が肥厚している。地文に縄文をつけているが，口縁部と胴部で施文方向が違う。口縁部の文様帯には隆線で曲線文をつけている。胴部の縄文は巾2～2.5cmでタテに指のすりけし痕が走る。

14図－3。ピットの上部から出土。小型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥＩＩ式らしい。焼成堅緻，器面は栗色，裏面に炭化物が付着。地文はなく，太い沈線で文様を描く。

14図－6。ピット内から出土。中型のキャリパー状深鉢の底部破片。加曽利ＥＩ式。焼成良好で，器面は赤褐色を呈す。地文に縄文。胴部に2本セットの綾絡文がやや斜めに垂下する。その巾は約3cmだ。この綾絡文セットは都合5組あり，器面を5つにタテ割りしていたものである。

Ｐ－10　（第14図～第15図，写真22～24）

現開口部直径約 130cm・深さ約 120cm・床面直径約 170cm。子ピット1個。廃絶の推定季節＝春以降

ローム面が西から北下りに屈曲する部位のピット。実測図に基いて述べる。

現開口部は約 130cm・深さ約 120cmで，壁面はややオーバーハングして「袋状」を呈するが，写真22のようにかなり崩落しており，殊に南側部分が甚しい。開口部北側の上縁に七本桜層の自然推積が若干見え，開口部上面にもその塊土が崩れこんでいるので，このピットの埋没は最終末の段階では崩落がピットの上半部に及んだことを推察できる。床面から約50cmウキで写真23の加曽利ＥＩの個体がほぼ水平な状態で出土。片側と底部を欠損しており，明らかに投棄である。この土器は今市軽石粒を混えた黒土の混土層中にあり，後述のピット下半部の充填土より上位の充填土に含まれウキである。これからこの土器は第3次埋没が進行中に投棄されたと考えられるのでピットの時期決定のキメ手とはならない。この充填土の中には炭化物の細片が若干あった。軟かで砕けてしまうので形状がわからないが，木質が何かを炭焼き・農業の二・三人の方に見せてきくと，クリとマツではないかとの返事。記憶のため書き留める。

ピットの壁は，現開口部から30cmほど今市層，その下は褐色ロームで，これがピット下半部と床面を形成する。後述の子ピットはその下のスコリア層を掘り抜いている。

床面は直径約 170cm。写真24のように，床面

からウキの状態で礫が南壁よりに散在している。床面中央部の充填土は黒土を若干混えた今市層で厚さは数cm。礫が乗っているのもこの充填土で，その中に土器片の細片があった。床面はほぼ平担。

床面の南西壁ぎわに子ピット（口径50×60cm）がある。子ピットは「袋状」で底面は平担。深さは約60cmで，外側へ張り気味に掘りこんでいる。下位の充填土中に礫があった。位置から見て，床面に散在した礫が投棄された時点で転りこんだのであろう。

床面の壁ぎわには黒土を混えた今市層が環状に推積している。ピット西側よりの部分では巾40cm・厚さ15～20cm。この壁ぎわの充填土と床面被覆の充填土の区別はつきにくいが，前述の礫がほぼ平担に散在していることから，連続的に崩落して堆積したにせよ若干の時間差があったが想定できる。この充填土は子ピットを充填している。また，土中に若干の木炭片が混在していたことを附記する。

以上を総合して，このピットの埋没は次の順序で進行したと考える。

1．空洞状態で親・子ピットが廃絶される。ピットは「袋状」の〝原形〟だった。

2．原開口部が若干崩落して床面を数cmほど被覆。この充填土中の土器片が第1次埋没の時期決定のキメ手になる。子ピットは親ピット床面中部側から斜に流れこんだ土で充填される。

3．礫が投棄され，床面にウキの状態で散乱する。子ピットの下面外壁よりに礫が入っているのは，斜に流れこんだ充填土の斜面を投棄された礫が転り落ちたことを示している。これらの礫は開口部の崩落に伴って「落下」したか，第1次埋没の直後（つまり開口部崩落の直後に）「投棄」されたか疑念の残るところであるが，出土状態から後者をとる。

4．ピットの上半部の壁面が崩落する。床面の周壁に沿って環状に推積する今市層の充填土で，これが第2次埋没である。第1次埋没と若干の時間差はあったにせよ，この埋没は殆んど連続的に起ったことは，充填土に質的な差違がないことから察せられる。この結果，ピットは大略〝砲弾状〟のくぼみになる。

5．開口部と上部壁面の崩壊が漸進的に進行し，現開口部の形態へ近づく。現開口部真下の部位に，前述の加曽利ＥＩの個体が〝水平状態〟で出土したことは，この埋没の進行中の投棄であることを示している。これが第3次埋没である。この埋没は第1・2次埋没にかなりの時間差があり，しかも漸進的であった筈である。土器個体が〝水平〟を保ったのは，くぼみの埋没がゆるやかであったために〝なべ底〟状を呈し，その底面において土器個体が安定を保ったと見るのが自然だから。

（遺物）

時期＝加曽利ＥＩ。第1次埋没に伴う遺物……土器＝15図－5。

床面ウキの資料がほとんどで僅かに子ピットからの出土の土器片を以って時期判定の資料とした。

15図－5。子ピット内から出土。深鉢の胴部破片。加曽利ＥＩ式。焼成堅緻，胎土に砂粒を含む。器面は焼焦げており炭化物がしみこんでいる。割れ目や縄文部分に充填土の褐色ロームがはりついている。子ピットの充填土堆積中からその内部に存在していたためであろうか。3本セットの沈線を垂下させる。

以下の土器はこのピットから出土はしたが，共存しないと考えられる土器である。

14図－1。実測図と写真23に示したように，床面から50cmウキで出土。大型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥＩ式。焼成良好，

胎土に粗砂と微量の雲母を含む。上半部の半分ほどしかない。実測図に示した以外に個体はなく，この大破片だけを投棄したものらしい。器面は栗色で焼焦げがあり，口縁部は黒色や赤褐色に変色している。口縁に把手がある。把手は中央に円孔のある山状の小突起で，背に橋状の隆帯をつけ点列を加えている。この把手は4つ対応していたと考える。図の口縁左端にも把手があったのだが欠損している。把手の間は約42cmある。把手のある部位はやや外側に張り出しているので，口縁を上から見ると隅丸方形状を呈するらしい。口縁部の文様帯は渦状文をモチーフとする隆線を施し空白部はタテの刻線で充填している。把手の真下から3本セットの沈線を垂下させて胴部を4つにタテわりしている。胴部の地文とした縄文は施文方向が一定していない。

15図－1。ピットの上面から出土。キャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥⅠ式。焼成良好，胎土に細砂を含む。器面は焼焦げ裏面も焼けて黒く変色している。割れ目は継ぎ目が剥離したもの。地文に縄文をつけた後に施文。口唇に隆線を廻らし〝二重口唇〟をつくり出す。文様帯に波状の隆線を貼り，つけ根に沈線を引く。

15図－2。ピット内の出土。大型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。典型的な加曽利ＥⅠ式。焼成良好，器面は赤褐色を呈する。〝二重口唇〟。文様帯は渦状文をモチーフとし空白部をタテの刻線で充填している。

15図－3。ピットの北半分の充填土から出土。キャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥⅠ式。焼成堅緻，胎土は精良。器面は栗色，焼焦げがある。小波状口縁で波頂部に橋状の把手をつける。その背に釣針状の刻目がある。無文で裏面は平滑だが表面は凸凹がある。

15図－4。ピットの下半部から出土。深鉢形の胴部破片。加曽利ＥⅠ式？。焼成良好，地文に櫛引文を施し，巾広の浅い沈線で曲線文を描く。

15図－6。ピットの下半部から出土。キャリパー状深鉢の胴部破片。焼成良好，胎土に粗砂。器面に縄文を施文後，3本セットの沈線を垂下させている。しかし等間隔ではなく，磨消縄文的な技法を伴い，沈線によって縄文部分を区画したようにも見える。加曽利ＥⅡ式かもっと新しいかであろう。

14図－2。ピット内の出土。中型の浅鉢の口縁部破片。加曽利ＥⅠ式。焼成良好，胎土精良。無文。口唇部か肥厚。器面は黒色や褐色のまだらに焼けこげ，かなり傷んでいる。口縁や器面，裏面の一部に朱が残っている。焼けこげの以前に全面に塗布されていたものと見られる。

Ｐ－11　（第15図～第16図，写真25～27）

現開口部長径約 175cm・深さ50cm・床面直径130cm。子ピット1個。廃絶の推定季節－春以降。

今市層面が北下りにかなり屈曲する部位に輪郭を視認。耕作で黒土が「寄せ土」させているため表土は50cmほどあり，現開口部の北側がより低い。

実測図に基いて述べる。

ピットの現開口部は南北に長い楕円形で，約175×80cm，深さは北側で約50cm・南側で約25cm，壁面は西側がオーバーハングして「袋状」の名残りを止めるが，他はほぼ垂直か胴張りにふくらむ程度で，見かけ上は〝皿状〟を呈する浅いピットである。現開口部上面にキャリパー状深鉢形・浅鉢など（後述）が写真25のように出土する。写真の手前が北で，壁面に接しているのは礫。向う側は南で，器形のわかる土器個体や礫などがほぼ同じ平面に散乱している。写真26はその土器ブロッの様子を示したもので，実測図中のａ，ｃは浅鉢の同じ個体の破片である。こうして同じ個体がとび離れて出土するこ

とは，すでに破損してしまった個体を投棄したことを示している。現開口面という部位から考えると，後時の攪乱による移動もあり得るが，横転しているキャリパー状の土器が傷んでいないことを考え合せて，投棄後の攪乱はまずないと見る。土器ブロックを含んでいたのは今市軽石粒を含む黒土の混土層である。その下の床面までの充填土は今市層土と褐色ロームとの混土層。現壁面の下半から床面は褐色ローム中にある。これは上部壁面の今市層と下部壁面の褐色ロームが混ったと見る。床面南側では褐色ロームに黒土が混っている。この今市層に褐色ロームを含んだ混土層が第1次埋没の充填土で後述する子ピットも同じ土が入っている。この充填土は中央部が薄く周辺部が厚い。この上に土器ブロックを含む充填土が凸レンズ状にのっている。

床面の周縁部にウキの状態で礫が散在している。写真27のように，礫は特にピットの北側（子ピットのある側）と南側とに偏しており，床面中央部にはない。大部分の礫は床面からウキだが，中には殆んど床面に接している礫もある。子ピットの手前側に寄り集っている5個ほどの礫は，子ピット肩口の充填土にのっている。子ピットの左側にとび離れているのは石皿の破片である。礫には磨石も含まれている。

床面北側壁面に接して子ピットがある。子ピットは口径約35cm・深さ約60cmで，壁面・底面とも凸凹なく削り，床面中央部よりにやや傾いた「袋状」を呈する。内部に遺物はない。

以上を総合して，このピットの埋没は次の順序で進行したと考える。

1．空洞状態で親・子ピットが廃絶される。ピットは「袋状」の原形だった。

2．原開口部（黒土中にある）が崩落して床面を被覆する。第1次埋没である。

床面南側には黒土がのっていた。この埋没土は床面の中央部で薄く周辺部で厚い。それは原開口部がズリ落ちたことを示唆する。壁ぎわにある子ピットも同じ充填土で埋っている。その肩口に礫がのっている。親ピット床面の中央部から外側へ向って崩落した充填土が子ピットの空間を斜交いに埋没した時点で礫が入りこんだためだ。

これらの状況から，原開口部は床面中央部の上部にあり，現開口部よりかなり小さいことが予想される。つまりピットの原形は「袋状」であったと考える。

3．第1次埋没に連続して礫が投棄される。この中には石皿の破片や磨石も含まれている。不用物の投棄である。礫はピットの北側と南側に偏している。大部分は床面からウキだが，ほとんど床面に接しているものもある。従って礫の投棄は第1次埋没と併行し，埋没後に連続したと考えたい。

礫の位置は壁よりに片寄っている。第1次埋没土は床面中央部で薄い。投棄された場合は開口部直下の床面中央部にかたまっている方が自然だ。それが逆に壁ぎわに寄っている。それをこう解釈できないか。

礫は開口部の崩落と共に真下に落下した。つまり投棄ではなく〝混入〟である。礫の用途は，例えば蓋の押えに使っていた（ピット廃絶後も開口部に放置されていた？），原開口部の土止め用の配石としてたなどが想像できる。ともあれ，廃絶の時点でピットは原形を保っていたことは推断できる。散在した礫の意味を「投棄」より「混入」と解釈した方が無理がなさそうなので空想も追記した。

礫を含んでいる充填土は第1次埋没と第2次埋没とに明瞭に区分できなかった。第2次埋没が第1次埋没に連続して大量の崩落をくりかえしていったからだろう。

4．現開口部を凸レンズ状に覆った今市軽石粒を含む黒土の混土層は漸進的に埋没した充填土

である。第3次埋没である。その進行中にも〝廃物〟の土器は投棄され，写真26 の土器ブロックとなった。ピット内の空間的位置と充填土の様子とから見て，この土器ブロックは明らかに後時の投棄であり，ピットの時間的位置を決するキメ手にならない。この充填進行の過程で，すでに壊れている開口部と壁面の剝落がさらに続く。

5．このピットが，現状で〝皿状〟の形状になったのは，崩落のせいばかりでなく上半部を後時に削り取られた疑いがある。ピットの存在した位置は北下りの地形面上にあり，現在の耕作で〝土寄せ〟されて地表面が平担化される以前では攪乱され易かったらしく，このピット周辺の今市層上面にかなり〝人為的〟と見える凸凹があるからである。現開口面に土器ブロックが残っていたのはむしろ奇蹟的でさえあったといえるのである。

（遺物）

時期－加曽利ＥⅠ？。第1次埋没に伴う遺物……石器－16図－11（石皿破片）。土器なし。

現開口部上面に出土した土器は一括投棄と考えられるが共存するという確証は得られなかった。床面ウキで出土した礫と共に出土した石皿破片だけが第1次埋没に伴う遺物だった。従ってこのピットの時期を明示する資料はないが，開口面の土器から考えると加曽利ＥⅠに比定できる可能性もある。

16図－11。石皿の破片。ピットの北側壁ぎわに床面ウキで第1次埋没に伴う出土。既述のように礫が床面に投棄されていたが，その中に石皿の破片が混っていた。すでに割れて不要品となっていたのを礫と共に2次使用したものらしい。ザラザラした火山岩の河原石を利用。皿のへりにくぼみが10数個ある。裏面は平担で，図のように刻線状の抉りがある。この裏面にも20個以上のくぼみがある。割れ目にもくぼみの断面が見えるから，この石皿が破片になる前に〝蜂の巣石〟的な使用があったのだろう。

以下に現開口部上面の土器ブロックの遺物を掲げる。中でも15図－1・2と16図－1の3個体の土器は一括投棄と考えられるから，これら自体で共存する可能性もあり得る。

15図－1。この個体は数ヶ所の欠損部分があり，投棄の時点ではすでに破損していたことがわかる。実測図中のｄの土器。中型のキャリパー状深鉢。加曽利ＥⅠ式。焼成良好，胎土に細砂を含む。火熱でかなり焼け，上半部は黒褐色，下半部は赤褐色で部分的に炭化物が付着している。地文に縄文をつけた後に隆線を貼付して文様帯を区画する。縄文原体を上から回転して施文する際に指先を口縁部へ向けているので，その擦痕が巾約 1.5cmほどの間隔で器面を縦走している。文様は口頸部に廻した隆線で区切られ，口頸部と胴部の文様帯に分れる。口頸部は，口唇と口頸部に廻らした隆線で区画された文様帯があり，沈線を伴う波状の隆線を貼付している。沈線は途中で切れたり消えたりでかなり雑である。胴部は区画境の隆線に沿って波状の沈線を引いているが，このサインカーブが不規則でかなり雑な沈線である。区画境の隆線を起点として器面に蛇行する5本の沈線を垂下させ器面をタテわりしている。

15図－2。実測図のａとｃを接合して得た個体。浅鉢の個体。加曽利ＥⅠ式。口縁部を全部欠損している。割れ目はほぼ平担で輪積みの継ぎ目が剝離したもの。胎土に粗砂と少量の雲母を含む。無文。火熱の影響で器面はかなり傷んでいる。器面は底部が黒色，器壁は淡褐色。現形で個体の3分の1ほどを欠損しており，始めから割れた破片を投棄したものだ。

16図－1。実測図のｂと土器ブロック中の断片を接合して得た浅鉢の個体。加曽利ＥⅠ式。口縁部を欠損しており，この個体自体も各所に欠落部分があるから始めから割れた個体を投棄

したものだ。無文。焼成良好，胎土に細砂を含む。器面は平滑に整形している。焼焦げがひどく部分的に黒色に変色している。

16図－4。実測図の北側子ピットの上位，床面から約55cmウキで出土。投げこみの土器片。中型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥＩ式。焼成良好，胎土に細砂と若干の雲母を含む。器面は栗色を呈する。器面の全面に火熱の跡が見られ各所に炭化物が付着している。口唇部がやや外反し無文帯が廻る。口縁部は「く」の字に屈曲する。この口縁部分に整然と縄文をつけ，以下の器面にも同じ原体で施文はするが施文は雑で方向が一定しない。

16図－8。土器ブロック中の土器。キャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥＩ式。器面は焼焦げて茶褐色を呈し，口唇部は白く焼けただれて変質しもろい。小波状口縁の波頂部。口唇肥厚し，渦状文をモチーフとする沈線文をつけている。

16図－6。土器ブロック中の土器。中型の深鉢の口縁部破片。加曽利ＥＩ式。胎土に細砂。火熱で器面は黒色，炭化物が付着。器面に粗雑な縄文がみられる。口縁に一本の隆線を廻らす。

以下の土器片はピット内の各所から出土したものである。

16図－2。ピット内の出土。浅鉢の口縁部破片。加曽利ＥＩ式。焼成堅緻，器面は焼焦げて黒褐色を呈し炭化物が付着。地文の縄文を施文後に浅い2本セットの沈線文を引く。沈線間に点列を施す。割れ目は輪積みの継ぎ目が剝落。

16図－3。ピット内の出土。口縁部破片。加曽利ＥＩ式？　火熱で器面の傷みがひどい。横位の縄文をつけている。

16図－5。ピット内の北側部位で出土。大型の浅鉢。口縁部破片。加曽利ＥＩ式。焼成良好。胎土に粗砂と微量の雲母を含む。器面は赤褐色。無文。器面を平滑に調整し内壁はとくに平滑に仕上げている。口唇に抉りこんで彫刻的な施文がみられる。

16図－7。ピット内から出土。大型のキャリパー状深鉢の底部破片。加曽利ＥＩ式。器面は火熱で赤褐色を呈しもろい。破れ目や裏面に炭化物が付着。地文の縄文に約2cmの間隔で指のすりけし痕が縦走している。底部には竹の敷きものらしい圧痕がみられる。

16図－6。ピットの北側上位で出土。図の左側は裏で右側は表。中型の口頸部が外反する深鉢の口縁部破片。加曽利ＥＩ式。割れ目は輪ずみの継ぎ目が剝離したもの。胎土に細砂を含み焼成堅緻。無文。赤褐色に焼けている。裏面に沈線で渦状文をつけ，波頂部左側の口唇に沈線を引く。波頂部を欠損しているが，裏面の渦状文と口唇の沈線が連絡していたものと考える。

Ｐ－12　（第17図，写真29）

現開口部直径約 100cm・深さ90cm・床面直径150cm。子ピット数1。廃絶の推定季節－春以降。

今市層上面に不整円形の輪郭を視認，まず東半分を掘り下げる。この部分には遺物は殆んどなく，底面近くに数個の礫がウキで点在していた他に磨製石斧の破片が1個だけ出土した。ピットの床面は褐色ローム中にある。

ピットを南北に切る断面図に基いて充填土の状態を述べる。

③　床面を20～35cmほどの厚さで被覆する充填土で厚さは一様でないが，概してピット中央部あたりが薄い。かなり多量の今市軽石粒と七本桜層土を含む黒土の混土層で第1次埋没によるもの。ピット上部の壁面崩落で埋没したのであろう。床面直上では褐色ロームが混じる。

②　ピットの東側から「舌状」に流れこんだと考えられる充填土。今市層・七本桜層土を含む黒土の混土層だが，含む量が少ない。第2次埋没である。ピットの壁面は床面近くまで剝落

しているらしく，屈曲の仕方が不規則である。第1次・第2次埋没は連続的であったと考えるが，ピット下位壁面の傷み方と充填土の混合の度合いとから推しはかると，埋没は「漸進的」であったかも知れない。この層までに殆んど遺物を含まないのも，ピットの自然的な埋没を示唆している感がある。

① 暗褐色の混土層で，前二者の充填土と組成は同様だが，今市層，七本桜層土が微量である。表土と区別しにくい部分もある。ピット空間の最終末の充填土で第3次埋没である。

西半分を完掘して，北側壁ぎわに子ピット1つと床面から30cmほどウキの状態で③の充填土に含まれる土器片が出土した。

実測図に見る通りピットの壁は「袋状」を呈さない。床面は20cmほど褐色ローム中に掘りこんでいる。床面壁ぎわにほぼ接着した状態で礫がある。ピットの北側の壁面はほぼ垂直だが，部分では外側へふくらんだ〝胴張り〟状だ。ピットの現開口部東側は肩から内壁にかけて大きく崩れている。床面はほぼ平担に削っているが水平ではない。

子ピットは口径約30cm・深さ60cmで壁面・底面ともきれいに削り「袋状」を呈している。子ピットは親ピットの中央部に傾斜している。底面に挙大の礫が3個入っていた。親ピット底面西壁に寄りついていた礫と同時の投棄であろう。親ピットと子ピットの礫はそれぞれ殆んどウキでないことを注意したい。つまり礫が投棄された時点では親・子ピットは完全に空洞状態であったということである。子ピット内底面の3個の礫のうち1個は親ピット床面の中央部よりにある。子ピットが殆んど埋没していなかったのでこの位置に存在し得たと考える。礫は「投棄」と述べてきたが，投棄ではなくて自然的な「混入」である疑いもある。前述のようにピットは空洞状態で放置されたままの時間的な推移が，充填土や壁面の観察によって感じられるし，わざと投棄したにしては礫が小さく数も少なすぎる上に他に土器や有機物の痕跡も存在がない。ピットの原形が「袋状」であったと推断するが，その「袋状」が空洞状態から「漸進的」に崩落しピット空間の埋没が進行したときに，実測図に示したように甚しい壁面崩壊が起るのかどうか。この見方で行くと，床面から30cmウキの土器片は礫よりは時間的に遅れた投棄と考えざるを得ず，厳密にはピットの時間的なモノサシにはなり得ないであろう。

時期＝加曽利ＥⅠ。第1次埋没に伴う遺物……土器＝17図－4・5・6・8

床面を20～35cmほどの厚さで被覆する充填土を第1次埋没として既述したが，その層中から出土した土器片を時期判定の目やすとした。

17図－4。ピット東側の③層から出土。中型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥⅠ式。焼成良好，胎土に粗砂を雲母を含み器面は赤褐色を呈する。阿玉台式とよく似た器色である。器面に炭化物が付着している。2本セットの隆線で懸華文による文様帯を構成している。

17図－5。ピット東側の③層から出土。中型のキャリパー状深鉢。口縁部破片。加曽利ＥⅠ式。波状口縁の波頂部。焼成堅緻，器面は赤褐色を呈する。口唇部に粘土を貼って肥厚させ，断面は丸みをもつ。これに沿って半截竹管文をひく。器面に縄文。

17図－6。子ピット内から出土。深鉢の口縁部破片。加曽利ＥⅠ式。焼成よく胎土に粗砂を含む。器面は褐色。器面に縄文をつけている。施文方向は一定しない。下辺の割れ目は沈線文から割れたようだ。口縁内壁には粘土帯を貼付して肥厚させている。

17図－8。ピット東側の③層から出土。深鉢の胴部破片。加曽利ＥⅠ式。輪積みの継ぎ目か

ら割れている。器面は赤褐色に焼け，裏面や割れ目には炭化物がこびりついてピカピカ光っている。

以下の遺物は共存しないと考えられる遺物である。

17図－1。ピットの上面から出土。深鉢の胴部破片。阿玉台の古式。器面は褐色。胎土に粗砂と雲母を含む。器面にY字状の隆線，刺突文や刻目文がみえる。

17図－2。ピットの上面から出土，深鉢の口縁部破片。加曽利EⅢ式？，焼成堅緻，器面は赤褐色で裏面にはヒビ割れがある。割れ目にも炭化物が付着。口唇内傾し口縁部に無文帯を廻らす。胴部は無文の縄文だけ。

17図－3。ピットの上面から出土。キャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利EⅠ式。口唇に沿って隆線を貼付し〝段差〟のある〝二重口唇〟をつくり出す。地文に縄文をつけ，器面に粘土紐を貼っている。

17図－7。ピットの上面から出土。中型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利EⅠ式。器面は灰褐色。裏面は黒色。器面に渦状文をモチーフとする刻線文を施す。

17図－9。ピットの上面から出土。胴部破片。加曽利EⅠ式。裏面に炭化物が付着。器面に斜行する撚糸文を施文している。

P－13　（第18図，写真28）

現開口部直径約 115cm・深さ65cm・床面直径140cm。子ピット1。廃絶の推定季節－春以降

今市層上面に不明瞭な開口部輪郭を視認，まずピットの西半分を掘る。ピットの壁面は若干オーバーハングして従前の「袋状」の名残りを止めるが，壁面崩落は甚しく，床面を除いて現開口部と壁面とはおよそ原形には遠いものと考える。床面は今市層と褐色ロームの境目にあり，床面の一部には褐色ローム面が見える。床面はほぼ水平である。

ピットを南北に切る断面図に基いて充填土の状態を述べる。充填土の質に大差はない。

③　床面を部分的に被覆する黒色土。部分的には塊土もあり，ピット原開口部の崩落に伴って空洞状態の床面を覆った第1次埋没土である。

②　多量の今市軽石粒・七本桜層土を含む黒土層。ピット空間中央部あたりで〝スリバチ〟状にくぼんでいる。ピット上半部の壁面崩落で空間を充填した第2次埋没土である。断面図のピットの現開口部北側部分は段差のテラスになっている。これは第2次埋没が相当激しく進行した（開口部をわざとこわした？）ことを示唆する。壁面崩落がかなり〝人為的〟な起因をもつ感じがする。この第2次埋没は第1次埋没に連続して起り，あまり時間差はないと考える。この充填土の上位部分から写真28の石皿が出土した。石皿は西側壁面よりに床から36cmウキで，斜めの状態である。半欠で，その片われはピット内にはなかったから破損品を投棄したものであろう。斜めの状態はピット埋没進行中に，ピット空間が〝スリバチ〟状に充填されたその傾斜面にはりついた状態を示すものであろう。

①　若干の今市軽石粒・七本桜層土を含む黒土の混土層。漸進的な第3次埋没の充填土である。ピットの現開口部は断面図のように北側が30cmほど高い。原開口部はこれよりは上にあった筈であるから，前述の〝段差テラス〟以下が原形に近いと推察すると，このピットは原形の上部3分の2は壊滅していると考えられる。この充填土中に凹石が入っていたが，ピットには関係ない後時のまぎれこみと解する。

ピットの東半分を掘って，実測図のように全掘した。この部位では，床面中央部から周壁へかけて七本桜層塊土が部分的にあり，その上に今市層土がのっている。その上部は前述の混土層（③）だが黒土の割合いが多い。現開口部あ

たりでは攪乱されて全然ない七本桜層が床面部位に落ちこんでいるのは，このピットの原開口部はいまより上にあり，床面中央部あたりに見られたのは原開口部がピットの中央部よりにあったことを示している。多言を要しない。ピットは「袋状」だった。第2次の崩壊で原形を失った上，第3次の崩壊で現形になった〝なれの果て〟だったのである。このピットからは前記の破損石皿の他に遺物はなかった。

床面の南東壁に接して子ピットが1つあった。直径40cm・深さ40cmで，壁・底面ともきれいに削り形状は円筒形。充填土は前述の親ピットの床面を覆う混土層と同じで，親・子ピットの同時埋没を示している。

なお実測図の断面図中，ピットの現開口部の北西部位肩口にある礫はピットと何のかかわりも持たないが，開口部崩壊に伴う水平攪乱により現位置に寄りついたのであろう。

（遺物）

時期ー不明。第1次埋没に伴う遺物ーなし

遺物は床面ウキで出土した石皿だけが唯一の目ぼしいもの。

18図－1。原体が斜めに割れた半欠。この部位は流れ口の側だ。多孔質の火山岩の扁平な河原石でつくったもの。抑打で破損したらしい。2次的な利用をした様子はない。

P－14　（第18図～19図，写真30～34）

現開口部直径 105cm・深さ80cm・床面直径約195cm。子ピット2個。廃絶の推定季節ー冬。

この部位の地層はほぼ水平だ。今市層上面に不整円形のピットの輪郭を視認。ピットの現開口部肩口に近接して，写真32のように加曽利E Iの個体が出土する。土器は破損品で礫の上にのっている。このピットとは無関係であるが，原開口部の崩壊の最終末における投棄の在り方を示すものと見る。現開口部の破傷が甚しいので，ピットの形状を正確につかむためピットの東半分をタテにぶち切って掘ることにした。

実測図とその断面図に基いて述べる。

断面図に見る通り，ピットは床面が広がった「袋状」を呈する。ピットの下部壁面と床面は褐色ローム中にある。ピットの北側の壁はきれいにオーバーハングして〝原形〟に近いが，現開口部は外側へ斜傾し，見る影もなく崩落した形跡が顕著である。

南側の壁面は凸凹しかなり崩落している。現開口部は段差のあるテラスのような形状だが，原開口部崩壊後の後時の攪乱によるものであろう。

ピットの充填土は原開口部から床面へかけて，断面図の5層に区分できる。

① 黒色土で微量の七本桜層土・今市軽石粒が混っている。

② 少量の今市軽石粒と七本桜層土を含む黒土の混土層で堅い。

③ かなりの今市軽石粒と七本桜層土を含む黒土の混土層で軟い。この層はピットの南側肩口から斜めに流れこみピット空間の大半を充填している。土器破片が多量に入っている。

④ 黒土中に多量の今市層を含む塊土である。

⑤ 床面を10～20cm被覆する。褐色ロームに今市軽石粒・七本桜層土が少量混入している。ローム土はやや暗褐色を呈する。遺物はない。

ピットの南側に写真33のように土器口縁部の破片のブロックが出土した。床面から40cmほどウキで③層中に存在する。この土器片は同個体で上・下に重っている。写真33の下側に3片が見える。この3片はいずれもウラ返しだ。左側の1片は上面の左・中の破片に接合できる胴体部分，中央部の1片は上面の右の破片に接合できる口縁部の破片，右側は同じ個体の底部である。これから次のことがいえる。下面土器片の

うち，左と右の破片はすでに割れていた。上面の3片と下面中部の破片は一体であった。これらを重ねてピット内に投棄した。その後，埋没が進行して湿り，土圧で割れて写真33の状態になった。この個体の破片は他の部位からも出土し復元できたところを見ると，当初から破損品を投棄したものである。

また，写真31・34のようにピット底面の壁ぎわにもウキの状態で土器個体が出土した。この土器は〝円筒状〟の原形に近かったがお盆休み中に一部を盗まれた。この土器は⑤の層にのり③の層に含まれていた。この出土状態から，③の充填土がピットの南側肩口から北側床面にかけて斜めにくずれこみ埋没の進行中にすでに破損した上器個体を他の土器片と共に投棄したことがわかる。

写真31はピットの東半分の床面を示した。東側壁寄りに，子ピットがある。子ピットは口径約45cm・深さ約25cmでやや内傾し，壁・底面ともきれいに削っている。遺物はない。

西半分を完掘した結果，ピットの下半部に今市層の塊土はなく，ひどい壁面崩落はないことがわかった。写真30が全掘図。

南側壁面寄りにもう1つ子ピットが出た。直径約40cm・深さ10cmほどできわめて浅い。

以上を総合して，このピットの埋没は次の順序で進行したと考える。

1．空洞状態で親・子ピットが廃絶される。ピットは「袋状」の原形だった。

2．空洞状態のまま漸時放置され，現開口部附近の壁面が少しずつ崩落し床面や周壁を形成する褐色ロームと混り合う。これが第1次埋没である。凸凹はあるが，この充填土は10～20cmほど床面を被覆している。量的に少ないが，床面をほぼ平担に黒みがかった褐色ロームが被覆した状態から，例えば霜などによる緩慢なしかし短時間の攪乱があったことを想像させる。ともあれ，この第1次埋没はピットが空洞状態で廃絶され，床面が空間に露出された結果の自然的な現象だと考える。

3．再三述べたピット南側肩口から北側床面に斜めに流れこんだ③の層が第2次埋没である。ピットの南側上部壁面の崩落が著しい。埋没の進行は漸進的であったらしい。出土したのは土器片だけだが，これは一時にではなく何度かくり返えされた投棄である可能性もある。従って，第2次埋没はピットの廃絶から若干の時間差があり，この充填土中の土器片は，「即，ピットの時間的位置」を示すキメ手にはならない。

4．八分通り埋没の進んだピット空間に，開口部の終末的な剝落が起る。④の今市層を多量に含んだ塊土がそれである。第2次埋没の最末期である。

5．漸進的にピットの開口部が充填され平担化する。①，②の充填土で，第3次埋没である。この充填土に含まれる遺物は，部位から見ても後時の攪乱によって混入する可能性が強く，これ以下の充填土中の遺物と区別してとり扱わないとピットの時間的位置を狂わす元凶になる。

（遺物）

時期＝加曽利ＥⅠ。第1次埋没に伴う遺物……土器＝19図－3，19図－6。

床面を被覆する混土層の上面にのっていた土器で，第1次埋没に伴うと見てよいと思れるものを記述する。

19図－3。実測図にある土器で，床面の北側壁ぎわからウキで出土。ほぼ第1次埋没に伴う遺物である。このピットの時期のキメ手になる土器。小型の深鉢形。加曽利ＥⅠ式。器面の焼焦げひどく，口縁部は黒色に変色し，胴下半部は赤褐色を呈する。器面は傷み文様も磨滅している。盗難にあったこともあり，口縁の一部と底部の大部分を欠損している。器面に縄文を施文後，沈線で文様を描いているが，器面が傷ん

でいるため縄文は痕跡的だ。口縁に2本セットの沈線を廻らし，そこから胴部へ2本セットの沈線を垂下させて4つにタテ割りする。この4つの器面のうち，1面は欠損していてわからないが，他の3面は3つとも文様は違っている。文様が同じパターンのくり返えしでない点は興味ふかい。図の右側の器面は沈線で2重に囲んだ区画帯にジグザグ沈線を組み合せて菱形の連続文を描く。左側の器面は蛇行する沈線を2本垂下させるが，不揃いである。その左側の器面はU字状の沈線と〝菱形連続文〟を組み合せている。当地の加曽利ＥＩ式では珍しい土器。

19図－6。ピットの東側床面ウキで出土。キャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥＩ式。焼成堅緻，器面は赤褐色。焼焦げている。口唇に沿って2本セットの隆線を廻らし，その間に竹管による円管文をつける。以下の器面には沈線で曲線文を描いたらしい。

以下の土器は共存が立証できない土器で，第2次埋没以降に伴うと考えられる。

18図－1。現開口部から20cmほど下で重なりあって出土した個体や第③層の破片を接合して得た個体。写真33に〝重なり合い〟を示したが，実測図中の南側の土器がこれである。加曽利ＥＩ式。中形の深鉢形で，胎土に多量の雲母と細砂を含み，技術的に阿玉台式の伝統が強い。器面は焼焦げ，上半部は黒褐色，下半部は淡褐色。文様帯は口唇，口頸，胴部に区分できる。口唇に一本の隆線を廻らし左傾する縄文をつける。口頸部は少し肥厚させ〝段差〟をつけて胴部と区分する。地文の縄文は口唇のものと同じ原体だが，施文方向が異り右傾している。そのほぼ全面に綾絡文をつけているが，一部分だけ約6cmほどの巾で手ぬきした部分がある。胴部は2本セットの綾絡文が垂下して器面を4つにタテ割りするが，その間隔は不均等である。阿玉台式の器形と胎土を持ちながら〝縄文〟をモチーフとした施文に特徴をもつユニークな土器である。

19図－3。ピット北側の肩口に出土した土器片。キャリパー状深鉢の胴部破片。加曽利ＥＩ式。焼成良好，器面は上辺が黒褐色，下半部が赤褐色。上辺の一部に横の平行沈線がみえる。地文に縄文をつけた後，器面に2本セットの平行沈線を垂下させて器面をタテ割りし，その区画部分に蛇行沈線を引く。

19図－4。ピット上方の西側の崩れこみ部分の②層から出土。胴部破片の前期の繊維土器で関山式？　器面は赤褐色。羽状縄文地に刺突文がある。開口部位の黒土の壁中に含まれていた土器片が崩れこんだものである。

19図－5。ピット中央部分の充填土である第③層から出土。深鉢の口縁部破片。阿玉台の古式。焼成良好。器面は黒褐色，多量の雲母を含む。地文はなく器面を平滑に調整している。断面三角の隆線をつける。口唇に刻目，器面に結節沈線で施文。

19図－7。ピット内の出土。口縁部破片。加曽利ＥＩ式。器面は焼けて淡赤褐色を呈し，器質が変質し軽くなっている。口唇に平行沈線を引き，その間に薄いタテの刻目を施す。口縁に沿って隆線を廻らし指圧痕を施す。器面には半截竹管による施文をする。

19図－8。ピット上面の出土。口縁部破片。加曽利ＥＩ式。器面に炭化物が多量に付着。焼成堅緻。少量の雲母を含む。口唇の内と外に隆線を貼る。口縁部にも隆線を貼る。

19図－9。ピット肩部のくずれこみで，④層から出土。口縁部破片。加曽利ＥＩ式。器面は黒褐色。彫刻的に沈線文を組み合せて施文している。

19図－10。ピット西側の崩れこみ部の②層から出土。口縁部破片。加曽利ＥＩ？　焼成堅緻。器面は焼けて赤褐色を呈する。器面に櫛引文で地文を施す。

19図－11。ピット上部から出土。中型のキャ

リバー状深鉢の口頸部破片。加曽利ＥＩ式。地文に撚糸文をつけた後，隆線で文様帯を区画し，細い粘土紐を貼って渦状文をモチーフとする文様を施す。焼成堅緻，器面は焼焦げて褐色を呈し，文様帯の内部には炭化物が大量に付着している。

19図－12　ピット西側の最上部位の②層から出土。胴部破片。加曽利ＥＩ式。焼成堅緻，胎土に粗砂を含む。地文に縄文をつけた後，器面に沈線を引く。

19－13。床面から33cmウキで出土。大型の深鉢形の底部。加曽利ＥＩ式。胎土に細砂を含み，焼成良好。器面は淡黄褐色。裏面は黒色に焼けている。地文に櫛引文を施す。図の下辺は底部との接着部が剝離したもの。

Ｐ－15

現開口部直径約？cm・深さ35cm・床面直径約？cm。

開口部や壁面崩落が甚しく，形状が剝然としないピットである。深さ35cmほどで床面は今市層中にある。内部からの遺物も検出も殆んどなく，所産の時期不明である。

特記する遺物ーなし。

Ｐ－16　（第20図～第21図，写真37～39）

現開口部直径不詳・深さ90cm以上・床面直径約 180cm。廃絶の推定季節ー春以降

前述のＰ－17の北側壁面と切り合いで発見したピットである。ピットのあった位置はＡ－１区の南辺で西端部である。Ａ－１区の耕作土を剝いで今市層上面を洗い出した際に，この部位に不鮮明な落ちこみがあったのだが形状から見てピットとは思えなかったのでそのまま放置したのがこれであった。このピットはＰ－17の壁面に突き出した阿玉台式の破片により視認した。写真39はその様子を示したもの（日程がつまり完掘を急ぐため，天気まちしていられず以下の写真は影が入って恐縮）。この土器片はＰ－17の床面からは37cm，このピットの床面からは12cmほどウキの状態にあるが，部位から考えて明らかにこのピットに属する。開口部の輪郭もＰ-17の北壁での断面も不鮮明なので，このピットは横から崩して掘った。ぶち切られたが３分の２ほどは残った褐色ローム内に掘りこまれている床面だけが原形を留めていた。このピットを被覆していたのはＰ－17のＢ層と同じ黒土の充填土であったが，部分的に確認した床面を直接に被覆していた充填土は今市層でその上に黒土層があった。ピットの壁面と現開口部は崩れこんだ今市層土と自然推積の恐らく壁面を形成していた筈の今市層土との区別が全くわからず，辛じて床面と北側壁面の一部だけを捕えることができた。実測図の現開口部を示す実線は何とか区別をつけた現開口部の縁辺を推定も加えて描いたものである。

写真38は完掘したピットの床面である。床面には17cmウキで阿玉台式の破片がウラを見せてのっていた。その他に３片ほど小破片が黒土の充填土から出土しているがすべて阿玉台式であった。

このピットの下部北側壁面は，実測図の断面のようにきれいにオーバーハングしており，「袋状」の原形に近いと見る。「切り合い」部分で見ると，このピットは西端が15cm・東端は５cm以下の段差になっている。Ｐ－17の床面はほぼ水平なので，このピットの床面は総じて南西部が高く北東部が低い。下部壁面の傾斜度は強く，他の加曽利ＥＩのピットと較べるとそれらが壁面崩落している実態を考慮に入れても，この阿玉台ピットは〝より押しつぶれた〟形の「袋状」のように感じられる。

（遺物）

時期ー阿玉台の新式。第1次埋没に伴う遺物……土器ー20図－1。21図－1・2・3。

切り合いのピットであるだけに遺物の混同を避けるため，床面被覆の第1次埋没土に伴うものだけを抽出した。

20図－1。実測図の床面ウキで出土したのがこの土器の把手の部分。床面部位の第1次埋没土中からも2片出土。このピットの時期判定のキメ手の土器。大型のキャリパー状深鉢形の口縁部破片。阿玉台式の新式。大きな把手が4個対応していた土器とみられる。口縁内側に〝段差〟をつけて，上部の文様帯と以下の器面とを区別しているが，その〝段差〟を計って試算すると直径約40cmほどの大型土器である。焼成良好，器面を平滑に磨き，多量の雲母を含む。器面は暗い褐色で阿玉台式の典型的な色調である。口縁部に隆線による区画帯をつくり，その部位に刻目文・キャタピラ文を施す。「扇」状の把手は頂部は円形を呈し，中央部に円孔を通じる。隆線文の背に刻目文をつけている。器面の一部に焼けこげがあり煮沸用に用いた土器であることがわかる。

21図－1。床面の黒土層から出土。胴部破片。阿玉台式の新式？　器面は黒褐色。胎土に雲母を含む。背が尖った隆線をつける。結節沈線はない。

21図－2。床面の黒土層から出土。浅鉢の口縁部破片。阿玉台式の新式。焼成良好，胎土に粗砂を含む。器面は暗赤褐色を呈し，裏面は黒色。口唇部が肥厚し小波状口縁を呈する。

21図－3。床面の黒土層から出土。胴部破片。形式不明。阿玉台式に伴うのかも知れない。焼成良好，胎土に細砂と雲母を含む。器面は褐色。縄文をつけ，一部に綾絡文が見える。

P－17　（第21図～第22図，写真35～37）

現開口部直径約 110cm・深さ 110cm・床面直径 210cm。

今市層上面にピットの輪郭を視認，南半分を掘り下げる。現開口部から深さ20cmの部位では阿玉台（新）・加曽利ＥＩの破片が共出する。充填土は今市軽石粒を含む黒土の混土層で，部分的に黒土のブロックがある。開口部から深さ50cmほどの部分までには砂のハサミ（薄層）があった。

写真36は完掘したピットである。この写真の上側の壁面つまりピットの南半分の壁はオーバーハングして「袋状」の名残りを留めるが，後述するように北半分の壁は阿玉台のピットと切合いの状態になっていたので，その壁面はつかめなかった。ピット上半部での壁面崩落はかなりひどく，現開口部は原形にはほど遠いものである。このピットは，すでに廃絶埋没していた阿玉台のピットの南半分に切り合って掘りこまれたもので，双方の床面の完掘した状態を実測図と写真37に示した。阿玉台のピットは床面の3分の1ほどをボートの形に切り取られている。だからこのピットの壁面崩落の際には，ピット空間内に阿玉台ピットの充填土がくずれこむ訳である。従って，このピットの充填土と包含遺物のうち，ピット北側部分で特に上半部については，遅くともピットの第2次埋没進行中には攪乱が始まることになり遺物の共存関係を云々することはできないのである。その〝北半分の上半部〟の充填土から阿玉台（新）・大木8ａの破片が共出した。既述の事情に加えて，〝後時の水平移動〟による混入も考えられるのでこれらの遺物の共存は立証できない。

充填土の断面図は上述の「攪乱」の被害が比較的少ないと考えられる〝南半分〟におけるほぼ東西方向の断面図である。ピットの床面は20cmほど褐色ロームに掘りこんでいる。

充填土は細別して記載しているが，大別すると太い実線で分割したＡ，Ｂ，Ｃの3層になる。

A　⑤，⑥，⑦の床面被覆の充填土。

B　③，④のピット中位の充填土。

C　②のピット上位の充填土。

で，壁面及び開口部の崩落によってA，B，Cの順にピット空間を充填したと考える。

A層は褐色ロームを主体とする黒みがかった充填土で，壁面下部と床面の剝落（例えば霜柱などによって）で漸進的に形成されたと考えられる。それを細分した各土層の特色は

④　暗褐色土で褐色ロームを含む

⑤　暗褐色土で褐色ロームを主体とする

⑦　暗褐色土で，微量の今市軽石粒を含む

ということで土質の主体である褐色ロームは床面とその周壁を形成しているから，この部分が長時間空間に露出されていないとその土質が「腐蝕」したり黒土と「混合」したりする筈はない訳である。ピットが空洞状態で放置されれば早晩に上部壁面の崩落が起る筈で，それが起れば床面被覆土は外気に曝されて〝黒み〟がかることはなくなる訳だ。A層は床面中央部が薄く周縁部が厚い。壁面剝落の結果の充填土なのだから当然である。このA層は第1次埋没土である。この充填土の上述の在り方は次の事実を想起させる。

1．廃絶後のピットは暫時「空洞状態」を保っていた。

2．ピットの上部壁面の本格的な崩落が開始されるまでの「暫時」にA層が床面を被覆した。

3．「暫時」の間に〝漸進的〟にピット床面と壁面を傷めて褐色ロームを浮き上らせ〝黒み〟がからせたのは何か。それは霜ではないか。

この第1次埋没の形成は霜が原動力ではないか，とするのは空想である。しかし，ピットの廃絶が「冬季」であれば，ピットの下部壁面は傷んだのに，ピットの全面的な崩壊が起らない事情が説明しやすいのである。冬季にピットが空洞状態で放置されれば，外気に触れて原開口部も壁面も凍りつくだろうから，凍結と霜解けが日夜くり返えされても春になって大地に充分な水分が供給されるまでは「崩落」は小規模にしか起り得ないと考えるのである。この見地に立って推論するなら，ピットが貯蔵拡の機能をもつなら〈冬季の廃絶〉こそ〝在るべき姿〟であり，その機能にふさわしい終焉ではなかろうか。

B層はピットの開口部・上部壁面の〝本格的〟な崩落で形成された第2次埋没の充填土である。それを細分した各土層の特色は

③　今市軽石粒・七本桜層土を多量に含む黒土の混土層で，凸凹はあるが30～50cmの厚さでピット中位の空間を充填する。壁面崩落で堆積したから壁面よりの部分が厚い。この層の下面に後述する土器個体が含まれている。

④　少量の今市軽石粒を含む褐色土。部分的に黒土の塊土がある。凸レンズ状にピット中央部に堆積する。原開口部が崩落したものと見る。

同じ④だが七本桜層の塊土。ピット上部壁面の崩落に伴って転り込んだものであろう。

このB層の下面に断面図に見える土器個体と礫がある。写真35はその出土状態である。

礫は床面から6cm，土器は23cmウキである。土器は加曽利EⅠで完形。横転し土圧でつぶれている。この礫と土器はB層推積の直前に投棄されている。従ってピット廃絶後に「暫時」の時間差をもって投棄されたことになる。③の混土層中に土器破片が多い。埋没進行中に投棄されたものであろう。

C層　②の黒土層で少量の今市軽石粒・七本桜層土を含む。現開口面までのピット空間を充填する。前述のように，このピットの南半分の上部充填土（深さ50cmほどまで）はこの層に該当する。この層中に観察された砂のハサミや炭化物の出土，さらに土器破片がピット中央部寄りに〝渉出〟した事実などは，このピットの上部空間がきわめてゆるやかに埋没したことを示唆する。砂のハサミは〝スリバチ〟状のくぼみ

に水たまりができたため，土器片が中央部よりに集ったのは混入時にくぼみ中央部で安定を保ったためと解したい。〝水たまり〟や〝土器片の寄り集まり〟の見方が仮に成立しなくとも，充填土はくぼみ周縁部からの〝流れこみ〟であり，くぼみが平担化するまでかなりの時間的経過があったことは間違いなかろう。従ってこの充填土中の遺物はピットの時間的位置とは全く無関係の代物である。これが第3次埋没である。

実測図に見るようにこのピットの床面は少し凸凹した直径 210cmほどの円形で，阿玉台ピットの南側床面の一部をぶち切っている。既述の床面ウキの土器個体と対置する部位に床面から20cmウキで2片の土器片がある。阿玉台ピットの底面とこのピットの底面との段差は15cm内外で，前述のようなB層の崩落が起った場合，この位置はぶち切った阿玉台ピットの充填土がくずれ込む可能性もあり，ウキの高さ20cmというのもきわどい。この土器は加曽利ＥＩだから，きわどいながらピット南側床面の土器個体と共存すると考える。

このピットの壁面は断面で見る通り若干オーバーハングして「袋状」を呈するが，前述のような充填土の様子から推察して原形の名残りを留めるにすぎず，現開口部に至っては壁面上部の崩落をくり返した終末相であり原形にはおよそほど遠い。ただ，これだけ崩れたということは，原開口部はかなり小さくそれだけオーバーハングの状態が著しかったので崩れやすかったということであろう。くり返えすが，このピットは崩落をくり返えした終末の姿である。このピットの原形は「袋状」であったと断定する。

（遺物）

時期－加曽利ＥＩ式，第1次埋没に伴う遺物……土器－21図－4，22図－10

次の土器が床面ウキで第1次埋没に伴うものと考えられる。

21図－4。写真35および実測図中の床面ウキの土器。中型の口縁部が外反する深鉢。器形は阿玉台式の伝統を残すが加曽利ＥＩ式。火熱の影響が著しく，口頸部が黒色，以下は赤褐色に変色，器面はもろくボロボロである。口縁部の3分の1ほどを欠損している。口唇と頸部に1本の隆線を貼って区画帯をつくり，対応する4個の橋状把手をつけた。把手の背に隆線を施す。胴部に太く粗い縄文を施す。器面にすりけし痕が縦走する。施文は器面の4分の1ほど，他はすべて無文。

22図－10。床面を被覆する褐色土中から出土。中型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥＩ式。焼成良好，胎土に細砂と微量の雲母を含む。器面は黒褐色に焼焦げている。地文に縦方向の縄文をつけ，沈線で渦状文をモチーフとする曲線文を施す。

以下の土器は共存の立証ができず，切り合っていた隣の阿玉台式のピット（Ｐ－16）からの混入も考えられるものである。

21図－5。ピット南半部の今市層を含む黒土の混土層から出土。破片を接合して得た個体だが，片側を欠損している。口唇部が外反する中型のキャリパー状深鉢。器面はかなり焼焦げ黒褐色を呈する。多量の炭化物が付着している。文様は縄文だけ。口唇部は左傾，口頸部以下は右傾している。同じ縄文原体を方向を変えて施文したもの。

21図－6。ピットの北側から出土。大型の深鉢形の破片。阿玉台の新式。焼成堅緻で胎土に細砂と微量の雲母を含む。器面は褐色だが，焼けこげがひどく部分的に変色している。沈線部分には炭化物が付着している。口唇に巾広の隆帯をつけ，図の断面のように〝二重口唇〟を作り出し，半截竹管による連続刺突を施す。器面に口唇に沿って半截竹管による平行沈線を引く。原体は口唇部の刺突文の工具と同じ。全体に器

面調整が不充分で，いかにも〝粗製〟の土器である。となりの切り合いピット（阿玉台）からの崩れこみかも知れない。21図－7，22図－1も同様に推察する。

21図－7。ピットの上位で出土。大型の深鉢の口縁部破片。阿玉台の新式。焼成堅緻，胎土に細砂を含み器面は赤褐色を呈し焼けている。図は大波状の把手の部分で，これが4個対応していたものであろう。口縁部にツバ状の突帯を廻らせ，把手の部分では三角状に突出する。把手・隆帯とも刻目文を施す。突帯は背に沈線を引いている。この突帯から上側が文様帯で沈線文を駆使したジグザグ文が施されている。

22図－1。ピットの上部から出土。大型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。阿玉台の新式。器面は焼焦げて淡褐色ないし赤褐色を呈し変質してボロボロになっている。口縁に山状の把手を4個対応させてつけたらしい。地文はない。口唇部を肥厚させ〝段差〟をつけ，口頸部に太い隆線を廻らして文様帯を区画する。文様は二重の結節沈線で囲んだ長方形の区画文。上辺と下辺は半截竹管を上下に組み合せて鋸歯状に施文している。〝長方形の区画文〟は把手と把手の間の部分に2個ずつ都合8個つけたらしいが，図でみると左側に一部だけ欠け残っている区画文は右側のものとは違っている。山状の把手へ，裾から頂部へ引いた結節沈線も，反対側には施していないなど，故意か過失か施文上の〝くりかえし〟を省いている。把手にタテに〝めがね〟状の隆帯をつけたらしいが下部が欠落している。

22図－2。床面褐色土上面から出土。口縁部の破片。阿玉台の古式に併行。焼成堅緻，胎土に雲母を含む。結節沈線で楕円状の区画文をつけている。

22図－3。ピット内の出土。口縁部の破片。阿玉台の新式併行。焼成堅緻，胎土精良。隆帯を貼って口唇を肥厚させる。口唇に2本セットの結節沈線を引く。口唇部分の肥厚帯に右傾，以下の器面に左傾の縄文をつける。下端は結節沈線に沿って割れている。

22図－4。ピット内の出土。深鉢の口縁部破片。加曽利ＥＩ式。焼成良好，胎土に粗砂を含む。器面は栗色。口縁部に太い隆線を貼り指圧痕をつける。地文に半截竹管で櫛引文の様な施文をしている。

22図－5。ピット内の出土。小型で薄手の土器，口縁部破片。器面は褐色。口唇に沿って2本セットの沈線をひく。その上と口唇に細い竹管による刺突文を施す。器面に櫛引文を施す。

22図－6。ピット内の出土。深鉢形の胴部破片。加曽利ＥＩ式。上辺と下辺は輪積みの継ぎ目が剝離。胎土に粗砂を含む。器面は焼けこげて黒褐色に変色。かなり傷んでいる。地文に縄文をつけた後，太い沈線で器面に長方形の区画をし，タテの区画線の内側に蛇行沈線を併行させている。

22図－7。ピット内の出土。胴部破片。加曽利ＥＩ式。焼成良好。多量の雲母を含む。器面は栗色。器面に太く粗い縄文を施文後に竹管文（三截か）で沈線文を引く。図の左・上・右辺は直線を施しその区画内に蛇行沈線をひいている。

22図－8。ピット南半部の今市軽石粒を含む黒土の混土層から出土。大型のキャリパー状深鉢の口頸部破片。加曽利ＥＩ式。下辺の割れ目は粘土の継ぎ目が剝離。焼成良好。器面は黒褐色で焼けており炭化物が付着している。渦状文を彫刻的に描きこんでいる。

22図－9。ピット内の出土．大型の深鉢の底部。加曽利ＥＩ式。焼けこげて褐色，炭化物が付着。底部は網代底である。

Ｐ－18　（第23図～25図，写真40～42）

現開口部直径約 175cm・深さ 160cm・床面直径約 250cm。子ピット1個。ピット廃絶の推定季節＝冬。

20～30cmの表土を剝いで今市層上面に開口部輪郭を視認。開口部から20cmの深さでは阿玉台・加曽利ＥＩの破片と共に，七本桜層の塊土があり，深さ50cmで土器片が雑多に出る。壁ぎわに七本桜層の塊土が落ちこんでいて開口部の終末的崩壊を物語る。充填土は今市軽石粒を混えた黒色土。ピットの北側で深さ85cmで大きな破片が出，同個体は50cmほどとび離れて出土する。(床面のｂの土器と接合できた破片) 深さ90cmで，横転し下側だけ残ったキャリパー状の土器個体が出る。掘り進めた結果，このピットの床面は，原開口部からピット上半部の北側壁面にかけての部位が大きく崩壊し，大量に雪崩こんだ今市層土により舌状に覆われていた。壁面剝落が比較的少なかったピットの南側壁面と，褐色ロームに掘りこまれている床面と，その周壁55～66cmほどの部分とがピットの原形に近い。

実測図と写真に基いてピットの概形と遺物の出土状態を述べる。

ピットは今市層上面から 160 ～170cmほど掘りこまれている。床面は直径 250cmほどで褐色ローム中にあり，床面から計って褐色ロームと今市層の境はピットの南側で66cm，北側で55cmである。これは今回の調査区の地層が若干南高北底で緩傾斜しているためである。この褐色ローム中の壁はピットの下半部にあるから最初に埋まるし，今市層よりは崩落しにくいからほぼピットの原形であると見てよい。その壁はきれいにオーバーハングしていてこのピットが見事な「袋状」であったことを証拠づける。

ピットの充填土は　大別して二つになる。ピットの北側から崩れこんで床面を舌状に厚く被覆していた〝混り土〟のない今市層土と，それから上部のピッ内の空間を充填していた今市軽石粒を混えた黒色の混土層である。区別しにくくて識別できなかったが，この混土層も上部と下部では充填時期に少し時間差があるようだ。下位から加曽利ＥＩのみ出土するのに上位では阿玉台と加曽利ＥＩが混在する。だから上位の充填土は攪乱しているといえる。写真41は床面の様子を西側から撮影したもの。ピットの中央部に長さ70cmほどの長大な石（実測図中のｆ）。雲母を多量に含む砂礫質で吸水性が大きく脆い。砕いて土器の胎土に混ぜるのではないか。この石は前述の崩落した今市層の傾斜面上にのっていた。投棄されたのである。正確には，石は今市層上の数cmの褐黒色の混土層の上にのっており，石全体はピットの上部空間を充填する黒色の混土層中から出土したので，この石の投棄はピット壁面の崩壊後であることがわかる。崩落した今市層中にも礫（山礫・河原石）や加曽利ＥＩ片が含まれている。この長大な石の周辺に大小の礫（実測図中のｅ）があった。同時期の投棄と考えられる。

実側図で，ピット床面の東側壁ぎわに寄りついて，土器片と平らな河原石や凹石の破片を含めて礫が出土した。床面で出土した礫は大小30個ほど。いずれも床面からウキで散乱状態にあり（同じ平面にない），埋没開始の時点で「投棄」ないし「混入」した状態を示すものと考える。床面東側の壁ぎわに寄りついて出土した土器片は５個体分で，すべて破損した土器個体の残片である。図面の土器片はａはウラ，ｂは重なり合って，ｃはオモテ，ｄはウラを見せている。ｂは床面から25cmほどウキであるが，その25cmほどの土は床面から上へ次の層順である。

① 床面直上にある褐色がかった黒土の薄層。この薄層はピット床面の東縁から南縁をとりまいている。

② 今市層。ピット中央部へ崩落した今市層の周縁である。

③ 混り気のない純黒土層。原開口部からの剝落である。

④ 褐黒色の混土層。前述の長大な石をのせていた層である。漸移層である。

ピット床面の西南壁に，後述する子ピットを発見した。この子ピットの深さは65cmで，充填土は開口部が混り気のない黒色土，以下が今市層に黒土が混った層で土器片や礫を含む。充填土は非常に軟かで新鮮な感じであった。崩れこんだまま全く静止していたからである。床面の3分の2ほどを直接に厚く舌状に被覆する今市層は，ピットの原開口部の北側が大きく崩落したものであるが，図面の床面壁ぎわの土器片の出土状態は，投棄されたこれらの土器片が〝舌状の今市層〟上の斜面を転り落ちた結果であると見る。空洞状態で廃絶されたピットにすぐ投棄したのではなく，埋没が進んだ状態で投棄することを注意したい。

子ピットは親ピットの西側壁面に抉りこんで掘っている。中央部よりの壁はほぼ垂直だが，外側の壁は親ピット床面の外周より張り出している。深さ65cmで底面は平担であり不整形だが「袋状」を呈する。内部は親ピットより更に〝常温的〟で，真夏の発掘の今回はヒンヤリと涼しく，掘りながら汗が吹き出した顔からユゲが出て子ピット内に充満したのだった。その空間は大人1人がしゃがんで入れるほどで充填土の総量はバケツ35杯ぐらい。充填土は前述の雪崩れこんだ今市層で，子ピットの内側壁から外側壁へ斜に入りこんでいる。その上部を今市層の塊土や黒色土の薄層が充し，親ピットが原開口部北側の崩壊によって最初の埋没が始まったとき，〝同時開口〟していた子ピットが命運を共にして埋没したことを示している。子ピットの内側壁寄りの充填土中に底面から20cmほどウキで土器片，外側壁寄りの底面直上に3～4個拳大の礫が出土。子ピット内の礫は石礫で15～16個だが，出土位置から総合して充填土の流れこみに伴って斜め上方から転りこんだことを示している。これらの事実は親ピットが「空洞」で廃絶された時点では子ピットも同様に完全な空洞状態にあり，親・子のピットは原形を保持していたことを示している。子ピット内で出土した土器片は親ピットの床面を厚く舌状に被覆した今市崩落層中の土器片と時間的に共存するもので，親ピット床面の東から南側壁ぎわに寄りついて出土した土器片よりは少し早く投棄されたと考えられる。

写真40の子ピット上方に，壁面についた状態で七本桜層の塊土が見える。これはピット上半部の壁面が崩落した結果，その部位の自然推積層がピット内に陥没してこの位置に止ったもの。

以上の状況を総合してこのピットの埋没過程は次の順序で進行したと考える。

1．空洞状態でピットが廃絶される。子ピットも同様に空洞であった。

2．廃絶直後のピット原開口部をわざと踏みこわす。このため原開口部の黒土・七本桜・今市層土がピット内の空間に「舌状」に雪崩れこむ。子ピットも共に埋没する。この時，ピット開口部の南側はほぼ原形。つまりピットは北側から斜めに崩れこんだ土で一挙に空間のかなりの部分を充填された状態になる。「わざと」踏みこわしたとする理由は，床面直上に「廃絶後の時間的経過」を示す間層がないことと，他とピットの充填土の状態と比較して眺めた場合に，ピットを形成する自然推積の土壌は〝自然的埋没〟では〈一方の側だけ，大量に〉崩落するとは考えにくいからである。このわざと崩した土が第1次埋没である。

3．若干の時間的経過がある。長大な石（f）やbの土器の直下の褐黒色の混土層の存在がそれを意味する。第2次埋没の開始である。この混土層は，その上の黒色の今市層（前述したピットの充填土の二大別のうちの上部の土層）までの漸移層で，ピット内を北高南低に充填した第1次埋没土の斜面に形成された薄層である。

4．長大な石。礫。凹石の破片。破損した土器

などの投棄が行なわれる。実測図の床面に描いてある遺物がこれらである。最初の投棄はこの程度であろう。これらの遺物はピットの北側から投棄された。土器破片は舌状に崩れこんだ充填土の急斜面を転落し放射状に散開して，ピットの床面の東側から南側の壁にあたって止まった。〝投げこみ〟の土器は複数個体ですでに破損した廃棄物であり，出土状態は土器片がウラになったりオモテになったりしているからかなり勢いよく放りこんだことを示している。従ってこれらの土器片は時間的に共存する。

5．壁面の漸進的な剝落と土器・礫・木片などの投棄がくりかえされる。写真40に見える七本桜層の塊土の崩れこみもこの時点で起る。第3次埋没の進行である。第1次埋没が〝人為的〟であるのに較べ，第2・3次埋没は〝自然的〟で漸進的である。

6．スリバチ状のくぼみになったピット開口面が周縁部からの土の流れこみによって平担化される。現開口部直下で見られた阿玉台・加曽利ＥＩの共出は，この時点で起った水平移動であり相当な時間的経過があるものと解釈する。

ピット内の礫について。

土器片が破損品の残片で廃棄物であったと同様に，第1次及び第2次埋没で親・子ピット内に転りこんだ大小の礫も不用品であったと考える。これらの礫はピットが機能を果す上にかかわりを持ったもので，原開口部の周縁に存在してたために，開口部崩落と共にピット内に転落したのではなかろうか。「投棄」より「混入」の方があり得るように思じる。礫は蓋の重しとか開口部周縁の敷き石とかなどの役割があったのではないかと想像する。

ピット埋没についての追加。

このピットから出土した土器を整理・復原していたら，実測図の床面ウキで出土したｂの位置の土器が何とピット上位で出土した土器片（ピットの北側で深さ85cmで大きな破片が出，同個体は50cmほどとび離れて出土する云々と記述）と接合できた。ピット上半部の充填土は自然的に埋没するから後時の混れこみもある。第1次埋没に伴った土器とは別次元のものとする想定が崩壊するではないか。これには正直困った。この深さ85cmの部位では床面の加曽利ＥＩとは共存しそうにない阿玉台式なども混在しているのである。どうしてこんなことになったのか。いま考えると掘り方がまずかったのだが，このピットが床面でどうなっているかは想像がつかないし，微妙な土質の変化があった筈なのだが気づかなかった。床面の土器片とピット上位の土器片とは同時に投棄されたと考える方が自然である。それが証明できるだろうか。

残念ながら既述したように1次と2次埋没の土壌の認別はしたのだが断面図はとっていないのである。だから断定的なことはいえないが，問題のｂの土器は，床面ウキの方はピットの南縁，ピット上半部（－85cm）の方は「北側で」出ている。第1次埋没が人為的で大量であったことは既述の通りだが，ピット空間を北から南へ斜めに充填したその斜面に投棄された際に，同じ個体の破片が上と下の現出土位置に留ったのだと思う。第1次埋没の上には混土層の薄層があった。床面ウキの実測図中の土器片はこの上にのっていた。この薄層は〝漸移層〟的である。霜によって形成されたのだと思う。この層が厳密には第1次埋没土の斜面を若干の時間差（数ヵ月？）をもって覆っていたわけで，この時点でｂの土器など一諸に投棄された土器片はこの斜面一面に散らばる訳で，これは相互に共存する筈である。それを上からレベル掘りに掘ったので，第3次埋没以降の〝ヨタモノ〟土器と混ってしまい，共存資料を減してしまった。斜面上を第3次埋没土がすべり落ちてピット空間を消し去っていく過程で〝ヨタモノ〟土器が

入りこんだ。床面ウキの〝共存土器〟の周辺から阿玉台式の破片が出ているのが解せなかったのもそうした理由であった。ピットの崩落の仕方がいかに微妙に土器の共存関係に影響を与えるか，崩れ方に注意しないと，ピット内の出土位置や充填土中の位置ばかりの観察にふり回されては何も得られないことを教えられた。ピットを掘るのにただ上から慢然と掘るのがいかに愚であるかを思い知らされたのであった。

（遺物）

時期＝加曽利E1式。第1次埋没に伴う遺物……土器＝23図－1，24図－1・2・3，25図－1・2。

既述のように，このピットは北側から大きく崩れこんでピット空間を，北側肩口から南側床面へかけて斜めに埋めた。掘り方はレベル的に下げたので共存する筈の遺物もしない遺物と混って区別がつかなくなった。以下に記述する土器はその数少ない「共存する」土器で，正確には第1次埋没後の霜の形成土である第2次埋没に伴う遺物であるがさほどの時間差はないと考えられるので，第1次埋没に伴う遺物としてとり扱った。

23図－1。床面東側壁ぎわにウキで出土した実測図のaの土器。大型のカメ型の大破片。加曽利E I式。焼成堅緻，胎土精良。器面は栗色だが火熱で各所が淡褐色に焼けて変色している。地文に太く粗い縄文を施した後，頸部に2本セットの隆線を併走させて口縁部と胴部の文様を区画している。

口縁に8個の把手をつけたと考えられる。図の中央部の把手は三叉状で背に渦状文を描きこんでいる。この把手が4個対応し，それらの把手の中間位置に図の左側の把手が都合4つつけられた。これは3つのアーチが寄り合った形状で中央部が三角状にあいている。これらの把手がついているのは口縁部文様帯の上半部である。口唇に隆線を貼り重ねて背を太い沈線で抉り〝三重口唇〟様にする。把手と把手の中間部から3本セットの隆線を十字文状に貼付し，そのクロス部は円になっている。

胴部文様は渦状文をモチーフとする太い沈線文を描く。図のように，渦状文的な曲線文は3本セットの沈線で，器面に縦走する沈線は4本セットで描かれる。器面に縦走する沈線は把手に対応する部位に施す他に，その中間部位の〝十字〟状文とも対応させているようである。従って器面を8つないし16にタテ割りしている。と推定される。このように，胴部に一見「入組文」的な曲線文を施文する事例は本県の類例としては多い方ではない。ふつうの加曽利E I式に比べて特異な部類に属する器面装飾の技法であるといえる。

24図－1。既述した実測図中のbの土器。数片の個体を接合して得た個体。加曽利E I式。床面における出土状態からみて，この土器がこのピットの時期判定のキメ手であることにはまちがいはない。中型のキャリパー状深鉢で，焼成良好，器面は暗褐色を呈し，かなり焼けこげ炭化物が付着している。地文に太く粗い縄文を施文後，口唇に沿って隆線を廻らして段差のある〝二重口唇〟とする。隆線を貼って口頸部文様帯を区画し，内に2本セットの隆線で「逆S字文」をつけている。

この文様帯の「逆S字文」は現器面に4個あり，欠損部にもう1個分の空白があるので5個連鎖していたと見る。胴下半部には，「逆S字文」に対応して都合6本の蛇行沈線を垂下させている。その間隔は不規則なので，もう1，2本は沈線を引いていたと見られる。口縁の欠損部位には，把手が1個ついていたことが器面の割れ目からわかる。

24図－2。実測図中のcの土器。床面ウキの土器ブロックのうちから破片を接合して得た個体。中型のキャリパー状深鉢，加曽利E I式。

口頸部と底部を欠損している。胴部は中位で少しふくらむ。器面の全面に火熱の跡が著しく，胴部上半部は黒色，下半部は淡褐色を呈する。口頸部に隆線を廻らして文様帯を区画したのだが，その部位は粘土の継ぎ目でこれが剝離したもの。底部の割れ目も，粘土の継ぎ目が剝離したものだ。地文に縄文をつけ2本セットの蛇行沈線を垂下させて器面を4つにタテ割りしている。

24図－3。実測図中のbの下側にあった土器。中型の注口土器の大破片。加曽利E式。焼成良好。器面の全面に朱を塗布している。口頸部が内湾する薄手の浅鉢形で，胴部の器面は平滑にヘラ仕上げしている。口頸部文様帯は，地文に縄文をつけ渦状文をモチーフとする曲線文を施す。渦状部から錐状に装飾文を付加するのもよく見受ける技法である。〝二重口唇〟で注口部はやや扁平。その内壁にも朱が残っている。

25図－1。床面ウキの土器ブロック中の破片を接合して得た個体。ピット南側下半部の混土層とピット下半部の位置で出土した破片である。小型の深鉢形で，全体の半分ほどと底部を欠損している。加曽利EⅠ式。器面は焼けこげて赤褐色を呈し傷みがひどく器壁がボロボロにもろくなっている。地文の縄文をつけただけで他の文様はない。口縁部に隆帯を貼付し，その下部に指圧痕をつけている。指圧痕は右手親指で横から連続的に押えつけてつけたもので爪の跡が残っている。

25図－2。床面ウキの土器ブロック中や，舌状に北側から崩れこんだ今市崩落層中，ピット下位の今市軽石粒を含む黒土の混土層から，都合6片の個体破片が出土。破片は同時の投棄と考えられるから，これらの充填土の崩落にはあまり時間差がないことが予想される。小型のキャリパー状深鉢。加曽利EⅠ式。口縁部が直上し口頸部がゆるやかに外反する。背に沈線を引いた隆帯で区画しタテの刻線をつける。口頸部以下の器面に，地文に縄文をつけ頸部に渦状文や懸華文を沈線で施す。胎土に粗砂を含み，火熱で器面はひどく傷みボロボロになっている。器面は黒褐色で一部に炭化物が付着している。

以下の土器片はピット内の各所から出土したもので，共存の立証ができない土器である。目立った資料を抽出して記述する。

25図－3。床面ウキの土器ブロック中から出土。胴部破片。関山式。器面は赤褐色。器面全面に地文の縄文を施す。もちろん床面の土器群とは共存しない。開口部の崩落に伴って黒土中に包含されていた破片が混入したもので，充填土の一部と考えればよい訳である。

25図－4。開口部位の上位部分の出土。胴部破片。前期の繊維土器で関山式か。口縁が外反する屈曲部分。器面は焼けこげ淡褐色を呈する。原開口部崩落の際，黒土中に含まれていた破片が混入したものであろう。

25図－5。ピット内の出土。口縁部破片。阿玉台の古式。焼成堅緻，雲母を含み器面は赤褐色。口縁部の文様帯に結節沈線による曲線文を引く。文様帯をタテわりしている隆線は口唇部では三叉文状のくぼみをもつ。

25図－6。開口部位の上位部分から出土。深鉢の胴部破片。阿玉台の新式。胎土に粗砂と雲母を含む。火熱の影響あり。器面は阿玉台特有の暗褐色。アーチ状の隆線文を連続させ，垂下する部位に指圧痕を，区画された器面に刻目文を施す。隆線は断面三角。屈曲部は押しつぶされている。

25図－7。ピットの南側下半部の混土層から出土。中型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。焼成良好。焼けこげが著しく，一部に炭化物が付着。口唇に沿って太い沈線を引き，〝段差〟のある〝二重口唇〟をつくり出す。文様帯をやや肥厚させ，器面に彫刻的に渦状文をモチーフとする沈線文を描きこんでいる。

25図－8。床面ウキで出土。口縁部破片。加

曽利ＥＩ式。雲母を含み，器面は焼けている。口唇部は少し肥厚し，以下の器面と〝段差〟がある。それに沿って２本の平行沈線を引く。地文に縄文をつけている。口縁部は左傾，以下の器面は右傾。下辺の割れ目は波状沈線の部分である。

25図－９。開口部位の上位部分から出土。大型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。典型的な加曽利ＥＩ式。器面は焼けこげて褐色ないし黒色に変色し，器面の一部はかなり傷んでいる。〝二重口唇〟。口縁部文様帯に，沈線を伴う隆線で「逆Ｓ字文」をつける。この「逆Ｓ字文」の連結部に小突起をつける。その下にタテの隆線を施して，文様帯を都合４つにタテわりしたと見られる。文様帯の空白部分に合わせてつけたものだ。割れ目は粘土の継ぎ目が剝離したもの。

25図－10。ピット南側の下半部の混土層から出土。中型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。典型的な加曽利ＥＩ式。粗砂を含み，器面は焼けて赤褐色・黒褐色に変色。地文に縄文をつけ渦状文をモチーフとする隆線を貼付する。

25図－11。床面ウキの土器ブロック中から出土。キャリパー状深鉢の口縁部破片。器面は栗色に焼けこげ炭化物が付着。口縁に沿って半截竹管の背で沈線を引き，その下に同じ工具を刺き立て鋸歯状文を施す。

25図－12。ピット内の今市軽石粗を含む黒土の混土層中から出土。キャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥＩ式。胎土に細砂を含み，焼成良好。器面は焼けこげて黒褐色に変色している。渦状文をモチーフとする小波状口縁。地文の縄文を施文後に隆線を貼付して曲線文を施工している。

Ｐ－19　（第26図～第27図，写真43～44）

現開口部直径約 150cm・深さ 140cm・床面直径約 170cm。子ピット１個。廃絶の推定季節＝冬。

今市層上面にピットの輪郭を視認。現開口部から深さ40cmほどに土器片のブロックがある。その下10cmほど大破片が出土したので，それ以下の遺物を区分してとり扱ってみたが，充填土は今市軽石粒を混えた黒色の混土層で変化はなく，土器片もすべて加曽利ＥＩであり充填土の区分はできなかった。ただ，ピット下位の壁ぎわは壁面の褐色土と混っている。開口部から95cm以下の床面に近い部位では数個の礫が出土した。

実測図にみるように，ピットの現形は若干「袋状」を呈し，深さは約 140cm，床面は不整円形で直径約 170cm。床面は若干の凸凹があり，北側へやや傾斜している。現開口部から80～100cmほど今市層，その下は褐色ロームで床面は褐色ロームの上面から40cmほど下にある。ピットの北側はいく分規則的にオーバーハングして「袋状」を呈するが，実測図の断面にみるように崩落が激しく，南側の壁面はさらに甚しく不整形である。

床面から開口部まで壁がほぼ垂直なのは壁面崩落をくり返した結果であって，このピットの形状は原形にはほど遠い。写真43に示すように床面から20～25cmほどウキでほぼ同じ平面に土器片が散乱している。このうちａ，ｂ，ｆは同じ個体。この出土状態からみて，これらの土器片は破損品を投棄したことが明らかであり，同じ平面に見られることは第１次埋没がピットの床面を平担に被覆した直後の投棄であることを示している。このピットは第２次・第３次埋没の充填土の識別ができなかった。床面からウキの状態で散乱している土器片は第１次埋没に伴うが，土器片が〝同じ平面〟に散乱し得たのは第２次埋没の開始までに若干の時間差があったことを示唆している。ピットの南壁の崩落が顕著であるのに，その下面の充填土に〝純剝落〟

塊土が見あたらないのは第２次以降の埋没も「漸進的」であったことを意味するかも知れない。第２次以降の埋没土は現開口部から床面近くまではほぼ同じ土質であり，壁ぎわの充填土は褐色ロームと混っていることもそれを想起させる。完堀した床面は写真43の通り。

従って，前述のピット上位部分で出土した土器破片はいっそうピット床面の土器とは時間的な隔りをもつことになろう。

床面の北側壁を抉りこんで子ピットが１個ある。口径約50cm・深さ約40cmで底面を平担に削り，親ピットと相似の「袋状」ぎみに掘りこんでいる。充填土は床面被覆土と同じで中に遺物はない。

以上を総合すると，このピットの埋没は次の順序で進行したと考える。

１．空洞状態で親・子ピットを廃絶する

２．第１次埋没土がピットの床面を20～25cm被覆する。その面はほぼ平担であった。

３．土器の破片が投棄され床面に散乱する。実測図の床面上の土器である。この土器片は第１次埋没の進行中か終了直後に投棄されたもので明らかに共存する。ピット廃絶とさほど時間的な隔りはないであろう。

４．第２次・３次埋没が進行する。ピットの壁面崩落がかなり甚しいが，人為的な破壊は視認できなかったので「漸進的」に埋没したと理解しておきたい。

５．ピットの下位で出土した礫・中位で出土した土器片などは第２次以降の埋没進行中の投棄であり，ピット廃絶後にかなりの時間差があると考える。

（遺物）

時期－加曽利ＥⅠ。第１次埋没に伴う遺物……土器－第26図－１・２，第27図－１・７。

実測図中のａ，ｂ，ｃ，ｄ，ｅ，ｆの各土器は床面ウキで出土し，第１次埋没に伴うもので相互に共存する。時期判定のキメ手になる土器である。一括投棄の土器である。

26図－１。床面ウキで出土した土器，大破片が５片散在していた。時期判定のキメ手の土器である。実測図中のｂ，ｃ，ｄが接合できて得た個体の胴下半の個体が拓影の土器である。ａの土器片と他の一片も同じ個体だが全部は接合できなかった。大型のキャリパー状深鉢の胴部破片。加曽利ＥⅠ式。焼成良好。胎土に粗砂を含む。器面全面に焼けこげがあり，底部付近は赤褐色に，上半部は黒褐色に変色，器面が傷んでもろくなっている。地文の縄文をつけた後に半截竹管で平行沈線による施文をしている。口頸部と胴部の文様帯は三段に引いた沈線で区画される。胴上半部に渦状文をモチーフとする曲線文をつけ，器面に３本セットの半截竹管を一定間隔（約６cm巾）で引き，さらにその区画帯を蛇行する沈線を引いて充填している。胴下半部の３分の１ほどしかない。底部も欠損している。破損した個体の断片を投棄したのであろう。

26図－２。実測図中のｅの土器。器面を表に前述の26図－１の土器片と重なり合って出土した。この土器に，Ｐ－８の〝上底〟から40cmウキで出土した土器片が接合できた。更に，接合はできなかったが，同じ個体破片がＰ－14から同じ個体らしい破片がＰ－９からも出土している。その考察については「ピッ内の遺物に関する二、三の問題」でふれる。

大型の浅鉢。加曽利ＥⅠ式。器面は黒色にすすけている。口縁の内側を肥厚させ６cm巾の〝段差〟テラスをつくる。口唇は外反している。口唇に太い沈線を引いている。口唇と内側の〝段差〟テラスに朱を塗っている。Ｐ－８から出土の破片と接合できる部位に補修孔がある。一括投棄の土器片の１つである。この浅鉢は第１次埋没直後の投棄であるのに対し，Ｐ－８出土の破片が第２次埋没以降の投棄であるのは興

味深い。

27図－1。ピットの南側床面ウキで出土。実測図中のｆの土器。大型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥⅠ式。焼成良好で胎土に粗砂を含む。器面は焼けて栗色ないし赤褐色に変色している。口頸部文様帯は粘土を貼って肥厚させている。口縁に三叉状のアーチ様の把手をつけ，頂点にも円孔を通じ橋状のアーチ状粘土をはる。把手の稜線と連絡させて渦状文をモチーフとした隆線を貼り，それぞれの区画空間を太い沈線文で彫刻的に装飾し，立体的な文様帯を構成している。施文は入念に丁寧に行なわれ精製した感がある。胴部に縄文をつけている。

27図－7。実測図中のｃの土器。大型の深鉢の胴下半部の破片。下辺は底部付近。焼成良好，胎土に細砂を含む。器面は焼けて赤褐色を呈する。地文に縄文をつけ，２本セットの半截竹管文（都合４本の沈線）で器面をタテわりし，区画帯に蛇行沈線を垂下させる。半截竹管文は「下書き」で，施文後にその線をヘラ状工具の先でなぞって太い沈線に引き直している。器面の下部ではその手続きを省略したので〝地〟の半截竹管文が見えている。

以下の土器片はピット内の褐色の混土層から出土した。共存は立証できなかった土器。第１次埋没以降の充填土である。

27図－2。口縁部破片。阿玉台の古式。器面は暗赤褐色を呈し雲母を含む。口唇は丸みをもち，器面は平滑に調整。口頸部にアーチ状の連弧文を結節沈線で施す。

27図－3。胴部破片。阿玉台の新式。器面に上からつぶしたような隆帯がみられる。器面は平滑で多量に雲母を含む。

27図－6。中型の深鉢の胴部破片。加曽利ＥⅠ。焼成良好。胎土に細砂を含む。器面は火熱で栗色ないし褐色を呈する。器面の屈曲部位に隆線を廻らして口頸部を区画。文様帯は内部に縄文を施した区画文。以下の器面は無文である。

27図－8。同じ層中の８片を接合して得た底部個体。加曽利ＥⅠ式。焼成良好。胎土に細砂を含む。器面はかなり焼けて赤褐色を呈し裏面は黒色。多量の炭化物が付着している。器面に斜行する撚糸文がつけられている。

27図－9。小型のキャリパー状器形の口縁部破片。口唇に沿って沈線を伴う隆線を廻らし〝二重口唇〟とする。文様帯は，地文に縄文を施し隆線をつけたらしいが欠落しているので不明だ。

以下の土器片はピット内の各所から出土した土器である。

27図－4。中型のキャリパー状深鉢の口縁部破片。加曽利ＥⅠ式。焼成良好，胎土に粗砂，器面は焼けている。口唇に沈線を引いて〝二重口唇〟にする。口唇に沿って隆線を廻らし，渦状文をモチーフとする突起をつけている。地文に縄文をつけ併走する沈線を引いて施文している。

27図－5。ピット上位の土器ブロックの出土。口縁部破片。浅鉢らしい。阿玉台の新式？

焼成良好で胎土に細砂を含む。火熱で裏面は黒色を呈し，細くヒビわれてもろくなっている。炭化物が付着している。器面は平滑に調整し，暗赤褐色を呈する。口唇に２本セットの沈線を引く。器面には隆線を貼り沈線を添わせている。

27図－10。胴部破片。加曽利ＥⅠ式。器面は赤褐色。斜行する撚糸文をつけている。

Ｐ－20　（第28図）

現開口部直径約 130cm・深さ約30cm・床面直径約 120cm。廃絶の推定季節＝不明

実測図のように，見かけ上は〝皿状〟。不整円形で，現形は開口部の方が床面より大きく壁面崩落が甚しい。床面は今市層中にあり，凸凹していて東側部分はやや傾向して低くなっている。断面図のように，25cmほどの表土の下，ピ

ット内の充填土は今市軽石粒を含む黒土の混土層であるが，よく見るとかなり壁面崩落の甚しいことがわかる。つまり，

現開口面からピット空間の大部分を充填するのが，今市軽石粒を含む黒土の混土層（②）で，床面や壁面の一部には多量の今市軽石粒を含む褐色土（③），部分的に今市層土を少量含む褐色土の塊土（④）が見られる。

ピットは今市層中に掘りこまれたものであるから，原開口部・壁面の崩落だけでは充填土に褐色土（褐色ローム）が混入する訳はないので，後時の混入も考えられる。現開口面の充填土中から数片の土器片と磨製石斧1個が出土した他に遺物の出土はない。A－1区のピットと同様に底部を残して上位部を削取されたのであろう。充填土の状態とピット壁面の様子から見て，このピットは廃絶の状態で埋没したのではなく，後時の攪乱を受けている可能性もある。

（遺物）

時期－不明。第1次埋没に伴う遺物－なし。

28図－1。ピット内の出土。胴部破片。加曽利ＥＩ式。器面は焼けて赤褐色を呈し，かなり傷んでいる。器面は黒色。全面に縄文がついている。

P－21　（第28図）

現開口部直径約90cm・深さ75cm・床面直径130cm。子ピット1個。廃絶の推定季節－不明

耕作土の直下に土器ブロックが出土。これが現開口部上面だった。横転した土器個体の上側は耕作で削り取られている。これをとり除くと不整楕円状の現開口部が現われる。実測図のように西側壁面の崩壊が甚しい。周縁部に七本桜層の自然面があり，部分的には現開口部の内側へ延び出している。原開口部の痕跡であろう。東側壁面はオーバーハングして「袋状」の名残りを留めるが他の部位の壁面はかなり傷んでいる。床面は凸凹はあるが円形で原形に近いと見る。

充填土は今市軽石粒を含む黒土の混土層でかなり緊質。ピット下半部では今市層土の量が増す。この下半部の充填土から散発的に土器片や礫が出る。床面被覆の第1次埋没とその上部の第2次埋没の土層の区分はできなかった。床面近くにウキで加曽利ＥＩの破片があった。

床面東壁に接して不整円形の浅い子ピットがあった。子ピットは壁面の陰になって殆んど見えない。

現開口面にあった土器ブロックは後時の移動も考えられるので，このピットの時間的な尺度にはならない。

（遺物）

時期－不明。第1次埋没に伴う遺物－なし。

28図－3。ピット内の出土。小型の口縁部が外反する深鉢の口頸部破片。加曽利ＥＩ。胎土に粗砂を含み，器面はかなり焼けこげ，黒褐色のまだらで，裏面も黒色。多量の炭化物が付着している。地文に縄文をつけ，器面に隆線を垂下させて器面を4つにタテ割りしたらしい。口縁に1本の結節沈線を施す。器形や結節沈線の使用などに強く阿玉台の伝統が残る土器だ。いわゆる接触様式の土器であろう。

28図－2。ピット上半部で現開口部から約50cm下で出土。中型の深鉢形の底部。阿玉台の新式。器面はかなり焼けて赤褐色を呈し器質ももろくなっている。文様帯は最下段のもの。楕円 円状の区画文を3個うける。 それらの上縁と下縁を直線がつなぎ，ちょうど隆線で帯状に区画した部位に3個の楕円区画文を配列したように構成している。隆線に沿ってキャタピラ文をつける。一見，勝坂式に似た土器である。

P－22　（第34図・35図）

第３次調査（昭和49年３月）の際に１つだけ発見したピットである。今回調査のＤ区のすぐ西側の部位で，発掘は遺跡の範囲を知る意味で予察的なものであったが，この区域では他に住居址らしい直径約 3.5ｍほどの円形プランが見つかった。

第３次調査のＡ－３区。Ｐ－１（写真50，第33～34図）

このピットは現開口部が楕円形を呈し，南北が 190cm・東西が 164cm・深さ58cm。壁面崩落はかなり甚しいが，下位壁面には「袋状」の名残りをとどめオーバーハングしている。床面ウキで土器個体が出土。写真 50 。

写真50の上辺が北，右手が東。東側の壁ぎわから北側の壁ぎわに33図－１の個体が破片となって散乱し，西側壁ぎわには34図－２の個体が横転している。前者の口縁部破片が後者の中に入りこんでいるのがわかる。南側の土器片は別個体である。これらの土器個損はいずれも投棄以前の破損品で，床面ウキの状態からみて，ピット廃絶後に若干の時間的経過の後，一括投棄したものであろう。充填土はプライマリーな状態にあったから，これらの土器は時間的に共存すると考えられる。

33図－１。大型のキャリパー状深鉢形。底部と他の一部を欠損した他は殆んど完形。胴部中位から口頸部の外反が始っているのでズングリした外観である。焼成良好。器面は火熱の跡が顕著で上半部は黒褐色，下半部は赤褐色。口唇に隆線を貼って〝二重口唇〟とする。口唇に大きな肉厚の扇状の把手をつけ，それと対応して小いさな山状の突起をつける。更に，この両者の中間部位にもっと小さな凸起をつける。これらの把手と突起は都合４個が対置するが，口唇の２本の隆線が波頭のように寄り合わさって連結し見事な一体感を構成している。把手には渦状文をモチーフとした隆線文をつけている。器面全面に縄文を施文後，意識的にタテに指のすりけし痕をつけている。とくに胴下部において著しい。すりけし縄文の萌芽的テクニックで当地の加曽利ＥＩ式において特筆される施文技法である。

口頸部は２本セットの半截竹管文を三段につけ，それぞれの段に波状の半截竹管を施す。加曽利ＥＩ式における施文の「くりかえし」パターンの典型的な具現である。半截竹管文の施文で部分的に乱れはあるが，全体的にバランスのとれた文様構成で，本県出土の加曽利ＥＩ式の中でもユニークな土器である。

34図－２。中型のキャリパー状深鉢形。把手の１つと底部を欠損した他はほぼ完形。加曽利ＥＩ式併行。焼成良好で胎土に細砂と雲母を含み，裏面は暗褐色を呈する。口縁部に隆帯を廻らして胴部の器面から〝段差〟のある口縁部文様帯をつくり出す。文様帯は４個の対応する三角鈕状の把手で４つにタテわりされる。口縁部を上からみると，把手が外側に三角形に張り出すため口縁の外周は方形を呈する。口唇は肥厚し平縁だが１個の把手だけは直立する部位があったらしい。欠損している把手は円孔が背の両側から通じそれぞれ沈線で円を画す。文様帯は図のように，２本セットの〝カスガイ〟様の結節沈線をつけ余白部分をタテの結節沈線で充填している。口縁，把手の背，胴部の全面に縄文を施す。阿玉台式の伝統を強くもった土器である。文様帯の設定の仕方，方形状の口縁外周などは，雲母の混入，結節沈線という阿玉台特有の技法と共に阿玉台の制約を抜け切れていないことを物語っている。他のもう１個の加曽利ＥＩ式と共出し共存しなかったなら，最末期の阿玉台式の１個と考えておきたい土器で，加曽利ＥＩ式へ移行する接触様式の一典型であろう。当地方の好資料として貴重な役割を果す土器である。

第6章　ピットの機能についての考察

これまでに，今回調査した21のピットがどんな過程を経て埋没したかとその充填土に含まれる遺物のどれが共存するかを中心に，同じような内容をいく分くだくだしいほど重複し繰り返して述べてきた。ここでそれらを要約し，この遺跡におけるピット廃絶のパターンを指摘しそれを通じて，ピットの機能について考察してみたい。以降の記述にかかわる各ピットの要項をまず表2に掲げる。

表2　各ピットの要項一覧

ピット名	子ピット数	ピット旧名	廃絶した推定季節	時期的位置	完掘した時点のピットのサイズ（約 cm）			時期的決定の根拠となる第一次埋没土の内部や上面の遺物		編年上の資料にした土器個体
					現口径	深さ	床面の直径	土器	石器	
P－1	3	A′の大ピット	冬	加曽利EI	150	80	220	3図－1.2. 4図－5.7.8.9.	5図－3.5. 石皿	4図－1
2	子，孫	A－4 P－2	春以降	加曽利EI	不明	不明	250	6図－1.2.3.7図－2 5.8図－1.5.6.10.11.	磨石	7図－1
3	2	A－1 P－1	春以降	加曽利EI	135	20	150	9図－1	なし	9図－1
4		A－1 P－4	春以降	不明	110	35	120	なし	なし	なし
5	1	A－1 P－2	冬？	不明	130	60	155	なし	なし	なし
6	2	A－5 P－1	冬	加曽利EI？	120	70	180	なし	なし	10図－8
7	1	A－2 P－2	冬	加曽利EI	100	110	140	11図－6	なし	なし
8		A－6 P－2	春以降	加曽利EI	170	上 100 下 125	上 170 下 190	12図－2.4	12図－6.7	12図－2
9	3	A－3 P－1	冬	加曽利EI	100	130	220	13図－1．2．3． 14図－5	なし	13図－4
10	1	A－3 P－3	春以降	加曽利EI	130	120	170	15図－5	なし	14図－1
11	1	A－3 P－2	春以降	加曽利EI？	175	50	130	なし	石皿	15図－1.2 10図－1
12	1	A－6 P－1	春以降	加曽利EI	100	90	150	17図－4.5.6.8.	なし	なし
13		A－2 P－6（新）	春以降	不明	115	65	140	なし	なし	なし
14	2	A－2 P－3	冬	加曽利EI	105	80	195	19図－3.6.	なし	18図－1 19図－2
15	1	A－2 P－6（旧）	不明	不明	?	35	?	なし	なし	なし
16		A－1 P－5	春以降	阿玉台新式	不明	90以上	180	20図－1 21図－1．2．3	なし	20図－1
17		C区 P－2	冬	加曽利EI	110	110	210	21図－4 22図－10	なし	21図－5 22図－1
18	1	C区 P－1	冬	加曽利EI	175	160	250	23図－1．24図－ 1.2.3. 25図－1.2.	なし	なし
19	1	C区 P－3	冬	加曽利EI	150	140	170	26図－1．2 27図－1.7.	なし	なし
20		C区 P－4	冬	不明	130	30	120	なし	なし	なし
21	1	D区 P－1	春以降？	不明	90	75	130	なし	なし	なし

第1節　ピット廃絶のパターン

ピットを発掘する際に内部から掘り上げる土つまりピット内の充填土は，ピットの壁面崩壊とその周縁から崩れこんだ土である。だから完掘したピットはその原形を保っている筈はない。原形を推察する手がかりになるのはまっ先きに埋りその後の外力をうけにくい部分つまりピット下位壁面と床面ということになる。従ってピットの形状を述べるには，完掘したピットのどの部分が原形に近いのかを指摘することが前提となる。端的にいえば，ローム面にあらわれた開口部から完掘して，大きさや深さなどについてこと細く述べてみてもそれはピットのナレの果の姿にすぎないのであってピットの原形をしのぶ程度の意味しかもたないし，崩れやすい「袋状」の形状から考えても原形に近いピットなどあり得るとも思われない。ピットが「袋状」であったかどうかを判定するために，今の形状と充填土の状態を仔細に見ようとしたのが今回である。

ピットの壁面を形成するのは，黒色土の下に黄色の七本桜軽石層，今市軽石層，褐色ローム層（小川スコリア層の薄層を挟む）で，一括して「田原ローム」と呼ばれる部分である。七本桜，今市両層は粒状（豆粒から拇指大）でボロボロと崩れやすい。この粗粒質の壁面が空間に露出され外圧を受けたため本遺跡のピットの崩壊はとくに著しかったといえる。このように壁面の土質の関係で短時間しかピットの原形を保持できないことが，ピットのつくりかえを頻繁にさせ結果的には後述のように「使い捨て」をくり返えしピットの総数を累加させた一因とも考える。ともあれ，本遺跡のピットが原形にほど遠い形状に崩壊するのは壁面の土質が外気の影響をうけやすく，きわめて短時間に崩れてしまうことに大きな特徴がある。

ピット埋没の一般相は「自然的埋没」である。それは連続的に進行するが，第1次・第2次・第3次埋没の三段階くらいに大別できる。これらの段階は層順によるものだが，それぞれの段階はむしろ「時間的経過」の長短に意味がある。ピットがこのように崩れやすいのは「袋状」の形状のためである。開口部が小さく床が広い円堆台の形状はそれが空洞であるが故に外圧に弱い。壁面がピット空間に崩れこんだのは内部が空洞だったからで，使いすてられ外気に触れて放置されていたからである。すでに繰り返えし述べてきた埋没過程を整理してまとめてみる。

1．ピットが空洞状態で廃絶される。子ピットを伴う場合はそれも空洞。床面に密着した状態での遺物はない。「埋納」したなら遺物はウキにならないし，その包含層が外気の影響をうけた薄層になる筈はないからである。ピット内の充填土を見ると廃絶の時点ではピットは「袋状」の原形であったといえる。崩れ始める出発点は原形にきまっているが，そういう意味で原形というのではない。つまり形状から見ればまだ充分使えるピットを捨てているのである。空洞状態で使命が終った，まだ使える形状なのに捨てた，ということは貯蔵物の中味をとり出したので〝用済み〟になったことを意味する。

2．次の段階は第1次埋没である。これは三大別できる。一つは10～20cmほどの漸移層であるケースだ。P－3，P－17などの床面被覆土がこの事例である。土質は床面の褐色ロームと壁面の黒色土や七本桜・今市層との混土層でその上部の混土層より粘質で褐色がかっている。この層は上面がほぼ平担であまり厚くない。P－17の項でこの層の解釈について〝空想〟を書いた。それを要約して述べる。この層を形成したのは霜だろうという推理である。平担で薄く床

面を傷めて壁面上部の剝落土と少しづつ混ぜ合わす作用は自然の営力として考えると霜柱がいちばん適合する。〝平担で薄い〟層はピットの壁面崩落が少しづつしか起らなかったことを示している。土が量的に少いことは剝落する期間が時間的にそれほど長くなかったことをも意味している。真冬に廃絶されたピットが床面を外気に曝し春に至るまでの，そして本格的崩落が始まるまでの「暫時」なのである。

二つ目のタイプは床面を直接に黒色土・今市軽石粒の混土層が被覆するケースで，これ以降の第２次埋没と区別がつきにくい充填土だ。Ｐ－３，Ｐ－11など類例が多い。継続的な壁面崩落が起る訳で，前例のように空間に露出された壁面が凍結によって固定されない時期の廃絶である。廃絶と同時に壁面崩落が進行するから，第１次，第２次のように分けにくい。連続的なピット空間の埋没である。この種のピットには遺物が少ないのも埋没がかなり早いため〝ゴミ穴〟として廃棄物を投棄するのに不向きであったことを示唆しているように感じる。廃絶されたのはいつか。それは壁面崩落が急速に起り得るに足る水分が充分に供給され得る時期，つまり春先きから夏にかけてであろう。

三つ目のタイプは開口部・上部壁面が直接に床面を被覆するケースで，その土質は陥没して雪崩こんだままの状態を保つため外気の労力による攪乱がなく，今くずれこんだかのように〝新しい〟感じである。Ｐ－18の床面被覆土がその典型的な事例である。巨大なピットに見られるが類例は少ない。このピットの場合は開口部北側をその一方だけ踏みこわしただけだった。大きいピットが口を開けたまま放置されていると人が落ちたりして危険だから，わざとこわしたのなら他の部分ももっと徹底的にこわせばよさそうなものだがそれをやっていない。この土の上の充填土からかなり土器片が出ているから破棄物投棄用のゴミ穴として再利用したためでもあろうか。「わざと」か「事故」かは論の分れるところである。だが〝形状から見ればまだ使える〟と見られるピットをわざと捨てるのだから，「事故」で壊れたから捨てたとは考えにくい。廃絶後はそのまま放置して自然的な埋没にまかせるのが普通なのだから「わざと」踏みこわすのはむしろ特殊なケースだ。「わざと」らしいのは，これだけの大ピットなら円堆台のピット空間でも中・小クラスのそれよりは外圧に強い筈で，その辺にも「わざと」を感じる。

これらの第１次埋没の仕方の違いは充填土の質でわかる訳だが，この充填土で覆われた部分だけが壊れやすいピットのほぼ原形をとどめる。ピットの形状を推察する唯一の手がかりである。

３．第１次埋没の進行中か終了直後に破損した土器，石器，礫などが投棄される。必ずしも投棄ではなく原開口部の崩落に伴う「混入」であることもあり得る。遺物はすべてウキであった。「埋納」を示す事例はなかった。そもそも埋納とは何か。墓拡として廃絶したピットを再利用したための副葬品だというのか，貯蔵物を盛ってピットの床面に置いたというのか。埋納は人為的に埋めるのであるから充填土が〝人為的〟に埋められた立証が必要だ。本遺跡の今回の発掘例では，ピットは空間に放置された結果〝自然的〟に埋没したものであってわざわざ「埋納」したものはなかった。土器に貯蔵物を入れていたものであったとすれば，それを取り出して後に空の容器だけ元の位置におくのはおよそ無意味である。「埋納」は他の遺跡ではあるらしいので後でもう一度ふれてみたい。

遺物の投棄は空洞状態のピットには行われていない。第１次埋没開始以前には投棄しないのである。〝ゴミ穴〟として破損品や食物の残滓物などを投棄するのなら，廃絶直後からやればよさそうなものだが，投棄は必ずピットの埋没が始ってから行っている。奇妙な事実である。廃絶から投棄開始までになぜ若干の時間差をお

くのか判らない。やつらのタブーにかかわりがあるのか，投棄に「吹上パターン」のような時間的制約でもあるのか。ともかく投棄開始までに多少の時間差をおくことは一つのパターンであることを指摘しておきたい。

これらの床面からウキの遺物は正確にいえばピットの時間的位置を示さないが，ピット廃絶と遺物投棄開始とに時間的ズレがあるといっても，それは「若干」なのだからこれらの遺物を以ってピットの時間的尺度とするに足るであろう。出土状態から「共存」と断定してよいのはこれらの遺物に限る。この観点から見て「確実に共存」する遺物は別記の遺物の項でふれる数例に過ぎないのである。

4．第2次埋没が起る。大巾な壁面崩落の繰り返えしでナベ底のくぼみにピットが変身していく過程である。この過程でも断続的に遺物が投棄される。投棄は不定期であり，遺物の時間差による分離は難問。自然的に埋没するのだから投棄ばかりでなく，流れこみなどによる「混入」もあり得る。期間的にどれくらいのものか見当もつかないが，〝ナベ底〟状態はかなり続くであろう。だからこの充填土中の遺物は時間的共存という面から見るとまるでアテにならない代物である。

5．第3次埋没へと続く。くぼみが平担化する段階だ。ピット発掘の最初の時点で確認する〝現開口面〟である。この部位には意外に出土遺物が多い。それは投棄ばかりではなく，くぼみだから〝溜る〟せいではないかと思う。ここの遺物はそうした「混入」が多く，発掘資料としては役に立たない。だいたいピット内から出る遺物はすべてそうなのだが，現開口部位の遺物その中でも「最もピットとかかわりのない」遺物である。P－1やP－14などの開口部で中期の土器片と共出したのが何と前期の繊維土器片であったのはその痛烈な証拠である。この種の〝ならず者〟と床面近くの〝エリート〟を，同一ピット内の出土遺物として一括し取り扱うとすれば，それはまさにナンセンス以外の何物でもない。

このように本遺跡のピットは連続的で漸進的な自然の営力で崩壊するのだから，崩れに崩れたナレの果ての姿をとらえて，壁が垂直だの開口部が楕円形だの形状が〝皿状〟だのといったところで無意味である。ピットのもとの形は何か，それは判らないというべきである。ただ充填土が壁面をどう剝離されてピット空間内に位置しているかを頼りに推察するのみである。その結果，「袋状」が崩壊するとこういう埋り方になるだろうとする推論を得た。貯蔵穴は蓋をして使う筈である。大きい入口では蓋はしにくい。貯蔵穴（そうでないとする解釈もいろいろあるらしい）なら「袋状」の形態になるのはむしろ必然で，本遺跡で今時の調査例の全ての原形は「袋状」であろうと解釈できるのはこれに符合している。ピットについての記述の中で，それぞれのピットがいかなる過程で崩壊していったかを充填土の在り方を通じて分析し，その原形は「袋状」であろうことを裏づけた積りである。本遺跡の第1次，第2次発掘調査により都合81基の袋状土拡が発見された。それについて発掘担当者の塙静夫の報告を引用すると，

「（第1次）発掘調査によって発見された遺構はすべて袋状土拡であり，……総数43基であった。もっとも中には袋状を呈さないものもあるが，構築時には袋状を呈していたことは，土拡内の土壌によって明瞭である」（註1），

「（第2次調査で発見した45基の土拡の表を掲げて）上表からみると，袋状を呈する土拡はP_2……の13個にすぎないが，明らかに袋状土拡であったと思われるもの，調査中に土拡の切り合いが甚だしいために崩壊し，図面作成前に姿を消してしまったもの等があるので，これ等を含めて個数を示すと，それは38個になる」（註2）。

さらに，第3次調査で1，今回の第4次調査での21基を加えて，都合 103基の発見例ということになる。今回の調査で今市層上面（七本桜層は耕作で消失）に視認したピット数は29，掘ってみたところ不整形のくぼみだったり後時の掘りこみだったりで誤認数が9，ピット実数が21で前述のようにこのピットはすべて「袋状」を呈していたものと考える。

ところで，この第1次・第2次調査のピットについてその数値に誤りがあるとして田代寛は『袋状土拡研究寸評』（註3）で塙を手厳しく批判した。それによると，第1次調査の「土拡一覧表に掲示された37個の土拡のうち，口径と底径の数値から袋状土拡と断ずることができるのは28個である」，第2次調査の38個については「……この6個を含んで総合しても25個が袋状土拡で，38個にはとうていなりそうにない」と断じている。「論証のない限り，口径よりも底径が小さければ袋状土拡ではない」「軽石層に土拡が構築されれば崩壊しやすいことは十分了解できる。発掘の時点において口部が剝落してしまうことも，また土拡の使用時や埋没過程で同様のことが生じたであろうことも容易に推察がつく。しかし，だからと言って全土拡がもともと袋状を呈していた論拠にはならぬ」とし，充填土壌により口部崩壊を示せという。それはそうだが，概報程度ではそこまで祥述する余裕はないだろうし，発掘担当者が充填土や遺物の出土状態を観察した上で「袋状」と判断しているのだから，細部についての疑念があればそれを一々問い質してから「見解の相違」を公表しても遅くはなかったのではないか。塙はもとより海老原・常川もここ梨木平遺跡の発掘担当を通じ，体験的にピットの在り方を理解し分析している積りで「見解」を述べているので，その辺の共通理解をもってほしい。脆い梨木平のピットを実見した上で。既述したように，今回の調査ではピットの充填土を観察し，埋没の過程を追求した。その結果，廃絶後のピットは壁面崩落を繰り返して埋没するのだから，「袋状」の痕跡がある程度か，むしろこの遺跡においては「袋状」の原形にほど遠い形状の方が〝常態〟とする結論に達した。従って，崩壊したナレの果てのピットは，端的にいえば第1次埋没で被覆された床面と下部壁面のみが原形をとどめるものであり，この時点で投棄された遺物のみが厳密にはピットの時間的位置を示す尺度でありそれ以外の遺物を混同してとり扱うと大変な誤りを犯すことになる，と観じた訳である。堀越正行は，秋田市下堤遺跡（富樫泰時ら）の〝貯蔵穴か，炉に関係した土の捨て穴〟と解釈されるピットについて，「遺物や焼土・炭化物等を含む土層は，人為的な投棄と自然的な流入堆積によって形成されたと考えられる以上，それは使用が放棄された開口状態の小竪穴の堆積閉塞過程を示すにすぎず，フラスコ状小竪穴が掘られた本来の目的，そしてその使用状態は示していない」（※），と述べている。この指摘は，今回の梨木平調査におけるピットの在り方にもよくあてはまる。端的にいえば，ピット自体が本来もっていた機態と廃絶後に投棄された遺物や残滓物とは何のかかわりもないのである。ピットには，貯蔵穴だけでなく他の性格をもつものもあるらしいが，「群在」し「袋状」を呈するピットにはそれ自体の特異な性質があると解する。

※「小竪穴考(1)」堀越正行，昭和50年5月『史館』第5号

2節　子ピットの機能

今時の調査で，子ピットを持っているピットは次の15個である。（　）は子ピットの数。

P－1(4)，P－2(2)，P－3(2)，P－5(1)，P－6(2)，P－7(1)，P－9(3)，P－10(1)，P－11(1)，P－12(1)，P－14(2)，P－15(1)，P－18(1)，P－19(1)，P－21(1)

中でもP－2は子ピットに加えて孫ピットを持っていた。これら子ピットの共通点を抜き出すと

1．親ピットの床面で壁に接するか，ごくその近傍に存在する。

2．充填土の観察により，親ピットの第1次埋没と命運を共にしている。廃絶時に親ピットと同様に空洞状態にあり，親ピットと〝同時開口〟していた。

3．形状は「円筒」か「袋状」。壁面・底面とも凸凹なくきれいに削りこみ，端的には親と〝相似〟である。

4．親ピットの大小にあまり関係なく設置し，その個数も一定しない（1～4個）。

5．壁に接した子ピットは親ピットの中央部へ中軸が傾斜している。深さは一定しない。

6．複数のピットは接触したり切り合ったりはしないが，配置は不規則である。

これらの共通点からまずいえるのは，ピットにとって子ピットは不可欠なものではなく，きわめて便儀的に設けられた存在である。親・子共に「空洞状態」で廃絶された事実は子ピットが柱穴や水ぬき穴などではないことを示している。子ピットの空間そのものが利用されたからその終末は「空洞」になったのであろう。底面を平担化したのはその空間を充すものが「安定」を保つ必要性からきたもので，端的にいえば親ピットと同様に「貯蔵」機能をもっていたことを示唆している。

壁ぎわに掘りこんだのは，狭い親ピットの内部で作業するのに，床面の真ん中では不都合であったためで，その位置は自然発生的に決められたのであろう。単に，貯蔵量を増やすためなら，子ピット構築などという面倒な手間をかけてピット空間を拡大するよりは，新規に他のピットを構築した方が合理的である。子ピットが作られているケースとそうでないケースとがあるのは，子ピットに或る種の機能が備わっていたからであり，狭いピット空間での面倒な作業で構築したのには必然的な理由があったのであろう。子ピットを持つピットは他のピットとは異った貯蔵機能があった。子ピットが果した役割は何か。それ自身が特異な貯蔵機能をもっていたのか，親ピットの補助的な機能をもち親・子のコンビの働きで貯蔵の機能を果したか，それとも他にもっと特別の意味があったのか。今回の調査例では，同じ子ピットでもP－18の子ピットとP－2の孫つきの子ピットは優に大人ひとりがしゃがんで入りきれるほど大きなものであった。掘った体験からいえば，親ピットの床に腹ばいになって腕が届く範囲に床面があった。これらの子ピットは「袋状」は呈するが，開口部は広く〝上狭下広〟のフラスコ状にはならず，この点から「蓋」はしないで使うことが予想された。これらの大きな子ピットは親ピット自身が巨大であるためにそうなり得たのかも知れないが，他の小さな子ピット（単独や複数）とは性質が違うのかも知れないのである。体験的に追記すると，真夏の発掘であったために気づいたのだが，内部がヒンヤリと涼しいのである。床面の空気は対流しない。冷めたい空気は沈んだままで動かない。貯蔵物でいっぱいになったピット空間の中でも最も空気対流が少く「常温」を保持しやすい部位がこの大きな子ピットなのだった。つまり変質しやすい物資を納

入する「特別室」ではなかったか，とする想像である。子ピットは親ピットに比べて極めて収容量が少ない。貯蔵されたものは，少量で変質をきらう〝貴重品〟なのだと思う。それが何であったか今は想像もつかないが，貯蔵物の堅実類とは違って根茎類のようなものとか，いささか大胆すぎる仮説だが「種子」に類するものとか，とにかく一般貯蔵物とは別類の貯蔵物であったのではなかろうか。孫ピットの存在に至っては殊に「特別室」の感が深い。

浅く小さい子ピットは何か。P－9は4個，P－1も4個あり，他は1～2個だ。口径40cm前後，深さも20～60cm程度で浅い。〝特別室〟としてならいささか空間が狭すぎる子ピットもあり一様には片づかない。これらの子ピットは親ピットの貯蔵機能とタイアップして補助的な役割を果したのではないか。補助機能とは，こうした小子ピットをもつ親ピットがそれを持たない他のピットとは異った貯蔵物なり貯蔵方法なりの機能差をもち，それを具現する上に必要であった働きである。親ピット廃絶の時点で空洞であった子ピットに「柱穴」の働きはない。冒頭の共通点の箇所で述べた壁ぎわの子ピットが中央部へ傾斜しているのは「柱穴」だったせいではない。親ピット床面に座って壁ぎわに子ピットを掘れば，掘りやすい外壁側がふくらむのは必然である。「水抜き穴」説も問題にならない。ピットが〝群在〟していた地区はきわめて排水がよく，例えば連日の雷雨でも〝開口〟状態で放置されたピットに水が溜ることはなかった。貯蔵中のピットは蓋をして密閉する訳で〝水抜き〟するほど水が流れこむ筈はないし，仮に「息抜き」用の通気孔を設けたために浸みこむ雨水を溜める穴だとしても，そんなに水が入っては貯蔵物が変質してしまうから理論的に考えられない。ピットの貯蔵物は，取り出すまでは密閉しておき，一括して取り出すのが「梨木平型」である。ピットに屋根を架すなどとは到底考えられない。小子ピットは「柱穴」でも「水抜き穴」でもないと推断する。

子ピットは親ピットへの補助機能があり，そのコンビの働きで貯蔵機能を満足する，と考える。それは貯蔵物自体にかかわりがあり，ピットの大小にさほど関与しないといえる。要約すると，子ピットには機能上二つの側面が考えられる。「特別室」と「親ピットへの補助機能」である。大きな子ピットは「特別室」の感が深いが，小いさな複数の子ピットには「補助機能」を感じる。親と相似の平担な底面は「置く」ことを原則としている。だから「特別室」的な役割も含めて見るべきなのかも知れない。

3節　ピット内の遺物に関する二，三の問題

今回の調査で見つかったピットの殆んどが充填土に遺物を含んでいる。だが「埋納」でない限り，ピット廃絶後の遺物である。「埋納」と目される事例は出土状態と充填土の関係から一つもなかった。従って厳密には，ピットの時間的位置を正確に示す遺物はないのだが，第1次埋没土中かその上面にあるものはピット廃絶に最も近いからこれを指標として各ピットの時間的位置を推定し，表2に示す。充填土の質に目立った特徴がない場合は遺物の分離が難しく，折角の床面に近い遺物も際立った特色がないためにキメ手となりにくいなどピットの時期決定は困難である。

これらの遺物の在り方を通じて，遺物の性格，充填土による遺物の分離，ピットの共存立証の可否，その他の問題などについて考えて見たい。

ピット内から出土する遺物は，既述したように悉く「投棄」ないしは「混入」によるもので「埋納」された例はなかった。遺物は，土器，

石器（石皿，磨製石斧・打製石斧，磨石，凹石など），炭化物（木片，クルミなどの木の実など），礫（河原石・山石，小片）などだが，土器・石器などの人工遺物の殆んどは投棄である。土器・石器はすでに投棄以前に毀れており，大部分は破片で接合できるものは僅少である。器形がわかる土器個体も部分的に欠落箇所がありピット内にその〝カタワレ〟がないところから，投棄の当初から破損品であったことがわかる。石皿・磨石・凹石などの石器も多くは破損品で，使用中に相当数が割れることを感じさせる。毀れた日用品を廃絶後のピットに投棄するのがこの遺跡のパターンだが，割れた石器や土器の個体には接合できないものが多い。そればかりか後述の〝共存立証〟の例でとり扱った土器片のように3～4個のピットから分散出土する例がある。それは既に毀れてしまっていた日用品を一括投棄する時点ではそれらは既に〝分散〟状態にあったことを示唆する。端的には，廃絶されて口をあけているピットに，「適宜に，破損した順に放りこんだ」のではなく，「すでに毀れていたものを溜めておいて，一括して投げこんだ」という感じが強い。投棄はピット廃絶直後ではなく，第1次埋没が始ってから行なう。単なるゴミ穴だったら，〝空洞状態〟の方がより有用なのだが，埋没が始らないうちは投棄しないのは興味あるクセである。

充填土による遺物の分離はなかなか困難である。第1次埋没土が，ピットの冬季廃絶に伴う〝霜の堆積〟層であれば比較的わかりやすいが，春以降の廃絶であれば壁面崩落が激しいため区別がつきにくい。P－18の第2次埋没土中の土器片と床面ウキの土器片の一片が接合できた。床面ウキの土器片をどう充填土で区分するか。難しい問題である。この第2次埋没土の中に前期の繊維土器片が混入している。ピット開口部壁面崩壊の際，黒色土中に包含されていた土器片が土と共に入りこんだのである。梨木平遺跡は前期・中期の重複遺跡で，既存の包含層にピットを切りこむためこのような混入が起ると考える。P－17でもピットの現開口面で前期土器片が出ている。同様の混入である。土器形式から見て画然と分離されねばならない阿玉台式の古式の方が加曽利ＥＩ式と第2次埋没において共存するのも，既存の阿玉台文化層にピットを切りこんだ結果，壁面崩落によってこれらの土器片は〝後から投棄された加曽利ＥＩ式土器片〟と「混在」したわけで，同じピットの充填土から共出したからといって「共存」したとはいえないのである。むしろ〝壁面崩落〟なり〝後時の混入〟の遺物の方が充填土中の分量としては多い場合もあり得るから，いかに〝廃絶直後の投棄遺物〟を区分するかが重要である。表2に示したように，ピットによっては殆んど遺物がなく時期判定の手がかりがないものも多い。投棄が廃絶ピットに一様に行われていないのも注意したい事実である。

ピットを，原則的に〝1年使い捨て〟と見る以上，同時期の加曽利ＥＩのピットであってもそれらが全て共存するとは考えられないが，相互の位置関係や内部の出土遺物によって共存の有無を検討できる事例がある。加曽利ＥＩの大型浅鉢の破片がP－19の床面ウキの状態で出土した。この土器片は同ピットの第1次埋没に伴って投棄されたものである。その土器片のカタワレがP－8から出土し接合できた。更に，P－14からも同じ個体片が出土したし，P－9からも同個体らしい破片が出土した。P－8とP－14との破片は第1次埋没に伴うものではなく，正確にはP－19と同時期の投棄ではなさそうで，この三ピットが共存するとはいいきれないが，P－19が廃絶されたとき，P－8とP－14とは既に廃絶されていたか同時期の廃絶であったか，ということになる。厳密には疑念は残るが，この三ピットは同時期の廃絶つまり共存の可能性は濃い。

明らかに共存し得ないのは，〝切り合い〟の状態にありしかも阿玉台と加曽利ＥⅠという時間差をもったＰ－17とＰ－16の事例である。Ｐ－６・Ｐ－７・Ｐ－８の近接したピットの場合も既述したようにＰ－６とＰ－８の旧ピットは少くとも〝壁面接触〟という事実があるから両者は共存し得ない。

ピット内から出土する土器は全て「投棄」か「混入」であることは各ピットの出土状態・充填土の状態の観察により明らかであることは既述した。Ｐ－１の底部を斜め上に向けて出土した土器個体，Ｐ－18の床面壁ぎわに〝寄りついた〟ように出土した土器，Ｐ－９の子ピット下位に倒立して出土した小型土器など，いずれもこれらの土器が投棄されたことを示している。礫や石器破片についても，投棄か開口部崩壊に伴う「混入」であることが予想され，敷設や「埋納」されたと解される遺物は皆無であり，この観察が「埋納」を否定するための〝偏見〟でないことは出土状態の記述を通じて主張した積りである。今回の調査で確認したピットは原則的には全て「自然の営力」によって埋没している。「埋納」は人為的に埋めるのだから，この点から見ても充填土を一瞥してピット内の遺物が「埋納」などであり得ないことは瞭然としている。近年の調査例で，「鹿島神社裏」「添野」「浅香内」などのピットの埋没状況を本遺跡の場合とを比較してみると，廃絶後のピットはいずれも〝自然的〟に埋没しており「土器を埋納」した事例はなかった。しかし，その稀少な「埋納」の事例を「不動院裏遺跡」（註１）で田代寛が報告しているので検討する。「Ｆ．17」という土拡で，「トータルとして復原可能の土器が10点出土して」「出土状態も17番の土器が11，16番と復原不能の土器の上にあって，下底が上拡底の25cm程上であったことを除けば，出土深度に大きな差はない。西壁壁近くを除いて，殆ど土拡一杯に並んでいたという感じである。こうしたことから，これら土器は廃棄による集積ではなく，何らかの理由による納入と思われる」。これらの土器は加曽利ＥⅠ・大木８ｂで編年的にも出土状態からも共存し得ると考えられる好資料である。共存することは田代の報告で納得できるのだが，出土状態を分析しての「納入と思われる」は賛成しがたい。充填土は「黒褐色で，口部はブルトーザーで踏まれたため堅かったが，中は柔かい。大小の礫をかなり混え，炭化物，焼土の混入もあった」という。これしか記述がないので断定しにくいが，〝自然的な埋没〟みたいだ。実測図を見ると西側壁面が崩落して壁は垂直になっているし，現開口部の北側もかなり崩落している。これはこのピットが自然的に埋ったことを示しているし，報文の記述や実測図中の記入のように土器は〝重なり合い〟床面からウキである。これらのデータはいずれも土器は「納入」などではなく「一括投棄」であることを示している。「納入」された土器を口を開き放しのピットに放置して「自然の営力」にまかせて埋没させることはあり得ないし，仮にそうだとしても床に置いた土器が25cmもウキ上る筈はない。一括投棄したからこそ重なり合い床面からウキの状態になったのである。

更に田代は「浅香内８Ｈ遺跡」（註２）でも「Ｆ２」なる土拡で「納入」か「埋納」を示唆する報告をしているので引用する。

「（略）大小あわせて８個体の土器が出土した。これらは土拡底部上５～10cmのところにあたかも環状に置かれたものが横転したように出土した。（略）。これら土器が土拡底から５～10cm上に位置していたのは，倒れる時に相対的浮上がもたらされるためと考えられる」。やはり床面ウキである。結論を先にすればこれも「投棄」であって「埋納」ではないと考える。「埋納」したなら当然〝人為的〟に充填土が推

積している筈だが「充填土壌のファシス」は示していない。このピットは実測図で見るとあまり崩れていない。〝人為的〟に埋めたのなら土器は床に密着している筈だがウキである。土器がひとりで〝浮上〟するわけはない。廃絶されたピットに土器を何個体か「納入」し埋めもしないでそのまま空間に放置することはあり得ないことは既述したが，仮に「納入・安置」されていた土器が〝人為的〟あるいは〝自然的〟に埋没したというのならそれこそ「充填土のファシス」を示してこれを実証すべきであろう。どうもそうではないと考える。床面ウキの土器が殆んど横転しているのは，ピット廃絶後に暫時を経過した床面に薄層が推積した時点で，一括投棄したからである。底が小さく背が高い深鉢形の土器を放りこめば横転するのに決っている。このピットは復原されて〈縄文人展〉（註3）に展示された。展示はもちろん田代の責任ではない。その時に受けた珍妙な印象についても附記する。ピットの床面に出土状態に即して土器を配置し，ドングリやクリなどの木の実を床面にまき散している。木の実は少し土器の中にも入れてある。早い話が土器は木の実の中に埋れているのである。土器に木の実を入れて安置したとする主張ならまだしも，木の実で土器群を埋めた展示によって何を主張しようというのか。何のために土器があるのか説明にも解釈にもなっていない実に理解に苦しむ展示なのだった。あの展示は出土状態分析の誤りだろう。梨木平におけるピット廃絶のパターンを通じてこう解釈する。ピットが貯蔵穴である以上，廃絶後は空洞になる。そこへ何の理由かわからないが土器を一括投棄する。「埋納」や「納入」ではない。だからこれらの土器はピットの貯蔵機能には直接的な関係はない。〝木の実を土器で埋めた〟ような展示は，8個体も大量の土器個体が出土したためにそれに惑わされて，ピットと土器とを結びつけようとしたための誤認であろう。

「埋納」を思わせるピットの事例は「添野」（註4）にもある。「土拡34」がそれで，充填土の断面を見ると，ピット北側から流れこんだ土が斜めに推積している。その南壁ぎわに数個体の土器が出土している。調査者の中村紀男・橋本澄朗の記述によると，「埋没土の少い南西へあたかも転りこむようにして数個かたまりあるいはおしつぶされるような状態で重なりあって出土している」とある。廃絶後のピットが幾分埋った時点で，一括投棄された土器が，埋没進行中の充填土の斜面を転り落ちた結果，記述のような状況に到ったものであろう。「埋納」どころか「一括投棄」の好事例である。

以上の類例をあげたのは，ただやみくもに「埋納・納入」を否定しようというものではなく，それを立証する根拠に乏しいという事実を指摘したかったからである。従って，栃木県下の縄文中期の貯蔵穴にあっては，目下のところ，土器が「埋納」されていた事例はないと理解しておきたい。

註1「不動院裏遺跡」栃木県立黒羽高社会部，昭和49年3月。

註2「浅香内8H遺跡」栃木県立黒羽高社会部，昭和50年2月。

註3〈縄文人展〉主催朝日新聞社，昭和50年4月19～5月13日。新宿・小田急デパート。

註4「添野遺跡の研究」

4節　ピットの廃絶と群集

本遺跡で今回発掘したピットは，第1次埋没の在り方により，冬に廃絶されたものと，春かそれ以降の暫く間に廃絶されたものが考えられることは既に述べた。それは，共同体の冬季の備貯を全部取り出してしまったための廃絶であったろう。「袋状」の形状は外圧に弱く開口部は崩壊しやすい。ピット内の貯蔵物を頻繁に取り出すのは崩壊を招きやすくピットの貯蔵機能を失わせることにもつながる。穴の中に貯蔵する理由は何か。まず多量の備貯食料の置場がない。その変質を防ぐためには外気を遮断する必要がある。共同体の生存にかかわる冬の食料が盗まれたり散逸したりしてはならない。ピットに貯蔵するのはいわば〝生活のチエ〟に他ならなかった。「共同体の備貯」と考えたのは，これらのピットが住居址に伴うのではなく一定箇所に集中することからである。ピットが群集しているのは，その地域が，やつらの生活の場（住居）に便利なところであると共に，貯蔵に適した水はけがよく穴を掘りやすい（木の根や石などが少ない）ところが前提となるが，やつら全体の大切な備貯であるだけに「集中管理」する方式が必要で，その意味での制約が〝ピットの群集〟をもたらしたと考える。従って，ピットに共同体全体用と家族毎の戸別用とがあったなどとは考えられず，備貯の食料は斉一的に一定数のピットから取り出したものと見る。〝空洞状態〟での廃絶はその斉一的でひとまとめにして貯蔵物をとり出したことを示唆するものと解釈する。貯蔵物の質にもよるが，外気に触れたり洩水があったりでは変質の原因になる。だからピットの開口部は厳重に密閉されていた筈だし，貯蔵物を〝小出し〟に取り出すのは〝共同体的な利用法〟に反するばかりでなく〝変質〟の危険を大きくすると見る。「形状から見ればまだ使える」穴を捨てたのも，このような〝共同体的な〟制約下にピットが用いられていたためではなかろうか。貯蔵物を一括してとり出す。主を失ったピットはそのままに放置され，しだいに自然的に埋れていく。これこそ本遺跡におけるピット利用のパターンである。ピットはこのように〝使い捨て〟である。大変な労力で掘り上げたピットが使い捨てられるとはもったいない話であるが，ピットの貯蔵機能が終ればやつらはそれで事足れりとするのではなかったか。〝使い捨て〟が一冬で都合いくつになったか想像する術もないが，ピットの収容量と共同体の採集能力から推定してせいぜい10個前後くらいなものではなかったか。表3は本遺跡の巨大なピットを選び，少な目に見積ったピット原体の収容量の試算値である。（註4）。ピット空間を機械的に単純な円錐台として計算したもので，深さ 150cmはやつらの身長から土を掘り上げられる一応の限度と見積ったもの。表に掲げた巨大なピットはそれぞれ開口部崩落と後時の攪乱により現開口部位の削取があると見ると実際には 150cm以上の深さはあった筈である。データは比較的崩落が少ないピットの褐色ローム中の〝下位壁面〟を対象にした。その円錐台の形状をそのまま 150cmまでに引きのばした時の推定口径を表に示した。「袋状」にもいろいろあり，フラスコ様の円錐台から開口部を円筒状に下半部を横に掘り広げる（註5）形状などのバラエティがあるから，表中の推定口径の試算値はもっと小さくなるのかも知れない。ともあれ，これら巨大ピットの試算収容量は，P－1が4.39㎥・子ピットも含めて総容量は5.027㎥，P－9が2.64㎥・子ピットを含めて総容量 2.976㎥，P－2が5.25㎥・子ピットを含めて総容量6.53㎥，P－18が4.29㎥・子ピットを含めて総容量4.59㎥。

何を貯蔵したかが問題だが，仮にドングリ1

（表3）　ピット空間の試算事例

ピット名		P－1（子ピット3）	P－9（子ピット3）	P－2（子ピット1.孫ピット1）	P－18（子ピット）
データ（cm）	上面の全周 ℓ_1	600	470	700	640
	床面の全周 ℓ_2	680	640	820	780
	床面からの高さ h_1	80	70	55	55
〝アチになる〟円錐台の体積V（cm³）		2610989.89（2.61m³）	1779244.98（1.73m³）	2533269.22（2.53m³）	2213473.89（2.21m³）
深さ 150cmとした時の推定口径（cm）		168.70	87.76	156.82	126.74
深さ 150cmとした時の推定体積V（cm³）		4391482.76（4.39m³）	2635669.51（2.64m³）	5250955.26（5.25m³）	4286217.68（4.29m³）
子ピットの体積 v（cm³）		a 468152.86（0.47m³）	a 125334.51（0.13m³）	子 1212654.56（1.21m³）	298627.72（0.30m³）
		b 57324.84（0.057m³）	b 160985.22（0.16m³）	孫 70187.32（0.07m³）	
		c 107484.07（0.11m³）	c 45836.62（0.046m³）		
親子ピットを合計した推定収容量		5.027m³	2.976m³	6.53m³	4.59m³

粒が周りのすき間も含めて2cm³としても，P－1が約 250万個・P－9が約 150万個・P－2が約 325万個・P－18が約 230万個となり，この数の木の実を手作業で集めるとしたら大変な労力を要するわけで，いかに〝秋の稔り〟が潤沢であっても共同作業なければ採集しきれるものではなかろうし，木の実をぎっしりつめたこのような巨大なピットがそう多くは共存し得ないだろうと考える。

ピットは大・小いくつかが組合されて使われたのであろう。その差違は貯蔵物が何かによって起ったもので，恐らく任意に掘り上げた結果ではなかろう。前述した巨大なピットを構築するには相応の理由がある筈だから。こうして，連年の〝使い捨て〟によってピットの数は累加する。「群集」は〝使い捨て〟の結末であり，圧倒的な個数のピットが大共同体のために斉一的に使用されていたことはあり得まい。ピットが冬季食料の貯蔵庫であり，本遺跡のように冬から春に中味を取り出して「廃絶」したのであれば，ピットはきわめて短命であったといえる。年を越して貯えた食料を初夏ころの食料採集の端境期までに食い尽すとすれば，その後の空洞状態のピットはそのまま放置する方が自然である。場合によっては，壁面崩落を防ぐ手段を構じて次の使用に備えるかも知れないが，原則的には，ピットは「1年で更新」するのではないかとする見解をもった。

このような群集ピットの出現は縄文中期特有の現象だといわれ，阿玉台・加曽利ＥⅠ期を盛時に前期末から後期末ごろまで継続するという（註6）。一見，唐突にも見える食料貯蔵庫の出現は二つの側面がある。つまり，共同体の生活様式の質的変化と，備蓄が可能なほどの〝食料〟をもたらした気候の変化だ。縄文人の一年の食生活で，冬季はケモノや小鳥類を除けば植物の葉・茎・根や果実，魚貝類などは得にくい状況にある。その冬を食いつなぐ備貯として考えられるのは，収量が多く保存しやすい堅実類のトチ，クルミ，クリ，ドングリ，ハシバミなどである。縄文中期はその末葉までは温暖な気候がつづき，広く照葉林帯が列島を蔽い，高原

にも雑木林が繁ったという。藤森栄一は八ヶ岳山麓における縄文中期の遺跡について〝雑木林の中での生活〟を説き「植物性食料の積極的利用」が存在したことを指摘している。

温暖な気候によって秋には豊富な堅果類がもたらされた。これがピットによる食料の備蓄を可能にしたのだが，同時に食料確保によって飢饉の脅威から免れた共同体の暮しにも変化が起ったことは想像できる。田代寛が予想したように，共同体の中で小家族単位の生活が起り得たか（註7），にわかに賛成はできない。共存し得ると判断できるピットはいくつ？その総容量から食料の備貯量を試算すれば，それで養い得る共同体の人数を推定することができよう。

本県の袋状土拡の遺跡で，群集した事例はすべて阿玉台式から加曽利ＥⅠ式期にかけてのものでその前後の時期は土拡は存在してもその数量は少い。顕著な遺跡としては，坊山（矢板市）鉢木（黒羽町），金井台（芳賀町），鹿島神社裏（鹿沼市），不動院裏（黒羽町），添野（芳賀町），浅香内（黒羽町），（以上註8），それに本遺跡の梨木平などがある。これらの遺跡の，ピットの群在性を見ると，住居址などに伴ったピットや住居址に近接して発見されたピットなどとは異質のものではないかと考える。ピットが群在するということはそれだけで重要な意味をもつもので，戸別の貯蔵穴が便利のよい場所だったのでたまたま〝群集〟したなどという生やさしいものではなく，群在するピットは共同体全体の厳しい規制と使用上（備貯食料の取り出し）に制約とを受けたのだと思う。浅香内遺跡で，群在ピットの間にあった住居址を「管理小屋」と解釈した田代の思考は（註3に同じ），両者の共存という論証が弱いのでそのままには信じがたいが，群在ピットを共同体の規制におかれるものだとする思考の方向は正しいと考え賛成したい。阿玉台期から加曽利ＥⅠ期の，気候の温暖化によってもたらされた堅果類の多種が共同体の生活様式に変化をもたらし，その一つの具現が〝群在ピット〟の存在であった。〝群在〟が具体的に何個のピットが共存したのかがつかめないが「使い捨て」によりピット数は累加的に漸増し，その総数はおそらく共在したピットの実数の何倍にもなるであろう。〝切り合い〟や〝接近・接触〟や〝重複〟などのピットの在り方は，その部位が高乾で排水のよい斜面で，穴を掘りやすいなどの貯蔵に好適な条件を備えていたこともあるが，さらに共同体の備蓄食料の一括管理という場所的な制約も働いていたのではないかと推察する。

註1　「梨木平遺跡」（調査概報）昭和47年5月　上河内村教育委員会刊

註2　「梨木平遺跡」（調査概報）昭和48年3月　上河内村教育委員会刊

註3　「浅香内8Ｈ遺跡」昭和50年2月，県立黒羽高社会部刊

註4　円錐台の体積を求める一般式。円錐台の体積をＶとする。ピット空間が円錐台として，大きい円錐体から上部の小さい円錐体を取り去った形とすると，大きい円錐体の高さh_2・半径r_2，小さい円錐の高さh_2-h_1・半径r_1（h_1は円錐台の高さ）。大きい円錐の体積をV_2，小さい円錐の体積をV_1とする。

$$V=V_2-V_1=\frac{1}{3}\pi r_2^2 h_2-\frac{1}{3}\pi r_1^2(h_2-h_1)=\frac{1}{3}\pi\{r_2^2h_2-r_1^2(h_2-h_1)\}$$

註5　「鹿島神社裏遺跡」前掲註に同じ。川原由典の記述の項「遺構についての問題点」。

註6　「添野遺跡の研究」昭和49年3月，下野古代文化研究会刊。塙静夫の記述の項「縄文時代の袋状土拡構築時期」から引用。（本県の既発見の土拡構築時期をみたとき，最も多いのは阿玉台式から加曽利ＥⅠ式にかけてのものであり，加曽利ＥⅡ式，ＥⅢ式と漸次減少の傾向を示す。）

註7　「袋状土拡の一側面」田代寛，1971年12

月，鹿沼史林第11号。……群在するものは住居単位を超えた共同体によって，点在するものは家族毎に構築されたと思うのである。このことを換言すれば，食料の貯蔵には食料の貯蔵には共同体として行なうものと，家族毎に行なうものとがあったということになる。

註8　「坊山遺跡第2次発掘調査報告」海老原郁雄，昭和46年3月刊（昭45年度高校社会科紀要）。「坊山遺跡緊急発掘調査抄録」長嶋元重，田代寛，1968年8月（栃木県考古学会誌第1集）。「鉢木遺跡の袋状土拡」田代寛，1968年11月刊（塩谷郷土史館研究報告第2集）。「芳賀町弁天池遺跡調査報告」宇都宮大歴研，昭和45年5月刊。

第７章　土器についての考察

各ピットの中から出土した土器について，その編年的な位置を考えてみたい。今回の調査では，ごく若干の前期の繊維土器を除けば，出土したのは中期の土器であり，その殆んどは加曽利ＥＩ式に該当する。発掘した21基のうち，加曽利ＥＩ期と考えられるピットは14，阿玉台（新）期と考えられるピットが１，不明が６であった。これにＣ区１・２号の土器群・３次調査のピットの資料も加え，本遺跡における土器の，文様上の特徴と編年上の位置について分類し検討したい。

１．ピット内から出土する土器片の特徴

ピット内から出土する土器は殆んど破片であり，個体であっても半壊したり欠損部位があったりで，埋没して以来今回掘り出されるまで全く未攪乱であったと断じられる部位での出土遺物であっても破損した同個体がないなど，当初から「破損品」を投棄したと考えられる遺物であった。投棄には時間差があり，ピット上半部では混入や溜るなどの場合もあり得るが，出土する土器や石器は使えなくなった破損品であり〝廃棄物〟であった。だから，〈使える土器でも一括して投棄〉する〝吹上パターン〟や〈何らかの目的で埋納〉したりしたものではなく，ピットそのものが廃絶された代物であったと共に，内部に入れられた物体も〝廃棄物〟であった。

各ピットの項目で，個々の破片について述べたように，破片の表裏には焼けこげの跡が多く煮沸用の個体が多い。これとてもピックアップした資料だから一般的なことはいえないが煮沸用の土器は破損しやすく消耗度が激しかったことが伺われる。割れ目は粘土の継ぎ目が剝離したケースが目立ったし，割れ目に炭化物が付着したり，29図－１の如きは使用中に口縁部の一部が剝離した後も使い続け，そのために割れ目に炭化物が付着した事例もある。26図－２の浅鉢は３ヵ所に補修孔があり，ダメになるまで使ったらしいことが察せられるし，器面が焼けただれて変質し脆くなって崩れてしまうほど〝酷使〟された土器も少くない。遺物はＰ－18やＰ－19の床面ウキの遺物のように一括投棄されたケースと徐々に何度の投棄によるものとがあるが，いずれにしても〝老廃物〟であり，〈まだ使えるが捨てる〉などと勿体ないことはしていない。廃絶後のピットがまさに「ゴミ穴」であり，今時の調査例では２次的な利用はしていないことが以上の点からも推察できるのである。

２．阿玉台的な加曽利ＥＩ

各ピットの出土遺物の項で述べたように，加曽利ＥＩ式の土器であっても，雲母を多量に含むとか器面が黒ずんだ赤褐色を呈し，非常に〝阿玉台〟的なものが目についたが，器形から見てきわめて〝阿玉台〟的な土器があった。Ｐ－14出土の18図－１・Ｐ－17出土の21図－４・Ｐ－18出土の25図－１などの土器である。口縁部がほとんど直線的に外反する深鉢形で，本県における加曽利ＥＩにとっては〝本来的〟ではない器形で，理論上は阿玉台の古式から継承されてくる器形である。加曽利ＥＩの器形の主流は，口縁部が湾曲し頸部でくびれ胴部が円筒形となる所謂「典型的なキャリパリー状深鉢」で，これにも３～４種の変態があり，他にも図－１・２・３のようなスリバチ様の浅鉢や13図－３・４のような壺形や注口・袖珍土器などの特異形態に至るまで〈器形の多様化〉に彩られる時期で，土器の機能分化を示唆しているかのようだ。

〝口縁部が外反する深鉢〟もそれらの中に含めて存在はしているのだが，この器形は阿玉台の継続器形として注意すべき存在であるように感じる。P－16出土の20図－1やP－17出土の22図－1などの「末期」的阿玉台の器形がキャリパー状深鉢であっても，口縁部が鋭角に屈曲してそのまま直立する特有のものであり，加曽利EIの「典型的キャリパー状器形」の出現により跡かたもなく消失してしまう事実とは対象的である。加曽利EIは原理的には阿玉台の拘束を受けていないが，そうした風潮の中で〝口縁部が外反する深鉢〟が生き残っていくのは，技法上の伝統よりは土器の機能に基づく要因が大であるのかも知れないが，始原的な加曽利EI式における土器のメルクマールになっている点で注目しておきたい。

3．加曽利EI式の施文の種類と消長

本報告書に掲載した土器は個体を含め 177である。ピットの時期決定の証拠となるものと編年上の参考になりそうなものとのピックアップ資料とであるから，これを以って本遺跡の時期的変遷を云々する積りは毛頭ないのだが，施文におけるいくつかの傾向を摘出することはムダにはならないと考えるので，駄冗にならないよう留意しながら述べたい。

(1) 文様帯の区画

口頸部に文様の主体があり，集約されるのは加曽利EI式の大きな特徴であるといえる。キャリパー状器形はそのくびれ部か口頸部の中位に文様区画の線を引いている。文様が口頸部に集約するのは浅鉢等の器形にあっても同様である。

口頸部文様帯は，基本的には4つの単位部分に分けられ，同じ文様がくりかえされるものと別種の文様が対置・対応するものとがある。文様帯の単位区画は特に把手や突帯がある場は明瞭で，①対応する4つの把手（13図－2），②対応する2種4つの把手（32図－3），③対応する2つの把手（31図－2），④1つの把手と3つの突帯（4図－1，7図－1，31図－1）などのバラエティーがある。胴部の文様は「従」であるから，地文の縄文だけで特別に施文をしない方が多いが，口頸部の文様単位に対してつける場合もある。2本から3本セットの沈線で胴部の器面をタテわりする。基本的には4つの単位部分に分けられるが，6か8の場合もある。区画帯の内部には蛇行する沈線を垂下させる。19図－2は代表的な事例だが，この蛇行沈線は〈古々〉から〈新〉までの各土器に見られ，加曽利EI式における胴部文様の主流をなしている。

(2) 二，三の特徴的な技法

各土器についての記述で〝段差〟のある〝二重口唇〟という奇妙な用語を多用した。くびれ部に廻らした隆線に対応して口唇部に隆線を廻らしているもので，これに渦状文を併設する14図－1のような事例もあり，〝二重〟による立体的効果をはかっている。〝背割れの隆線〟も多かった。平たい隆線を貼って背に沈線を引くのである。2本の隆線が併走しているように見える。4図－7は代表例である。粗製土器に多く，「施文の省略」か手ヌキの技法であろう。縄文は地文としてほとんどの場つけている。器面調整の段階でつける場合と文様帯の構成が終了してからつけるものとがあるが，〈古々〉ないし〈古〉の土器はまっさきに縄文をつけた事例が多い。〈古々〉の例では18図－1のように，器面の位置によって施文方向を違えて変化をもたせるなど，〈余白部分の充填〉のためだけの施文でなく縄文そのものを重視している感もある。縄文の施文におけるもう一つの特徴は「萠芽的な磨消縄文」の存在である。12図－3は原体回転時に自然についた指の磨消痕が併走しており，16図－7や33図－1はわざと巾広に磨消

を行っている。自然的であれ故意的であれ，他の一面的な縄文施文とは異ったユニークな技法だといってよく，〈古々〉の段階から出現する萠芽的磨消手法である。〈新〉の段階では胴部の沈線間が平滑に磨消され，EⅡの巾広の磨消帯へと継続していくものと解釈する。

(3) 文様の種類と消長

口頸部に集約される文様にはモチーフとなる文様と副次的に余白の空白部を充す文様とがある。胴部にもいくつかの文様が施される。これらが組合わされて土器の文様は完成する。相互に有機的な関連をもつ文様を部分的に取り出して分類するのは意味がないかも知れないのだが，〈古々〉，〈古〉，〈新〉の順に配列してみることで，時期により出現したり消失したりする文様があるかどうかを追ってみた。表1はあくまで試案である。

表は文様の種類をタテ軸，土器の時期をヨコ軸として，各箇所に本調査で出土した土器の当該しそうなものをあてはめてみた。これから要約していえる施文の傾向は

① 〈古々〉・〈古〉の前半期に位置するもの……「山状の把手」・「S・逆S字文」・「渦文的曲線文」・「綾絡文」

② 〈古〉・〈新〉の後半期に位置するもの……「メガネ状突帯」・「懸華文」・「十字文」・「タテの刻線」・「組合せ直線文」・「蛇行沈線」

③ 存続がはっきりしないもの……「剣先文」・「複弧文」

④ 長期間継続するもの……「渦状文」・「波状文」

これら文様の時期区分はピットの第1次埋没を手がかりとする共存関係をふまえてあてはめたものもあるが，むしろ理論的な編年にあわせて作成したキライがある。共存資料を基にして改訂していきたいと考えている。

施文上で目についたのは，胴部に併走する綾絡文であった。梨木平の土器には胴部文様に綾絡文がつけられていることが少くない。これこそ〝遺跡の個性〟ではないかと考えたほどである。綾絡文は大木7aや下小野以来の特徴的な施文であり，本県では阿玉台の古式以来の存続だが加曽利EⅠではあまり見かけなくなりEⅡでは消失している。梨木平の資料で見る限り綾絡文はEⅠ前半期まで存在し，換言すればそれが施文されたEⅠは古いステージにあることを示唆するといえそうだ。

後半のEⅠで目立つのは文様帯の余白部を充填するタテの刻線で，ハットヤ遺跡（氏家町，39年発掘）のEⅡ式にもあり長く継続していることが知られる。新しい加曽利EⅠに特徴的に認められる文様であることを提言しておきたい。

表1　加曽利ＥＩ式の文様分折表

	文様名	代表例	古々	古	新
把手	山状の把手	31図－1	33図－1	31図－1	
	メガネ状の突帯	6図－1		12図－1	6図－1
口頸部文様のモチーフ	S.逆S字文	24図－1		24図－1	
	渦状文	14図－1		7図－5，14図－1	15図－2，25図－9
	波状文（鋸歯状文）	11図－11	33図－1		15図上－1,15図－1,11図－11
	懸華文（ダンラク文）	32図－4		32図－3.4	6図1,7図－1,13図－1
	十字文	23図－1		23図－1	11図－1（？）
	剣先文	24図－3		17図－3，24図－3	5図－2（？）
副次的文様	タテの刻線	14図－1		27図－1	14図－1
	複弧文	30図－1		4図－1，25図－7 30図－1，31図－1.2	22図－8（？）
胴部文様	渦文的曲線文	26図－1		23図－1，26図－1	
	組合せ直線文	31図－2		8図－2，31図－2	
	綾絡文	11図－10	18図－1	14図－6,11図－10,12	
	蛇行沈線	13図－1		24図－1，27図－7	13図－1,15図－1,19図－2

4．加曽利ＥＩ式の編年的検討

廃絶されたピットが放置されたままに，自然の営力で次第にその空間が充填されて埋没，途上で廃棄物が投棄されていく過程は既述した。その充填土の在り方と出土状態により物理的に「共存」と認められる主要な土器個体は表2の如くである。共存はしてもあまり特徴のない小片は各ピットの出土遺物の項で述べたので省略する。

表2．共存する土器個体の一覧表

出土した遺構	出土状態から「共存」する土器個体	同じ遺構から出たが「共存」しない個体
P－1	3図－1.2	4図－1
P－2	6図－1.2.3 7図－2.5	7図－1
P－3	（9図－1）他の個体なし	
P－6		10図－8
P－9	13図－1.2.3	13図－4
P－10		14図－1
P－11		15図－1.2 16図－1
P－14	（19図－3）共存破片を略	18図－1，19図－2
P－16	（20図－1）共存破片を略	
P－17	（21図－4）共存破片を略	21図－5，22図－1
P－18	23図－1，24図－1.2.3 25図－1.2	
P－19	26図－1，27図－1.7	
C区1号		29図－1.2 30図－1.2.3.4
C区2号	31図－1.2 32図－3.4	
第3次のピット	33図－1，34図－2	

これらの個体のうち，土器個体にバラエティーが見られることから特徴的なセットは，P－2，P－9，P－18，P－19，C区2号，第3次のピットからそれぞれ出土した資料である。総括的には加曽利ＥⅠ式に該当するが文様の上から他地域の当該期の土器と対比させて眺めて，同じ加曽利ＥⅠ式を，古々，古，新の三期に分けた試案を提示する。

古々……第3次のピット（33図－1，34図－2）

古……P－18（23図－1，24図－1～3，25図－1～2），P－19（26図－1，27図－1．7）

新……P－2（6図－1～3，7図－2）
P－9（13図－1～3）
C区2号（31図－1・2，32図－3・4）

このステージに，表中に掲げた他のピットの土器個体を対比させれば

古々……18図－1，21図－4，19図－3？21図－5？

古……3図－1～2，4図－1，9図－1？，10図－8，29図－1～2，30図－1～4

新……14図－1，15図－1～2，16図－1，19図－2

古々，古，新の三大別は土器の器形と文様に基くもので，大まかな目やすは，

古々は，前形式つまり阿玉台の新式と共存するか，18図－1や21図－4の代表例のように阿玉台特有の口縁部が外反する深鉢形や施文時に結節沈線を使うなど〈阿玉台式〉の技法を脱しきれない土器。

古は，大木8ａ式的な技法をもつもので，口縁部に施す連鎖する「逆Ｓ字文」・「複弧文」や胴部に施す曲線文で，基本は渦状文だが南関東の加曽利ＥⅠの渦状文とは質的に異った文様。地文の縄文にはタテの指の磨消痕（後述）を伴う。これらの仲間には結節沈線を伴うものがあり（28図－3），同じ加曽利ＥⅠでも阿玉台に時間的に接近している。(註1）と見られるので相対的に古いステージに置かれるわけである。

新は，「渦状文」・「懸華文」・「波状文」や口縁部に無文帯を区画するなど，南関東の加曽利ＥⅠ式の中での新しいグループとも共通した要素をもつ土器。

古々，古，新が段階的に変遷するとはいえない。文様は流動的に変遷し，古い時期の要素が新しい時期まで残存するから，区分をする場合には文様の種類だけで先後を決めるのでは不充分であり，出土状態から物理的に共存の立証がなければならない。ところがそのような毛並みいい土器は稀少で，理論上は先後関係は成立しても実証するとなるとかなり困難である。

古々とした33図－1と34図－2は，後者が最末期の阿玉台式の要素をもつことからの推論で，半截竹管の波状文とタテの指の磨消痕とに特徴づけられる前者の土器はこれに伴う副産物だった。34図－2の仲間が当地の加曽利ＥⅠ式の中では最も古いと考えられるが，類例は，本遺跡第2次調査の際P_{14}から出土している（前掲註）他はあまり見かけない土器である。加曽利ＥⅠ式の祖形となったのではなく，加曽利ＥⅠ式の段階に至ってもまだ点滅していた阿玉台の残像いいかえれば〝前世紀の遺物〟的な土器である。だから時間的には加曽利ＥⅠ期でも土器の姿としては阿玉台最末期に位置づけられるべきものであろう。こういう土器を接触形式と呼んでおく。これに伴った33図－1はその文様が時間的に古いものであることがわかる。

古とした一群の土器において特徴的な文様は24図－1の「逆Ｓ字文」である。口縁部が内湾

し頸部がくびれ胴部が円筒形を呈する典形的なキャリパー状器形の土器に施す古い加曽利ＥＩ式のメルクマールになる文様である，といいきってよいだろう。後述のように，県内の遺跡で〈ピット内で共存〉と断定できる資料の中にこれがある。つまり，弁天池遺跡のT_1のＰ－３から出土し共存を確認された５個体のうちの１個や浅香内８Ｈ遺跡のＦ．２から出土し共存を確認された８個体のうちの１個などに結節沈線を施した「逆Ｓ字文」「Ｓ字文」が見られる。この種の文様は南関東の埼玉県でも，岩の上遺跡において，加曽利ＥＩ式の古いグループである（註２）と栗原文蔵・今泉泰之らが指摘している。本遺跡のＰ－18においてこの「逆Ｓ字文」に伴った23図－１のような大木８ａ的な曲線文に特徴づけられるカメ型土器や25図－２の土器。24図－２のような蛇行沈線・24図－３のような渦状文の一端に特異な「剣先文」をもつ文様なども〈古い加曽利ＥＩ〉のステージに位置づけられる。

新とした一群の土器において特徴的な文様は13図１・２の「懸華文」をモチーフとする口縁部文様帯や６図１～３の浅鉢形土器にみられる「渦状文」や「円孤文」などである。口縁部の文様区画帯にみられる施文には数種類のバラエティーがある。〈古〉の時期に現われると考えられる「複弧文」や「波状文」などが「渦状文」「懸華文」と共存して施文される。その意味で文様の種類がふえるのは〝累加〟的な現象であろうと考えられる。

本県における従前の発掘調査によって検出されたピットの，出土状態から見て〝物理的〟に共存し得る土器群を，文様の特徴に基いて先後関係に識別して，次図に示す。

識別の拠り所としたのは前形式の文様構成の残存度合，新しく現われた文様の存在などで，土器個体相互の横の関係つまりそれらの土器の時間的共存という意味でのセットの関係は動かない。資料として使うのは，弁天池遺跡(註３)。これまでにも何度か引用した不動院裏遺跡，浅香内遺跡，添野遺跡である。図面は説明に必要な土器だけを報告書から転載した。図面の番号は報告書のものをそのまま使った。(87～89頁)

時間的な配列をつけると

古々…添野の土拡34（？）

古……浅香内のＦ．２・弁天池のT_1Ｐ－３

古……浅香内のＦ．６

新……不動院裏のＦ．17

添野の土拡34から出土した８個体は器形と文様上の特色から四大別される。

阿玉台新式＝91図－３

阿玉台式に類似した土器＝図版12－１・図版13－２

大木８ａ式＝91図－１・図版12－４

地方的特色をもつ土器＝91図－２・４・５

阿玉台新式の91図－３は隆線にキャラピラ文を伴わず末期的阿玉台。大田原市湯坂遺跡のT_1 T_1－５区の大ピットから出土した土器と類似している。図版12－１は把手や隆線のつけ方などに色濃く阿玉台的技法が看取される土器で器面の空白を半截竹管文を併列して充填している。加曽利ＥＩの〈古々〉のステージに置くべき土器である。91図－１のフクロウの目のような突帯は本県で多く見られ，本梨木平でも６図－１・12図－１・30図－４などの類例があり〝大木的〟文様として分類しているが，〝真正〟なものではなく，むしろ〝地域的な〈古〉のステージの土器とすべきなのかも知れない。91図－５は「Ｓ字文」様の隆線を連鎖させた文様で，これと類似したグループを埼玉県では加曽利ＥＩの古い方に位置づけている。91図－４も含めて〈古〉のステージに置かれる土器である。従って添野の土器群は，理論上の編年からいえば図版12－１の〈古々〉と91図－４・５の〈古〉と

が共存していることになる。この場合,〈古々〉に阿玉台の新式が伴うのは湯坂の事例とつき合わせてみても矛盾はないと考える。この点から〈古〉のステージに置かれる大木８ａ式は理論的には〈阿玉台新式の次の段階〉で，阿玉台の新式と共伴するのは一時期ズレているので肯きにくい面もあるが，発掘による事実なので従った。報告書47頁には「…楕円形プランであるが，あるいは二つの土拡の切り合いとも考えられる。開口面では二つの土拡の切り合いと考えられたが，土拡底面は平担であり，土層図よりも明確にはなし難い」と，二つの土拡の切り合いがあり得ることを示唆しており，それならば阿玉台の新式が分離できる可能性もあるわけで，〈共存する資料〉と断定するには幾分心もとない点もあるのだが，前述の一括投棄の事例で引用したような出土状態であるので〈共存〉と信じる。

浅香内のＦ．２は発掘した田代が〝埋納〟を示唆するほどの出土状態であり（前に引用した），都合８個体の土器は共存する。と断定してよいであろう。出土した個体はいずれも加曽利ＥＩ式で，特に結節沈線を伴う３つの個体は大木８ａ式の要素が強く，施文上の特徴から〈古〉のステージに位置づけられるべきである。添野の土拡34の８個体は阿玉台の新式と共出したという理由で〈古々〉に位置づけたが，加曽利ＥＩ式の文様の特徴から見れば「大木」的な要素をもつものとして一括すべき土器であり，その意味では本稿33図－１も同じ仲間である。従って〈古々〉と〈古〉との時間差はきわめて短いと考えてよいだろう。

浅香内のＦ．２の共存個体のうち，口縁部が外反し結節沈線を伴う土器が３個あるが，そのうち10図－６にみられる「Ｓ字文」は背に結節沈線があり，同じ施文か弁天池のT_1Ｐ－３の土器にもある。10図－２の土器である。もう１つの共通する文様の因子は「懸華文」で，浅香内の10図－１と弁天池の12図－５である。弁天池のT_1Ｐ－３についての報文11頁には「ピットの底面に接し，南西壁に沿って第６図２，第11図２，第12図４・５，第13図４の土器が横転した状態で出土した。そのうち第12図４は底部が第13図４の中に入りこんだ状態で出土した。（略）。同一範疇の出土状態を呈するという意味において，第10図２，第11図２，第12図４・５，第13図４はピット内において共存していたと思われる」とあり，出土した土器を文様の上から眺めて矛盾はないようなのでこれら５個体の共存は認めてよかろう。浅香内のＦ．２と弁天池のT_1Ｐ－３とは，それぞれ共存した土器の組成は異るが，結節沈線を伴う「Ｓ字文」と「懸華文」という２つの共通因子によって，編年上は同位にランクしておきたい。

〈古〉のステージに置かれるもう１つのセットは浅香内のＦ．６の４個体である。報告書32頁によると「完形土器４個体のうち２個体は中径部直下，２個体は底部直上の出土だから，厳密にいえば４個体が同時にＦ．６に付随したのではない」とあり，これらの土器は２個ずつ多少の時間差をもって投棄された疑いもある。17図－３・４が「中径部直下」で，17図－１・２が「底部直上」の出土ということである。前者は半截竹管をモチーフとする施文に特徴があり，本稿の33図－１と共通する文様をもつ土器と考えてよいだろう。後者の17図－１は彫刻的な複弧文，17図－２は地文に撚糸文をもつ。埼玉県では撚糸文を地文とした加曽利ＥＩ式は古い時期に発現するというが，本県の場合でも同様の傾向があるよう看取される。もっとも撚糸文の地文は加曽利ＥＩの新しい段階――つまり，渦巻文と隆線区画を特徴とする所謂「南関東の加曽利ＥＩ式」で東北南部では大木８ｂ式に編年されている土器――にも現われてはいる。ともあれ17図－２が〈古〉のステージにおかれることは異論のないところであろう。17図－１は，本

遺跡のC区2号の31図－1・2に対比される。C区2号の土器群には32図－3・4のように口縁部文様に〝」〟（ダンラク文）がある。姥山見塚出土の加曽利EⅠ式の〝サブグループa〟に見られる文様で，所謂『姥山式』（註4）と称される〈新〉のステージの土器である。その意味で，C区2号のセットを〈新〉のステージにおいたのである。

浅香内のF．6の17図－1は17図－3・4と同じステージに置いてよい土器であり，「複弧文」に特徴づけられる土器が〈古〉から〈新〉まで継続する，と解釈しておきたい。F．6のセットがF．2のセット・弁天池のセットとどちらが古いか同列かという問題はにわかには決められない。同じ〈古〉の段階ではあるが，「半截竹管文」「複弧文」「地文の撚糸文」などをもつ土器が組合わされているF．6は，同じ〈古〉の文様の要素でも〝累加〟しやすい内容を持つ点で，F．2・弁天池より〈少し後出〉の可能性もある。

〈古々〉や〈古〉とする概念は当然に，加曽利EⅠ式の発生の問題と関連してくる。加曽利EⅠの母胎は何か。例えば埼玉県の花影遺跡（註5）の事例では，谷井彪が，「渦巻文は「S」字状あるいは逆「S」字状になることが多いが，一つの渦巻を連続的に重ねる」キャリパー状の土器や，「底部から直線的に開く土器で……口縁の段の下を指頭でなでて磨消し，区画している……勝坂期終末にみられる特徴」をもつ土器を，〈南関東地方では加曽利E式土器のもっとも古い土器群〉と指摘している。本県の場合は加曽利EⅠの前段階は阿玉台式で，加曽利EⅠ式のもっとも古い土器群は，阿玉台式の新式と共伴した土器（大木8a式が多い）か阿玉台式のメルクマール的技法である結節沈線を伴う土器をもってこれにあててきた。その阿玉台式は東北南部にも及んでおり，福島県の八景腰巻遺跡（註6）の事例では，長尾修が「本県中通り地方における阿玉台式土器の分布をみると，その様相は後半期のものの方が圧倒的であり，八景腰巻遺跡においても例外ではない」とし，「いわゆる側面圧痕文系の土器を主体とする大木7b式期ころの所産」の土器に「阿玉台式系土器類似の貼付文をもつ土器」などを含めて分類している。阿玉台の分布圏が広く，かつ強力であることをよく示している。

ところで，本県の始原的な加曽利EⅠ式はおよそ見当がついたとして，その母胎は阿玉台式かというとそうは感じられないのである。〈古々〉の加曽利EⅠには部分的には阿玉台の残影はあっても，基本的には加曽利EⅠの姿を当初から備えているのであって，阿玉台式との親縁関係は認められないのである。本県の資料を総合的に眺めると加曽利EⅠの母体は大木8aである。〝地元民〟であった阿玉台式の次の段階に流行したのは〝よそ者〟であった大木8aであった。この段階で生じた〝接触様式〟における阿玉台式的な施文技法は，残影にすぎず，客体でしかないといえる。この点からも所謂『姥山式』の土器が加曽利EⅠの〈新〉のステージに置かれるのは当然すぎるほど当然なのである。以上の観点から，本県における加曽利EⅠは大木8aの移植を以って開始と考える。〝祖形的〟な加曽利EⅠが考えられない以上は〝プレ加曽利EⅠ〟などという代物は，本県にあっては実在しないであろうことを予想として提示しておきたい。

本県の加曽利EⅠ式の〈新〉のステージに位置づけられるセットは不動院裏のF．17である。このピットから出た土器は都合10個体で発掘者の田代寛は報告書31頁で「……以上の土器は1つのセットとして把えてよいと思われる。器種は壺1，甕1（12も元は甕らしい），深鉢6（復元不能1点を含む），不明2……」と述べている。この10個体の土器群は三つのグループ

に大別される。つまり，

大木８ｂ＝10図－９・12，11図－15・17

加曽利ＥＩ＝10図－11，11図－16・18

地方的特色をもつ土器＝10図－10，11図－13・14

この三大別のうち加曽利ＥＩとしたのは南関東における従来の加曽利ＥＩで，本稿で述べている〈新〉のステージに位置するものである。11図－16は，今時の梨木平４次調査のＰ－11から出土の15図－１やＰ－７出土の11図－11などとも共通する「波線文」に特徴づけられ，この「波線文」が〈古〉から〈新〉へ継続すること証明している。このＦ．17のセットを以って本県の加曽利ＥＩの〈新〉の段階はそれが実在するキメ手を得たといってよい。従来まで編年上の位置が定まらず，理論的には，大木８ａが〝従来的な加曽利ＥＩ〟に先行するのだから大木８ｂはそれに引きずられて一形式繰り上るべきなのであって，少くとも大木８ｂ＝加曽利ＥⅡではなかろう――という予想は立っていたのだが，それがピット内の土器のセット関係によって立証されたことになる。大木８ｂ式における胴部文様の主流は渦巻文をモチーフとした曲線文で，それが沈線でも隆線でも２本ないし３本のセット２併行施文されていることで，それは総括的な意味での加曽利ＥＩ式にみられる文様の共通因子として注目されるべきであろう。梨木平の〈古〉の段階のＰ－18出土の23図－１やＰ－19出土の26図－１・27図－７などの胴部施文と不動院裏Ｆ．17の10図－12・11図－17の胴部施文は技法上は連続するものであるが，セット関係に立脚しない限り断片の資料ではその新旧の決定は下しがたい。本県の加曽利ＥＩの〈古〉・〈新〉の対比がここまで進んできた以上，「大木的」などの大雑把な分類ではすまされなくなりつつある。

端的に書けば，今時の梨木平４次調査における土器編年上の成果は

〈古〉……Ｐ－18及びＰ－19の各ピット

〈新〉……Ｐ－９及びＣ区２号の各セット

ということで，その編年上の位置を既に発掘されてセット関係が明らかになっている弁天池・添野・不動院裏・浅香内の各遺跡の土器群に対比させて試案を立ててみたわけである。包含地遺跡ではプライマリーかそうでないかの区別がつきにくく，その意味で〝限定空間〟であるピットの出土遺物は貴重である。本稿ではその貴重な資料は田代寛の発掘成果によるものが大部分であった。その労を多とし敬意を表したい。

註１．「栃木県北部にみる縄文中期土器の変遷」海老原郁雄，きざし３号（宇中女高研究集録）48年３月。

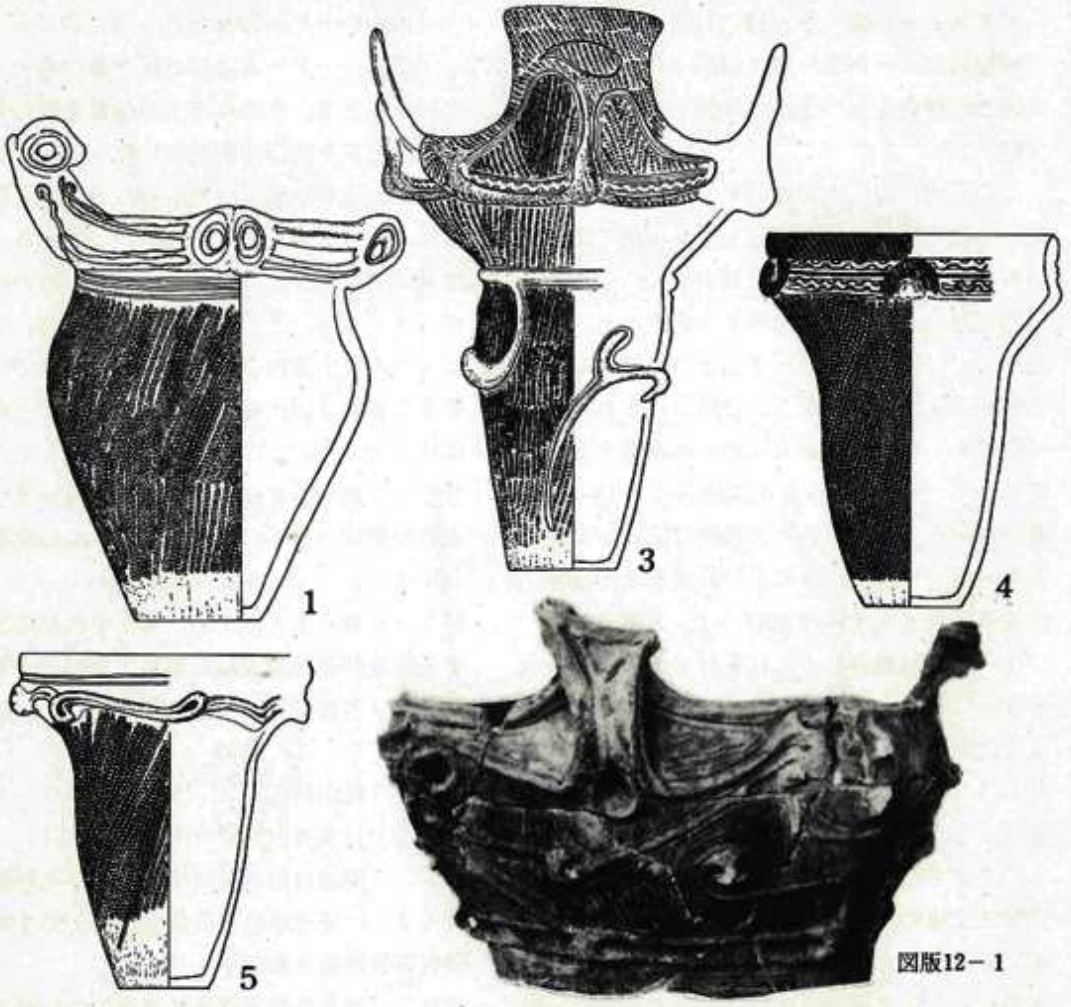
註２．「岩の上・雉子山」埼玉県教育委員会，埼玉県遺跡発掘調査報告書第１集48年３月。

註３．「芳賀町弁天池遺跡調査報告」宇都宮大考古学グループ。1970。

註４．「姥山貝塚」ジェラート，グロート・篠遠喜彦，日本考古学研究所　27年８月。

註５．「関越自動車道関係，埋蔵文化財発掘調報告Ⅰ」，埼玉県教育委員会，埼玉県遺跡発掘調査報告書第３集49年１月。

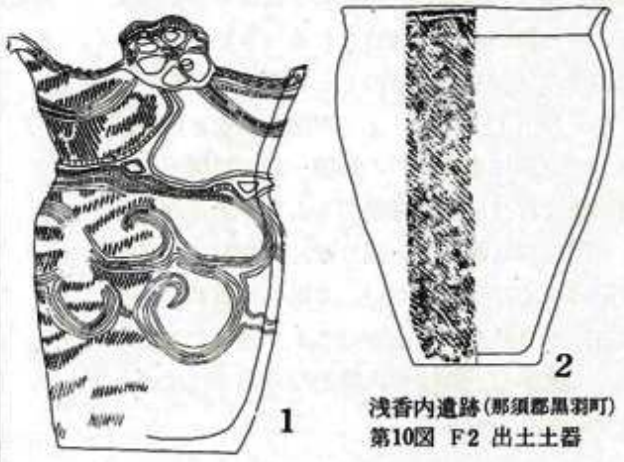
註６．「東北自動車道遺跡調査報告」福島県教育委員会，福島県文化財調査報告書第47集50年３月。



91図 土壙34出土土器

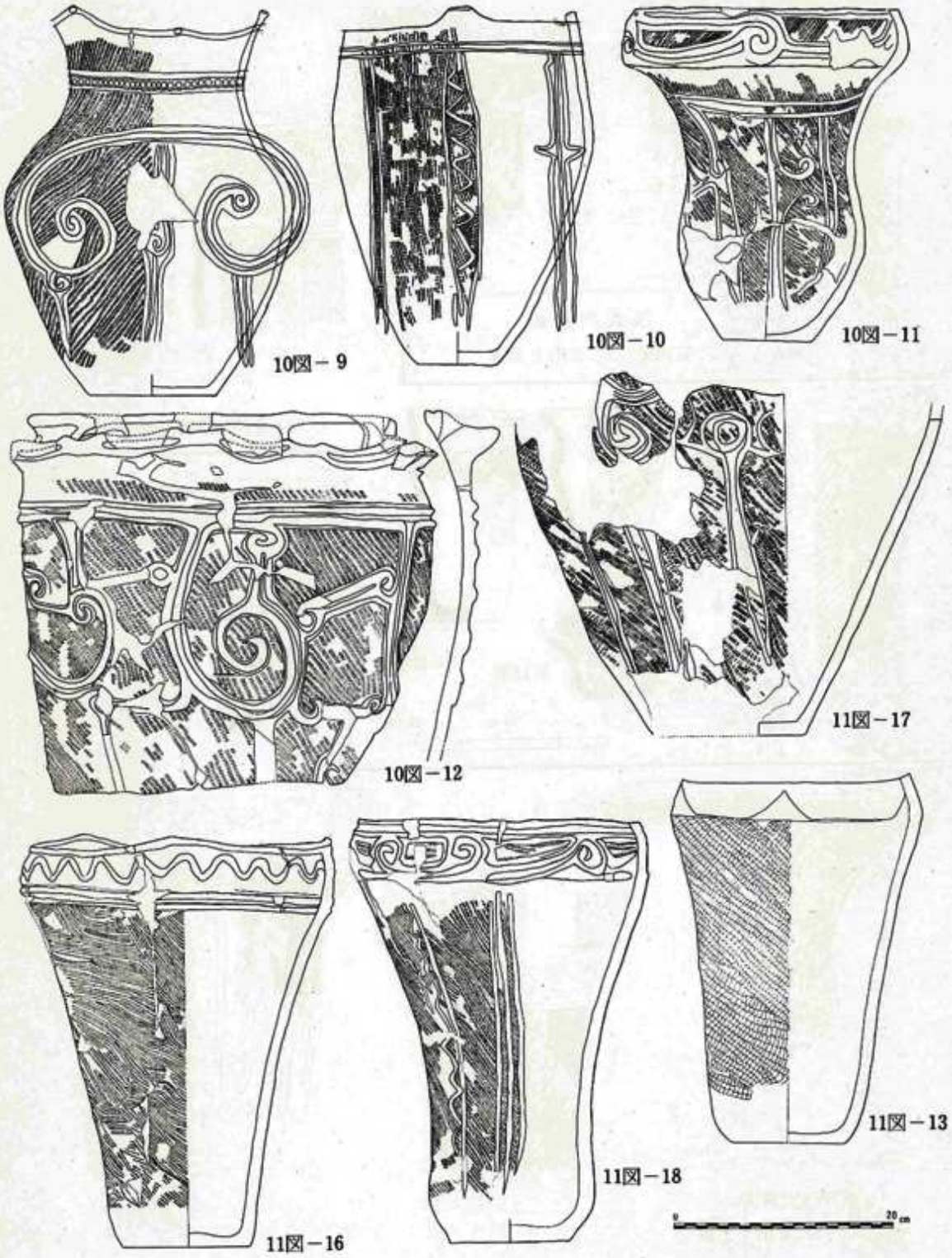
図版12－4

添野遺跡（芳賀郡市貝町）出土土器



浅香内遺跡（那須郡黒羽町）
第10図 F2 出土土器

第4図 添野遺跡及び浅香内遺跡土器実測図



第6図　不動院裏遺跡（那須郡黒羽町）土器実測図

第5図 浅香内遺跡及び弁天池遺跡土器実測図